330
M016

0018655000

③

0018655-000

３３０－Ｍｏ１６ウ

皇道経済学

茂木清吾・著

文松堂書店

昭和１９

ADA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第６７条の規定に基づき、平成１２年５月１５日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

271 v

330
Mo·16

皇道經濟學

茂木清吾著

文松堂版

昭和九年

975
143

序

著者が本書に皇道を冠したのは一應は烏滸の沙汰と考へられないでもないが、經濟の思想面に重きを置き、我が肇國精神である個即全、全即個、大我又は一如を發足點とし、其の思惟の一貫を企圖せる理由で、皇道經濟學の命名、是認されて然るべきを想ふのである。

我が國に行はれる西洋傳來の經濟學は利潤追及と個人主義を既定事實として發足し、さる發足點の理非曲直の研究をば倫理學又は心理學に委し去るの暴を敢へてしたのである。

吾等は本書に於いて今や建設の急がれる新秩序下、經濟活動は利潤のみでなく他に心的崇高な動機あるを主張するのであり、既定も推定もなき立體的研究を展開せんとするのである。

舊經濟學は經濟活動に政治の介入を忌避したのである。Least government the best government と言つて政府は經濟問題を自由に放任すべしとしたのだが、私は國家意志が大きく經濟に滲透するのが當然であり、時代はさやうに動きつゝあると信じ、皇道經濟學は逞しき政治力を受け入れる態度を執つたのである。

寔に舊時代の政治は專恣・專橫なる少數者の手にあつた。其の橫暴强奪を避けん爲には政治排斥の理論もあり得やうが、それが國民意志の忠實なる代表者であ　限り政治と經濟の併進、抱合は、むしろ歡迎してよいのではなからうか。即ち皇道經濟學が、精神力と政治力それから物財との「むすび」に至大な注意を向けた理由である。

惟ふに經濟學が社會科學として體系づけられてより約百八十年、はやくも其の根本的建替の必要に迫られるのは、學の基本理念に推定があり、而してその推定に瑕瑾が發見されたからである。

皇道經濟學は其の基礎に不動不搖の「個即全」「大我主義」なる時間的、空間的世界大の敷石を据ゑた。もし其處に聳立する造營物が完きを得ないならば其の責建築技師たる著者にあるのである。

私は實際經濟の上では、あるひは專門家として許されるかも知れぬが、經濟の學者としては甚だ疑はしい存在である。併し、我が邦の先達學者が未だ嘗つて獨自の學說を創めずひたすらに西洋學說の批評、祖述と異人學者等の姓名羅列をのみ事とするに慊らざるものがある。且つ又經濟學が極めて難解であるかに見える一部學者の態度も好まないところがある。

卽ち淺學菲才を省みず敢へて皇道經濟學を構想し、新しい時代の新しい經濟學の一圖式として之を世に問ふの冒瀆をなした次第である。

昭和十九年正月

大森の寓居にて

著者識

目次

序……一
はしがき……三

第一部　經濟思想論

第一章　新秩序の要求……一〇
第二章　清算される舊秩序經濟學……一二
第三章　經濟現象の二面……一六
第四章　經濟的思想……二一
第五章　自然……二六
第六章　經濟の倫理性……三〇
我が國先進の所說……三三
西洋の經濟道義論……三三
第七章　經濟活動動機論……三六
本能的勞働慾……三七
尊德の四綱領……三八
本能的善の憧憬……四〇
本能的物質慾……四二
先入主的物慾偏重……四四

第八章　經濟學の定義……四七
經濟　財……五二
財の離合集散の法則——交換……五三
財の離合集散と分業……五五
經濟學は物心兩面の學問なり……五七

第二部 經濟學の問題

第一章 經濟主流學派の一瞥……六二
フアシズム……六二
資本主義……六五
社會主義……七一
共產主義……七四
歷史學派……七五
オーストリヤ學派……七七
第二章 經濟原理と經濟政策……七九
第三章 經濟發展の階梯……八二
國有財產制……八三
封建時代……八四
日本資本主義進行の經路……八六

第三部 物的經濟原論

第一章 はしがき……一一六
第二章 經濟財と富……一一八
自由財と經濟財……一一八
抽象的經濟財……一一九
生產財と消費財……一二〇
享樂財と福利財……一二一
富と資本……一二一
土地と資本……一二三
第三章 價値及び價格……一二四
價値論のあり方……一二四
價値構成要素……一二五
物の効用……一二六
西洋の價値學說……一二七
價格……一二八
統制價格と自由價格……一三〇
交換……一三一
自由物價の鍵……一三三
價格の無軌道性……一三四
適正價格……一三五
第四章 國家計畫經濟……一三八
公・私一元の發足點……一三八
國家計畫の理論……一三九
國家計畫經濟と彌縫的社會政策……一四〇
國家の指導的役割と保護的態度……一四一
國土計畫……一四一
重要產業に對する國家計畫……一四三
國家の中小產業統制……一四五
保險制度の徹底……一四七
第五章 廣域經濟……一五〇
ブロック經濟……一五一

自給自足と高度國防經濟……一五三
廣域經濟……一五四
大東亞共榮圈……一五五
第六章　消費……一五七
經濟學上消費の位置……一五七
消費の課題……一五九
消費と限界効用……一六〇
消費實踐上の法則……一六〇
消費と貯蓄……一六一
消費向上と體位低下……一六四
貯蓄……一七〇
第七章　企業……一七三
第一項　企業の國家性……一七三
國家意志と企業……一七三
國家企業と職員……一七四
指導者原理……一七五
第二項　企業形態……一七六
國營・公營企業……一七七
專賣企業の官營……一七七
國家資本……一七九
國家企業と從業員……一八二
政治的策動……一八三
營團及び金庫……一八三
營團資金……一八六
營團の分野……一八六
國策會社……一八九
統制會組織……一九三
統制會理念……一九三
統制會の現態と下部機構……一九五
中小企業統制……一九七
我が中小商工業……一九七
第三項　私企業形態……二〇二
個人企業・合名・合資會社……二〇二
有限會社・株式會社……二〇四
第四項　企業合同……二〇八
トラストとカルテル……二〇九
コンツエルン……二一〇
ホールデイング會社企業……二一〇
平面的・立體的企業合同……二一一
產業組合……二一三
會社經理統制……二一四
第八章　生產……二一八
生產の種類及び要素……二一八
第一項　自然——土地……二二〇
收穫遞減の法則……二二一
人口論……二二一
第二項　勞働……二二四
勞働の藝術化……二二四
勞働の不平不滿と勞資協調……二二六
勞働問題……二二八
勞働の量と質……二二八
勞働と技術……二二九
勞働と分業……二二九
勞働の時間……二三〇
勞働組合……二三一
第三項　資本……二三四
資本の定義……二三四
資本の種類……二三五
收穫遞增の限界……二三七
第四項　政治……二三八
第九章　生產各論……二四二
はしがき……二四二
第一項　農業……二四三
農は國の礎也……二四三

農業の六大性格……二四五
農業の組織……二四九
個人單位農の混沌……二五一
收穫遞減の法則……二五一
世界は農業に始り農業に終る……二五三
第二項 工業……二五五
工業の分類……二五五
工業立地計畫……二五七
工業疎開……二五八
工業統制……二五九
收穫比例增加……二六〇
第三項 商業……二六二
商業の範疇……二六二
商業道……二六三
商業形態……二六五
食糧營團……二六六

民需品配給業形態……二六七
百貨店と連鎖店……二六九
問屋とブローカー、月賦制度……二七一
戰時下商業の變質……二七三
第四項 交易・貿易……二七五
交・貿易の制約……二七六
交易と貿易……二七六
貿易と景氣……二七七
政治先行貿易……二七八
日本交・貿易のあり方……二七九
第三國貿易……二八二
多角求償主義貿易……二八四
貿易機關……二八五
第五項 金融……二八六
銀行の與信と受信……二八七
金融計畫……二九一

第六項 運輸・交通……二九三
運輸と國運……二九三
運輸交通の今後……二九五
運輸と速度……二九九
運輸と燃料……三〇〇
第十章 所得……三〇四
所得の新意義……三〇四
所得の種類……三〇五
所得の倫理的基礎……三〇六
地代……三〇八
利子……三一一
賃銀……三一二
絕對賃銀、相對賃銀……三一三
國家表彰……三一五
利潤……三一九
適正利潤……三二〇

絕對利潤、相對利潤……三二一
利潤の限界……三二三
國家所得……三二五
不當所得論……三二七
第十一章 貨幣……三三一
はしがき……三三一
通貨……三三四
本位貨幣……三三五
金爲替本位……三三八
紙幣本位……三三八
補助貨……三三九
法貨……三三九
惡貨良貨驅逐法則……三四一
信用……三四三
恐慌とインフレーション……三四五
貨幣を繞る諸問題……三四八

皇道經濟學

目次

屈伸貨幣…ラッバー貨幣…管理貨幣……三四八
信用通貨の位置……三五一
國際通貨……三五三
金の運命……三五三
虛空貯蓄……三五五

はしがき

十八世紀の終り四半期に序幕を切つた産業革命は英吉利に富を與へ、世界にアダム・スミスの資本主義經濟學を贈つた。資本主義經濟が吾等の物質的生活を支配したのはそれから約百八十年、今や其の功罪半ばする使命を了へて歴史の頁を繰らんとしてゐる。

資本主義が人類に貽す巨歩は物質文化にある。人間生活の向上、厚生福利の増進への貢獻などと其の内容項目を列擧すれば多岐多端である。また資本主義の與へた刺戟は科學の進暢、科學技術の昂揚となり、原因結果が繞り廻つて資本主義自身の行進に拍車をかけられる結果となつた。

英吉利に始つた資本主義經濟學は其の進程に於いて社會主義、歴史學派、限界功用學派等の横槍や批評にも拘らず、途上幾多の支流さへ併せて亞米利加合衆國に流入、そこで百花撩亂の巷と其の下に亂舞する人々の社會を實現したのである。

驕る平家は久しからず、資本主義はその功績の一面にも拘らず多くの缺陷と不合理性を曝露したのである。亞米利加は富みに富んで世界を我が物顔に振舞ふに至り、今や槿花一朝の夢を辿らんとしてゐるのである。五人毎に一臺の乘用自動車を有し、六人毎に一個の電話を所有し、電氣冷藏庫、ラヂオ、ピアノを見ざる家庭なき程の物質文化發達の中に、一方政府救濟資金に衣食したもの一九三〇年來數年が間、數百萬人に上つたのは一體どうしたことか。

資本主義經濟跳梁の最高峰に於ける亞米利加は一九二九年に、國民所得九百億弗に達し（戰時現在の國民所得は千三百億弗に上る）其の中に百萬弗以上五百萬弗の所得稅を支拂つたもの五百十二人、五百萬弗以上の所得稅納入者三十八人と註されるが、その半面には失業して家族を飢餓に晒さねばならぬ窮境にあつたもの實に千二百萬人、家族を併せて窮民人口四千萬人に上つたのである。

アングロサクソン式資本主義のもと國は富み少數國民は繁榮したが、大衆國民は公平なる所得に均霑し得ず、徒らに制度を呪ひ、世を讒り、人を羨み、他を嘲つて辛うじて活きるのみである。

一體それが何の惠ぞ、何の幸ぞ。而して功績の蔭にこの悲慘を殘す資本主義は大手術を施さるべく吾等の手術臺に横たへられたのである。日本と獨逸は今や其の病源を診斷して之を知悉し必要なる外科手術を加へつゝある。更に內科的投藥も研究されてゐる。

而して吾等の投藥は病體資本主義の壞滅を意圖するのではないが、併し其の顏面手術に加へて內臟的變革をすら斷行せんとするので、洵に容易ならざる救治手段の加へられつゝあるを認識せねばならぬ。

資本主義の病的禍根は經濟的活動の中軸動機を利潤追及に置いた點にある。遮二無二物質利を追つて邁進すれば個人富み、國家も亦富むと考へたのが資本主義經濟學である。而して病源こゝにありと言ふのが皇道經濟學なのである。

成程利潤を追つてもよい。併しそれは程度問題であり經濟的動機としてはほんの一部分でしかないのである。我が皇道主義經濟學は人間の本能が經濟活動を起さしめると定義し、本能を分けて（一）勞働慾、（二）善美の憧憬、（三）物質慾などとなし、之等慾求の活動して物を人生目的に拉致し來るところに經濟があるのであり、從つて「慾求」なる心的現象の研究を以つて經濟學の一翼としたのである。經濟學は物の學問也と言ふ勿れ。新しい世界觀は雄渾なる八紘一宇の思想に立つのであり、この精神の貫き碧はぬ學問は吾等に何等交涉を持たないのである。殊に經濟學なる人文科學に心的研究を缺くと言ふは眞にあり得べからざるところなのである。

即ち皇道經濟學は道義に立脚し、在來經濟の假定せる「利潤」觀念をも具中に收めて之を咀嚼するのである。而して研究を物心兩面に進めて遂に强力なる政治力が新しい經濟相を造りつゝある現實を發見しようとするのであり、其の道程に於いて自由主義の殘骸を見又は資本主義の再診斷を行はんとするのである。

皇道經濟學は努めて其の體系を先進學徒の辿つた途に求めたつもりだが、時々は前人未踏の密林地帶に分け入つた點もある。以下はその著しいものである。

經濟現象討究に心的一面を容れた私の態度は前に述べた。經濟活動動機論に本書の一章が割かれる所以である。また經濟の倫理性やら、私有財產制の日本的性格などの論じられてゐる理由も均しくこの形而上的經濟思想論を取り上げるところから由因する。

本書を一貫して政治先行の理論及びその派生的滲透が企圖されてゐる。政治的意力の加はるところ、計畫・統制・管理が經濟活動の到る處に發見されるが、それも其の筈、私は國家意志に依つてのみ新時代の經濟があるので、是までの個人的自由主義は大乘的自己解消を餘儀なくされたと見るからである。

皇道經濟學は自然主義をも物心兩面から解說して、自然はその儘にして善、眞、美なりとしてゐる。兎角物だけに限局される自然は放縱・所恣・我慢・亂打・不秩序などと聯想される。「敎育せず加工せず自然に委せば碌なことはない」と屢々吾等の耳にするところだが、この宣告は物の面をのみ觀た自然に對するのであつて、その敎育せねばならぬ、加工しようと言ふ心の慾求、希求も亦自然なのだと判れば疑問は直ちに解消し、自然に對する誤解もなくなるのである。

さうだ、物心兩面の自然を止揚するところに正道があり、大道があり、神性があるのだ。私が自然に倫理性がある。自然は向上すると言ふのはこの點である。

經濟學は社會科學であるのは何人も是認する。社會科學なるが故に無形・無象の現象を問題とするのであり、無形なるが故に、どこからは動機でどこからが政策であるかの區別をつけ難いのである。卽ち私は政策と原理の交錯、混淆を是認してゐるのである。

敢へて異を好んだのではないが本書物的經濟原論の部で私は以下列擧する項目について特別の注意を拂ひ、ある程度獨創の見解を披瀝したのである。

不當所得對策
文化は農に始り農に終る
鑛物文化の生命（運輸と燃料）
工業にも收獲遞減原則
人口論無用說
絕對貨銀・相對貨銀論
國家資本基金、重要産業と國家政治力の關係
指導者原理の行過ぎ警戒
商業道の提唱、中小商工業論
貨幣についての新構想
運輸と飛行機の役割
國際通貨、金の行方
外國貿易の新形式

其の他に皇道倫理——八紘爲宇・家族主義・個卽全——の滲透を目ざして立論し從來の考へ方を批評した個所は甚だ多いのである。要は個人主義・自由主義から百八十度の轉換を敢へてした新秩序理念の一貫を志向したのが、皇道經濟學となつて表はれた次第である。

日本肇國の精神は日本なる冠詞をとり去つても世界に敷衍して存在するのである。萬邦をして其の所を得せしめ萬民をしてその生を樂しましめる雄渾にして崇高な理想は人生の眞諦である。之を日本の世界觀と言ふよりは、日本に出發せる世界の世界觀であり、其の儘にして眞理そのものであると斷言出來るのである。

ある意味では肇國の精神で進むと云ふことは復古主義である。世界の向上發展は前進であるべきに何故の復古後退ぞと言ふ人がある。併し吾等は歷史は繰返すことを忘れてはならない。繰返し繰返して生成發展して止まざる姿が人生であり世相である。喩へて見よう。雪達磨は轉がる毎に大きくなるが其の實體は永久に雪である。眞理は時と共に光りが加はり千象萬相を示現するが眞理たるに異變はないのである。

波には千波萬波がある。併し其の實體は水である。森羅萬象悉く差別相を呈するが、其のもとは一つである。科學的に物體を探り究めて原子、電子、ポジトロン、ノイトロンと進んでも窮極は一元に歸するやうである。差別卽無差別である。

「かき寄せて結べば草の庵なり解くればもとの野原なりけり」と良寛上人が詠じけん、其の心は一元論である。然り肇國

の精神はこの一元論であるので時間と空間を超越し、復古も懐古もないのである。

はしがきの終末に「例言」に代へて二三を加へて置かう。即ち書中屢々使用される大我主義なる文字である。大我は皇道であり大乘である。云はゞ小我（個、私）の膨れたものとの意である。家族主義の擴大が國家でありそのまた敷衍は八紘一宇の境地であると云ふので、個人主義が個を單位とし個の理學的總計が國家だと解するとは大きな相違があるのである。また時々全體主義なる言葉が代用されてゐるが、それは現下の通用語であるが故で大我と同義語と解すればよい。

私は努めて自說の展示を圖つて見た。我が國在來の先覺經濟學者の書物を播げて見て、其のどれもこれもがと云ひたい位西洋學者の名及び其の所論の飜譯であるのに失望したので敢へて其の逆を行くのではないが、可能なだけ同樣な手續を省略した。

本書研究順序に從來經濟學に見るやうな行き方もある。例へば生產、企業、消費、價値と云ふやうに昔ながらの配列及び用語があるが、それは經濟學なる概念形式は既存するのでそれを便宜利用したので、それの破壞は私の意圖ではないのである。フリードリツヒ・リストも其の歷史派經濟學を書くに當り英吉利古典學派批評の形式を執つたが、其の意のあるところは同一であると想ふ。

第一部　經濟思想論

第一章　新秩序の要求

皇道經濟學は新秩序下の經濟現象に法則を發見し、更にその應用實踐に規準を提供せんと意圖するのである。皇道經濟學は大我主義經濟學、全一主義經濟學であり世界の經濟活動が現在その線に沿ふて進みつゝあるを信ずるのである。

皇道經濟學は自由主義を拒否し世界の經濟現象を律するに大我を以つてするが、それは國家社會主義でもなく、尚更共產主義の如く私有財產を否定したり個々人を國家の機械的一分子と稽へるものではない。

とすれば、皇道經濟學は何等過去の學說に捉はれるものでなく、自由奔放前人未發の境を行くものの如くであるが、さう無軌道が稽へられる筈はないので、著者は新經濟學を皇道經濟學と命名した以上最先にその定義を披瀝しても良いが、もう少しく讀者學徒と共に現時經濟現象界の疑義、新事態、其の他懸案の多くを研究說明して然る後の事としようと思ふ。

所謂經濟學の構成は是迄のところ幽靈のやうなものであつた。物財を對象とし、それに價値を發見し、其の生產を急ぎ、自由主義の名のもとに合法的、合理的（？）に其の分取强取を急いだのであるが、それ等一聯の行爲に精神力がなく、精神的合理性もなかつたのである。

人が走らうとする時いかに急げばとて、中空を飛ぶ事は出來ないので、必ずや足を大地に着ける必要がある。經濟學が思想的根據を缺いたのは丁度此の走者の愚を學ぶやうなものだ。勿論正統學派でも歷史派でも全く思想的に注意が拂はれなかつたと言ふのではないが、比較的さる方面を輕視したり、あるひは經濟學の道義的裏づけは他の專門學者をして研究せしめよと言つた輕い態度であつたと解すべきである。

皇道經濟學は先人の轍に倣つて、物財を人間との關係に於いて研究する事勿論であるが、同時に心理的經濟現象をも一學問體系の中に取り入れようとするのである。

かうした私の態度は殆んど自由主義經濟學の生命のやうに考へられた學問研究方法の上に於ける分業を無視するのであるが、一體分業の理論も現在では行き過ぎて居るのであるし、分業を强調せんが爲に皇道經濟學の大宗とも言ふべき社會有機性の動きに支障あらしめるまでもないので敢へてラスキンやモリスに眞似るでもないが、私は一應經濟學の整備統合を斷行し、經濟學は心的方面にもあるとの立場から、經濟思想論の分野に進み入るのである。乃ち立體經濟學の樹立を意圖するのである。（ラスキン及びモリスは文明批評家であり、藝術觀經濟批評に其の鋭いメスを揮ひ當時奔湍の勢を呈した資本主義經濟の牙營に迫つたのである。）

第二章　清算される舊秩序經濟學

皇道經濟學は新秩序の要求に依つて起る。新秩序は時の必要と「必然」の動きに促されて生起せる所であつて、其の中の經濟に關する部分を取出し考察を加へるのが新經濟學に課せられたる命題である。

自由主義經濟制度は十九世の終り頃から二十世紀にかけて幾多の缺陷を暴露したのであるが、英國ではジョン・スチュアート・ミルなどの學界巨匠に依り社會政策なる補强工作を享け、獨逸に於いては社會政策協會のシュモラー博士及びクニース等の主張に基づく實踐施策に相當强力適切なる彌縫工作を受け二十世紀上四半期を辛くも經過したが、その崩壞はやくから豫想された所である。

第一次世界大戰後亞米利加は、ある意味での無鐵砲政策で無軌道景氣を出した。戰爭中擴大された生產機構を其の儘存置活用せん爲戰敗國獨逸に金を貸しその貸金を基として米國製物貨を獨逸に賣つて出たのである。時の大統領クーリッヂは最小の政府容喙は最良の政治也 (Least government the best government) と曰ふ資本主義の產業政策を執り古き重商主義貿易を許容した結果、線香花火的、資本主義末期的好景氣に國民は陶醉したのである。然し亞米利加の斯かる行き方は一九二九年の恐慌に依つて完全にその謬妄が正され、當然の結果として歷史上未見の不景氣期に沒入したのである。

後章で詳しく說くつもりだが、一體恐慌頻發の經濟社會は完全なものである筈なく、貧富の差激化する社會に不安の空氣充滿する姿態は正に急角度の轉換を必要とするものである。一九二九年の恐慌直前亞米利加には所得稅百萬弗以上五百

萬弗迄の納入資格者五百十二人を數へ五百萬弗以上の所得納稅者でも三十八人に上つたのであるが、反面當時米國の農夫一人當り年收百八十三弗、一戶平均八百五十五弗と言ふみじめさであり、然も一戶年收四百弗以下の飢餓線上に彷徨する農家四百萬戶を數へる社會的矛盾が存在したのである。

恐慌後の米國はルーズベルトの放慢な救濟政策の推進にも拘らず一九三四年には失業者一千二百萬を下らず、一九三七年には景氣の好轉を謳はれたが尙失業群七百萬を上下したのである。それに對するルーズベルトの政策は表面極めて過激な統制社會政策であつたが、富豪は依然跋扈し、課稅の累增、社會保險加重の負擔に堪へて、富める者益々榮える樣相を抹殺する事は出來なかつたのである。

國際的にも同樣の事が言へるのである。近世史の始め重商主義國際通商に於いてひとり英吉利のみ富み榮えた。それよりさき和蘭、葡萄牙の繁榮を見たが其の永續性に於いて英吉利は斷然群を拔いたのである。佛蘭西及び獨逸は資本主義國家としての立ち後れを自覺しつつも尙英吉利との競爭に於いて國際市場に乘り出し、相當の成功を收め得たのである。我が日本は資本主義國家としては最後に起ち上つたのだが、明治維新に前後して輩出した明識の政治家等の指導よろしきを得、昭和に入つては獨り東洋の先進資本國たるのみならず、世界の舞臺に覇を唱へんとする態勢すら熟したのである。

北米合衆國に至つては第一次世界大戰以來完全に世界に雄たる資本主義國家となり了り、英吉利を押へて一九二九年の大恐慌にも拘らず、其の所有する黃金は世界保有高の八〇%に上り、國民收入一九三三年不況のどん底にあつて尙四百五十億弗と稱せられ、一九三九年第二次世界戰の雲行頗る險惡なるに際しても、國民收入千百五十億弗に上つたのである。勿論內部的には資本主義崩壞の氣運頻りに動いたのであるが、國際的には、世界の經濟力は亞米利加にのみ集中し英吉利の傲岸を以つてしても之に憩伏を餘儀なくさせられたのである。

米國は自己の繁榮を帝國主義の所産とは言はない。英吉利は帝國主義重商主義を以つて先づ世界制覇に乘り出し、ついで民主主義なる比較的民衆に懇へる軟かき言葉を以つて己が野望を包んだ。亞米利加も民主主義を標語として經濟的に世界を我が物顏に押し進んだ。

以上兩者はアングロサクソンの兩翼であるが共に正義の美名に便乘するに妙を得、其の蔭で他民族の犧牲に於いて己が富貴を夢みんと策する點、兄たり難く弟たり難きものであつた。今次戰爭もその根源に遡れば眞因を玆に發見するのであつて、國際的搾取の彼等、寔に許す可からざるものがあつたのである。

アングロサクソンの專委橫暴は第一次世界戰以後の世界諸國を分類して、持てる國と持たざる國の一群とに色別したのである。日本、獨逸、伊太利其の他西班牙、土耳古の如きは後の群に屬し世界改造に邁進、その中我が邦を始めとする所謂樞軸國の驟起となつたのであるが、是等國家群の他に、植民地として又は半植民國として英米に隷屬するかに見えた國々は十を以つて數ふる程であつたのである。東洋にあつては印度、支那、ジヤワ、泰、比島、マライ、佛印、ビルマ然り、其の限りでは南米諸國の大部分は同樣な運命下に蠢動をつづけたに過ぎない情勢にあつた。

世界秩序がそれで良からう筈はない。とりわけ人間の生活面を分擔する經濟がかかる不平等を受け容れつづける理由はないのである。玆に於いて新體制を目標にファシズムが動き、英米自己中心の民主主義と衝突して現在の大戰を捲き起したのである。我が國はファシズムを俟つまでも無く肇國の精神に於いて既に思想的用意と素地は完備して居たのであり、世界の萬民をして其の業を樂しましめ其の生を享けしむる爲、獨逸及び伊太利の全體主義と相呼應して起つに至つたのである。

いづれは破壞されずには濟まなかつた舊秩序の破棄には今次大戰を必要としたのであるが、然し其の痕の建設正しきを得、民その生を樂しむを得ば犧牲の大は問ふ所ではなく、吾等は其の意義深長なる建設の爲經濟學の任務の重大なるに今更の如く氣付くのであり、而も課題の難易に依つて吾等の態度を一二にしてはならず、一路目的達成の爲の研究に邁進せねばならぬのである。

第三章　經濟現象の二面

經濟學は經濟現象の學問である。經濟現象は物の上のみに起ると言ふのが古典學派を主流とする經濟學の主張であるが、吾等は經濟には物的現象と心的現象があると言ふのである。

財が人間生活又は國家活動との關聯に於いて動く時そこに經濟現象があるのである。物があつても人生や國家生活と沒交涉であつては、それはただ物でしかない。併し其の物を吾等が慾求し、慾求滿足の行動に出づる時そこに經濟現象が起きるのである。

卽ち慾求滿足の爲の勞働が先づ動く。慾求充たされて特定物獲得に成功すれば、つぎに考へられるところは其の物の處理についての目的思案であらう。あるひは其の目的は物の獲得以前に勞働動機となつてゐたかも知れん。さて以上の場合物に能働した人間活動が確かにあつたので之を經濟現象と解するのに何人も異議はない。併し物を獲んとした動機や、物の處分の目的研究など形而上的な心的現象は經濟現象ではないだらうか。私は然りと言ふのであるし在來の經濟學は否と答へるのである。

舊經濟學は精神方面に研究の歩を進めるのを拒否するが、經濟活動に心的側面はないと言ふのではなく、たゞさる研究は他の人文科學に委せて可なりとするのである。而してかかる經濟學に沒頭する學者等は知らず識らず、道義などの心的現象をいつしか經濟から引き離し、之を忘れ去り、經濟學をば一個の冷血、慘忍な學問としてしまつたのである。

經濟學を物的現象のみの範疇に局限した結果、其の研究過程が自然科學類似のものとなり人生との關係に於いてのみ眞理を把握する經濟學は、國家とも人生とも沒交涉なものとなり終つて廿世紀も半ばに及ばんとしたのである。

私の經濟學に皇道を冠する所以は、經濟現象の中に人生との「關聯」又は「むすび」を考慮に入れんとするからであり、其のつなぎは生命を有し熱を包擁すると言ふのであるのである。

然り其の「關聯」と「むすび」とは經濟的價値として取扱はれ得るものと單なる心的經濟現象として積へられるものとある。例へばサービスは前者であり經濟的意慾、經濟活動動機などは後者に屬する。經濟學を單なる物の現象法則となし又は物と價値の運動と解したのは過去の見方であつて縱に一貫せる而してより完備せる學問體系を建てる上から私は斷然心的現象をも經濟現象の中に收めて行かうとするのである。乃ち斯くする事に依つて、經濟學は人生に始り人生に終るので、經濟の道義性、向上性などの會得も比較的容易に贏ち得るのだと言ひ得るのである。

卽ち財が獨自の理由で動くのではなく、人間生活の要請に應じて動くのである以上、その動きの機因がなくてはならず、其の機因が人間からするものであるのは論理の自然である。從つて財と人間生活の「つなぎ」は、語を換へて、人の經濟活動動機と曰つて差支へないのである。私は本書第一部第六章に於いて經濟活動動機の樣々のあり方を論じて居るのであるが、要するに吾等の財慾が純眞なる「道」に導かれて進めば、結果は經國濟民となると結論せんとするのである。

私の「道」については次章で說明するのであり、眞に哲學的又は宗敎的思索として取扱はず、生活學と考へるところの經濟學に之を採り入れるので、此の點皇道經濟學の特異なものの一つと主張するのである。

具體的に喩へて見る。人が物を欲しいと考へ其の物を勞力その他の代價を支拂ふ事に依つて占有獲得するのは經濟行爲であり、そこに經濟現象が起つたのである。併し同時に其の獲得せんとする物が、已を富ます事はあつても健康的に有害

であつたり、精神的に不快感を誘發したり、且つは國家としてその獲得を希望せざるやうな場合、此の經濟行爲を取消しあるひは行爲未だ實行に移ちざるに先だち「考へ直す」態度、私はそれをば經濟的思惟として經濟現象の中に數へようと云ふのである。

要するに思想も思惟も經濟學の範疇であるが、價値を中心とする財の經濟現象ではないのである。

我が邦哲學界の碩學井上哲次郎博士は「理想」に於いて以下の如く說くが、私は私の信念である經濟現象思惟に對し表裏一體的立場にあるとの說に强力なる裏づけを發見したものとし、玆に其の一節を引用せんとする。

抑々現象に二種類あることを知らねばならない。第一、物的現象で、第二、心的現象である。現象としては物心兩界に共通して、何れも經驗の對象となるものである。換言すれば、分てば物心兩界であるけれども、合して一つの現象界を成してゐるものである。凡そ現象は其物的たると心的たるとを問はず、雜多的で且つ要有的であるけれども、合して一つの現象界を成してゐるものである。雜多的と言へば、必ず其反面に於いて統一を意味し要有的と云へば、必ず其反面に於いて不變を意味するのである。尙又量を考へて見れば、現象と言へば既に實在を意味することは必然である。若しも實在なかりせば、現象と言ふ事は意義をなさない。畢竟、現象と實在とは不可分離の關係にあるものである。而して統一、不變の實在は物心兩界に共通し、且つ之を貫穿するところの根本原理でなければならない。物心兩界の現象が現象界全體を形成して居ろが、是れは畢竟根本原理たる實在の種々相に外ならないものである。所詮、物心兩界は實在を根本原理として成立して居るものと見るべきである。

以上井上博士の說に見る如く、分てば物心兩界であるけれども、合して一つの現象界を成して居るも　であり、經濟現象は物の動きと指定して物の現象を對象とするが、同時に心的現象の分野を閑却したり、極端に經濟現象を精神的連繫から切斷するが如き態度は、私の執らざる所なのである。

皇道經濟學は斯くの如く、經濟現象として心的現象をも取扱ふことを意圖し、且つ諸多科學、政治、文化との「むすび」にも介意しつつ進み行き、研究の便宜上經濟現象を物と心との面に二分して見るものなることを斷つて置きたい。それは當然、皇道經濟學が大我皇道主義の基礎に起つ必然の歸趨であり、井上博士の所謂「實在と現象とは不可分離の關係」にあるからである。森羅萬象其本一也を主張し、社會も民族も一生命のもとに動き、國家は大家族に他ならずとの我が肇國の精神を信ずる上からは、政治も文化も、宗教も教育も經濟とは不可分關係にあり、譬ひ研究上の便法としても其の截然たる區分は不可能と言ふも過言でないのである。

此の意味に於いて現代資本主義萬能を信ずる人々の口から、政治は經濟なりとの大膽なる放言を聞くのであるが、それも振子の行き過ぎであつて人生は財貨の動きとパンのみを以つては纏まりの付くものでないのは言ふ迄もなく、政治は財の經濟に先行し、道義や文化も經濟に並行しその裏付けとなつて進むところに人生に意義があり、國家社會に血の脈動があるのである。

以上で私は經濟と人生のむすびを說いた積りである。泰西の學者でも經濟を說いて「財」と「價値」を中核とし乍らもそれ等を客觀的遊離的存在と考へずに、人間生活に確かに結び着くものなるを認識したロツシヤやシユモラーの如きがある。彼等に從へば、經濟學の出發點は人間でありその到達彼岸も人間であると言ふのである。又マーシャルは、經濟學を一面富の研究であり他面人間の研究と言つて、爰にも人間を離れた自然現象を想像して居ないのである。

併し此の同じマーシャル教授は、經濟學を以つて經濟的傾向の記述と解して、何となく人間離れした一面を說いて居るところ、彼が依然自由學派の衣鉢を脫却し得ざるを想はしめる。其の他私の注意を惹いたのは亞米利加の新人經濟學者ブロージエツトが、斯學を以つて、生産がどれだけ人間の慾望を充たすかの法則を研究するものとした態度である。

畢竟、米英は自由主義の溫床であり、同系統學者の輩出を背景とする國々である。そこに生を享けそこに教育された後進學者等に一種の根强き先入主の打ち込まれるのは自然であり、其の未だ全體主義にも大我主義にも同情を持たないのは

止〻を得ざる所である。たゞ吾等新秩序樹立を目指す學徒としては、先人の與へる歪曲されたる先入主を排して新しい研究と所信の獨立を標榜する事を記憶すれば良いのである。

第四章　經濟的思惟

私の經濟的思惟と言ふのは經濟の思想的根據の意味であり、とりも直さず經濟思想論なのである。經濟現象を心的と物的とに兩別し、價値及び財のみの動きを取扱ふのが經濟學の任でないとの立場を執る私としては、經濟思想研究に重要な意義を感ずるのは素より當然である。從つて皇道經濟學の課題として、物の動きの初めより終りまで一貫せる理念と實踐に支配される有樣を色々な角度から描述して置く必要がある。

ある意味で經濟思惟は經濟の目的の闡明であるとも解し得られる。又此の研究に依つて經濟法則の不變不搖の根源を究明するのであつて之を經濟の眞諦と呼んでも良いのである。

まづ、吾等は家族から村落を形成する時分から經濟生活に入る。此の時代の經濟現象は物心兩面とも純にして簡易である。隣人と隣人の知り合つた同志が交換行爲を行ふ。物的には相互補强の關係であり、心的には協調扶助の愛に發足する。

卽ちそこには大我の動きがあるのである。人を使し己を利する姿、之が抑々經濟の始めであるが、かかる理念の一貫さへあれば、世界的全一主義も民族國家の濟民の業も極めて容易に成し遂げられ得るのである。

萬象一に皈すとの哲學的實在論、差別卽無差別の宗教觀から見る現象界はそれ自身理性を有し且つ向上して止まないのである。卽ち現象は有機的に相關し而して生成發展して止まないので、家族は村を造り、村は部落となり國となる。而し

て倫理性と向上性の故に國と個、私人と國家の大我一元狀態は故障なく敷衍され擴大され得るのである。

社會又は國家に生命ありと爲す考へ方は、單に思惟や觀念だけではなく、物的現象界の事柄凡てを以つて擧證出來るのである。ひとり國家や社會だけでなく、草も木も天地間の森羅萬象、其の有形たると無形たるとに論なく悉く有機體であり、生命體であつて且つその狀態が物のみに限定される事なく、無形無象の「勢」あるひはフオスも亦生命體と觀じ來ると、爰に吾等は世相の處理配分が無意味な放縱亂雜に委せられて存するのではないと信じ得るのである。

吾々は第三者として世の中の萬象と理法を造り之を看守するとする神を爰に持ち出す要はない。科學的にも自然現象を微分解して電子狀況に達し尙細分してボジトロン、ノイトロンに到ると其の上の境地は結局一也とする思惟の境地に到達せざるを得ないのである。

佛教は差別卽無差別と謂へ、有象無象の總てを有情と觀じ、其の限りでは萬有神教であり、世の中其の儘が神であり、吾々の一擧手一投足にも業（ごふ）成り、果を産むとして世相の生命的動きに饑案を下してゐるのであるが、かかる唯心唯物卽ち一なりとする宗教的信仰も社會有機的連帶論强化の上に大なる役割を擔ふものと言ふを得る。

太古の家族制度は其の純眞なる相互愛の精神を敷衍し、現象界の有機體を通じて歷史と共に進み、有機體の倫理性と向上性の故に社會連帶主義を止揚し發展を遂げ、最後に八紘一宇の境地顯現となるのである。偶々社會現象を以つて偶然と考へたり、國家は個人の總計と想つたり、地球は獨立せる個々別々の物體の物理的集合と見做したのは、一時的懷疑時代の所産であつて、其の所說に永續性を缺き、經濟學の上でかくの如き個人主義は完全に我が皇道主義に代位せられるの形勢が熟したのである。

吾等人間生活秩序の現段階は八紘爲宇　實現には程遠きものがある。然し現發展は民族國家又は經濟的には廣域經濟程度に達したのは眼前の事實であり、現代人の世界觀が新秩序の呼號となつて顯はれる點より見れば、世界が八紘爲宇に向つて驀進をつゞけてゐることは否定出來ない。

以上を要約して他の角度から別な說明を加へて見る。先づ種屬改良の植物を取らう。ある植物學者は種無葡萄を造り出したが、葡萄を梨にする事は出來ず、殊更それを動物に仕立てる譯にまゐらなかつた。幾多の科學者達は牛や豚の改善向上に成功し人類に乳と肉の量と質とに大きな恩惠を與へたが、豚を牛に又は牛を豚にする事は不可能であつた。同じ意味で家族主義にスタートを切つた人間社會が、隣人相愛を事とするを趣旨とする筈がないのである。私は道義的思惟に始る世界は永久に道義的であるべきを信ぜざるを得ないのである。

自然科學は雨を分析してH_2Oと正しく冷やかに敎へるが人文科學の境地では、雨を慈雨と見るべきであり、經濟學は經國濟民の心を慈雨的思念に置くべきである。

德川時代の我が邦の碩學太宰春臺は、凡そ天下國家を治むるを以つて經濟と言ふ。と定義してゐるが天下を治むる手段ひとり經濟と斷ずるはどうかと考へられるのだが、經濟は確かに天下を治むる重要なる手だてであり、ケネー等重農學派の「行くに委せ、過ぐるに任せ、世界は自ら動くもの也」とするは餘りに放任に過ぎ、少くも現文明階梯では適用不能を想はせるのである。

經濟的思惟の土臺が大我一元思想に發足し社會の連帶性を信じ、世界それ自身道義性格者であることを把握すれば、古典學派經濟思想の基礎である富の充足や個人の意慾の動くに委せる生產主義の行き過ぎなど、全く容るの餘地なきものとなるのである。

一體自由主義とか放任主義など言ふ經濟學派思想の根柢は、世界の有機的道義性を拒否するのであり、萬象萬理の一元

性と相容れないのである。スミス、リカード、ミル等悉く同様に信じて居たのである。さりとてスミスの如きは「自利心は下劣心也」と言つて居るし、ミルは「教育宗教の進化が經濟動機を道義的ならしめる」として間接に經濟の道義化を歡迎し彼等の主唱した自由主義・個人主義が後世色々な經濟惡・社會惡の溫床とならうとは想像しなかつたのである。

イネーは重要學派の中核思想を自然秩序に置き、其の思想を神聖化し、ジュルゴーに到つて自然と自利心とを結びつけ、スミス之を繼承して自利心を下劣心也と唱へ乍ら經濟論を其の上に打ち樹て、正統學派は更にその同じ思想系統の敷衍を行つたのだが、自利心を自然と結んだつもりで其の實自然と逆行したところに認識の錯誤がある。自然は最初から思惟的に自利心と繫がりを持たないのである。若し之等泰西學派の始祖達をして、自然とは物的現象の他に向上の心的現象をも包攝するものなりと了解せしめたらんには、彼等と雖も自然の道義性を認め得たであらうと想はれるのである。卽ち心を中心に動く物の運動は正鵠を得るべく約束され、雜念から開放される心の自然は最初から純眞と考へられるのである。

古典學派の人達の考へた社會秩序の自然調和 Check and balance など、物質的だけでは現在英米などの經濟社會のあり方に見る如く極めて無秩序亂痴氣なものとなり了つたが、もし之に心的動きの自然を作用せしめたならばあるひは社會はもつと道義的な、もつと理性的なものであつたらうと想はれるのである。

こゝに於いて、私は自然現象が經濟惡の根本であるが如く考へた思想を更新して、物心兩面から思惟する自然は道義の裏づけをもつものであり、それは國家の驅りであり、世界的大我思想の基であると再認識するを憚らないのである。

經濟學とは別個の問題だが、凡そ人間が物の判斷を爲す時、兎角精神や靈的なものを忘れて視覺觸覺など五官にふれるものだけを視る傾向が濃厚である。「何の誰は惡人だが成功した。神樣なんていゝ加減なものだ」と言ふ類である。私はかゝる批評家は古典派經濟學者等と同一誤謬を敢へてしてゐるものと斷定する。つまりかゝる早まつた結論の前提には成功は物財なりとの獨斷的肯定があるからであり、吾等人間界の事、心の滿足、信仰の充足、健康の天惠、家庭の平和、雰圍氣の柔軟淸淨など數限りなく考慮さるべきものがあるのである。成功を物質に限定する世の習ひを矯正し得ば、確かに世界の平和は達成され、萬民その志を遂げ、各國その所を得と考へられ得るのである。同樣の意味で經濟學に形而上的要素を加へれば、極めて冷やかであつた資本主義經濟もあるひは慈悲と溫情に充ちた道德的世界の「むすび」と替り得るであらうこと吾等の期待して止まないところである。

第五章　自　然

一概に自然界と言へば普通物的現象界と了解される。自然科學とは物質の離合集散の法則の學問だとされる。自然主義とは放縱我執の主張であり、とかく物の「あるがまゝ」を對象とするものを自然と言はれ、さやうに取扱はれて來てゐる。

本能も物質的自然との連絡に於いて考へられるのが一般普通の行き方である。自然派、本能主義文學など一々左樣に解され、懶惰無雜作の意と解せられた時代もあつた。

而して自然も本能も、なげやりの儘では惡と相通ずるが如く考へるのは是迄の思想である。果して然るか。

我が哲學界の巨星井上哲次郎博士も自然は無秩序であり、無道德だと說く。以下に引用して見よう。「本能主義だの自然主義だのといふ諸主義の誤謬は是にあるのである。何故ならば本能主義だの自然主義だのと云ふ諸主義は人間の自然の性を以つて道德的生活の立場として、それ以外のものを認めないからである。人間の自然と云ふ側は斯くあるのであつて決して斯くあらざる可らずではない。眞の道德は決して斯くあると言ふ事實に基づいて立つ可きものではない。斯くあらざる可らずといふ目的觀念に依つて立つべきものである。ところが人生の自然はたゞ斯くあると云ふ事であつて、それは事實に過ぎないもので、事實は決して道德的であると言ふわけにはゆかない。事實は道德に合はないことが多いから、斯くあらざるべからずといふ目的觀念を遂行することに依つて始めて道德が成立する次第である」

井上博士に依つてもかういふ見方が成り立つのである。而して自然を物質界の現象とのみ限局することから「あらざる可からざる」の一面を「かくある」自然から截り去り、倫理をひどくむつかしいものとしてしまふのである。

私の見るところでは何故人間が働きたいと意識するのが自然でないのか。かくあらざる可からざるとの意識は何故人間の心に自然に動くと考へないのか。何故森羅萬象歸一すとの思惟が不自然なのか。動きたいと考へ、勉强したいと想ふのは悉く自然であるのだ。哲學者や科學者等の吾等に與へたところの自然は物質界のことなりとの先入主から吾等自らを開放して見よう。自然は物心兩樣に存し自然現象は身をも心をも意味するのであり、人間の潛在意識も自然作用であり、その顯在意識も亦自然である。人の倫理性・社會性など「ねばならぬ」よりは「然くある」で行く方がどれだけ容易に大我一元に通ずるか惟ふべきである。

人間生れて働かねばならぬ者也と言ふよりは人間は働くものなりと意識するのが私の擇ぶ行き方であり、その同じ方法で物はかくある自然のなりはひに倫理性を意識する事が出來、どうやらそこに論理の一貫があるやうである。總じて私の大我主義は世界諸象の統一と一元を思ふので、喩へ學問であつても研究の便宜であつても無用に分科・分岐を喜ばないのである。

かういふ觀點に立つと吾々が生を享けることそれ自身自然であり、われ〳〵に精神を與へたのも自然であり、良心も、自覺も、これを統一する意識も、目的を立てるのも悉く自然であり、私はそれ等の精神、良心、自覺、統一、目的及び意識それ自身が自然だとさへ考へ、物質界の存在である獸類、植物、風、雷、火、土等と共に自然として取扱ふのである。從つて私の自然は「行くが儘に」あるがままであるが其の行くところに公道大道があるのである。自然に卽應する本は清く正しく且つ明るきものであり、一つの心的現象であると言ふのである。

本能を自然に放任すれば惡に傾くと推定するは論理上缺陷がある。本能の自然は宇宙の倫理性と相通じ一元一如の世界觀の一部となるが、本能に「個性」「私心」を挿むときに初めて世相の顚倒を來すのである。未だ混濁せざる自然の中に動く本能には倫理があり向上もある。慨ひに「私・個」の洗禮を享くる事に依り不自然に清かるべき本能の濁化を招致するのである。乃ち私情私利が「大我」的自然と相容れず、今次戰爭も一方には此の道義的世界觀を奉ずる我が邦及び獨逸、他方個人主義擁護國民主主義米英との間に戰はれるのである。

人を形體的に造り就す細胞の一つ一つが人の小照である意味に於いて、人は宇宙の中の小宇宙である。釋迦の信仰では人間は佛のこうつしであつて、吾は佛なりの自覺に達し得て初めて眞如を識るのである。キリストは心の清きものは幸ひ也、神を見うべければなりと敎へたが、心にかゝる雲が取り除かれれば悟りの實體を把握し心眼を以つて宇宙の實相を思惟し得と云ふので、凡てそれ等見たり、識つたりするところは自然の相であるのである。

自然と自由物象界の自然放任は惡傾向を齎すと考へる一例にかう云ふのがある。木は其のまゝで大樹を爲すがその樹は人間に必要なる果物をみのらせない。もし果實物が獲られても種屬改良の人間的努力が加はらねば、遂にその果物は退化する。亦養殖兒、養殖魚の例を見よ。人爲的改良が加へられない場合彼等は野兒であり自然魚であり何等人生を稗益しないと、かやうに考へる人々も多いが、成程形體的には種屬類退の自然現象もあるが、私の自然法則論に從へば、人が種屬改良を思惟し、之に改良手段を執らうとする意識も亦人生の自然であるのであつて、自然主義、毫も惡への傾向を意味しないのである。

併し、自然主義をすぐさま移して自由主義とする事に私は異議をとなへるのである。その理由は「私」を含む自主的主觀が多分に加はるからである。「個」を「大我」から分離して宇宙の全一法則に反するからである。「我」なる小象牙塔に立籠り外界の和やかな空氣に融合するを拒否するからである。年古りたる甲羅を着て外への生成混入を想はざるが故である。

米國や英吉利などの自由主義と言ふものを見ると一層事理明白となる。例へば國家行動の自由と彼等は主張するが、その自由に私心あるが故に彼等にはそれで自由であるが、他に幾つかの不自由國が出來るのである。國内に於いても彼等は自由を叫ぶのであるが、それが主觀的自由である爲に富めるもの及び權力あるものの自由はあつても貧者を救ふ事も出來ず、公正なる立法も成り立たないのである。畢竟自然なき人爲的且つ「個」の主觀的自由であるので、私は自由主義とは我がまゝ主義の別名だと斷言するのである。

私の解する自然は以上のやうなものであるが故に、フイジオクラット（重農學派）の自然を源とした說を喜ぶのであるが、此の派が自然と自由とを混同せるには遽かに贊意を表し能はざるのである。

人間の性から來る本能は自然であり、善へ向上して進む。善の慾求は動的である心的現象となつて現はれるのであつて、思惟的に他動的でも自動的でも、働きと言ふ形式で善良なるものへ近づき動くのである。經濟的に財貨を作り物質を贏ち得る行爲はかくの如くして本能的慾求から生れ出づるのであり、其の間の動機に何等惡の要素を嵌め込む必要はないのである。もし惡の要素が自然的なる人間の勞働慾に混入したとせば、それは不自然であつて自然ではないのである。

併し人は生れながらにして惡性を擁し、または人性の善惡は環境の所産と稽へる學者もある。其の所論概ね、宇宙の大本源に美妙にして一糸紊れざる秩序の存するあつて有象無象の世界を成すに想ひ及ばず、太だ皮想的に物的現象界の矛盾のみに着眼して如上の獨善的結論に到達するのであつて、水と氷は其の源を均しうし、雨と雲とに共通性ある理を宇宙一元に推し進め思惟するところがあれば、物・心の自然は倫理的であり向上すると云ふ私の主張に合點がゆく筈である。

第六章　經濟の倫理性

經濟的思惟を大我全一に置き經濟現象を有機的とする皇道經濟學は、當然經濟の動きに倫理性を發見するのである。

家族主義に道義あり、肇國思想に倫理あり、世界に充滿する有象無象悉く德性を具へ、向上の氣充つとまで極言しても過ぎたりとせじと私は考へるが、吾等の先人間偶々其の反對の方向を思惟せんとしたものの存在するのは、物象のみを觀る近世史初期の西洋學者の擧にならひ迷路にしばしが程彷徨したのに歸因するのである。

經濟の範圍を財の動きとのみ限定して行くと生產本位の經濟が是認されるが、生產の行り詰りは人間生活の不幸である事實は最近資本主義の混亂に吾等之を實驗したところである。一九二九年世界經濟史最大の慘劇と稱される當時の亞米利加の經濟狀況に見よう。一方生產の過剩は品物の市場價値を無に近き相場に追ひ詰め、農家は穀倉充ちて居乍ら着るに衣なく、享樂を欲しても之を購ふ通貨を缺いたのであつた。一方生產者は交換價格の向上を圖つて過剩生產食糧の破壞を敢行する。其の反面には米全國の失業群一千二百萬を數へて食に窮したのである。シカゴ市場出荷の牛乳は無殘にも途中でトラック諸共に破毀され附近の河に流し込まれ河水ために白しと形容された程であつた。西部カリホルニヤ州では果物の豐作が市場値の引下げとなり摘採賃金にすら達せずと言ふ理由で、桃、梨、葡萄の何十萬噸かに態々石油を灑ぎかけ之を燒却したのである。中西部の小麥、玉蜀黍に價格なく一農業組合は小麥に高度の火力あるを奇貨となし之を燃料として使用する事を市民に勸めたのである。當時豚の肉は一斤のコスト六仙とされたものが市價は四仙に下落、大統領ルーズベルトは農家に命じて生き豚四分の一を殺戮せしめた。然も此の過剩豚が庶民の食膳に上る如き事あつては價格の吊上げとはなり得ない爲、豚群を一定深度の穴に入れ之に石油を灑いで埋め去つたのである。

道義性を見ざる經濟の行方はかくの如き慘禍を人類に與へるを、洵に銘記すべきである。我が邦の名僧智識の一人明惠上人は「治亂の本は人の慾なり」と敎へて居る。

生產主義の行き過ぎの不合理現象をもう一つ書き綴らう。以上亞米利加の實例は世界各國に起つたので吾等眼前の敎誡として極めて適切なるを想はせるが、道義なき利潤本位の社會では僧侶は死人の多きを喜び、葬儀の華美を貴び、辯護士は係爭や爭鬪を、醫師は病疾者の愈々增加するを希ふの奇現象を認容する論理となるのである。豐年滿作は民の苦痛である經濟原理は吾等の思惟の中には藏められない筈であるのに、行き詰り期の資本主義は數年前まで、かゝる不合理を合理化して居たのである。

經濟現象はそれ自身倫理的に生成發展すると私は主張するのだが、其の生成發展の道程が阻害されて一時的に行き詰つたり、道草を喰つたりするのは歷史の示す所である。然し歷史は亦時間的に見て一世紀は一世紀より社會的道義が進化し、政治も亦向上するを敎へるのである。我が邦では德川中紀以來の武士階級の放縱懶惰、中央政府の弛緩歪政も、明治維新と共に更新一番、大いに改善の途に上つたのであり、歐洲でも庶民勞働階級の奴隸的生活は漸次解放され、十八世紀の中の必然の動きがさやうに機能するのであり何等異とするに足らないのである。

我が國先進の所說

我が國には古來經濟論は幾多あつたが、一體系をなした經濟學として纏まつたものはない。併も其の總ては倫理經濟論である。新井白石、荻生徂徠、太宰春台、本居宣長、安藤昌益、佐藤信淵など江戸時代の學者の殆ど凡ては政治論、國體論を爲す傍ら必ず治國平天下の意味で、經濟論を立てゝゐるのである。而して是等學者は言ひ合せたやうに、經濟と道德の不可分關係を說いて居るのであり、其の大部分はまた農本主義に終始してゐる。

本居宣長は「皇國の古は道なしといふは、此方にまことの勝れたる道あるを知らずしてたゞ唐我の道をのみ道と心得たるひがごとなり」と其の著秘本玉匣の中に說き、皇國道の嚴存を主張したのである。宣長の思想は守舊的であり自然を基とし「總體世の中の事は、いかほどかしこくても、人の智慧工夫にも及びがたき所のものなれば、たやすく新法を行ふべきにあらず、すべての事、たゞ時世のもやうにそむかず」として、たゞ時世に準ぜよと慫慂し、自然の動きを其の儘是認してゐるのである。

太宰春台の經濟民論は倫理的經濟であり、民を治め國を泰からしめるには經濟が必須條件であるとして、初めから經濟に道義性あらしめてゐる。

「凡天下國家を治むるを經濟と言、世を經め民を濟ふと云ふ義也。……堯舜より以來歷世の聖賢心を盡して言を立て敎を垂たまふは、皆此經濟の一事の爲也」

また其の經濟錄に於いて彼は曰ふ、

「聖人の敎は、則天地の道也。聖人の敎に順て、人々治生の道に心を用ふれば、飢寒の患もなく、日用に乏しき事もなく、一生を安樂に送る。是天地の大德也」

玆に治生の道とは卽ち經濟の道の謂であり、此處に心を用ふるには聖人の敎に從へと命じて經濟道を倫理道の軌道にのせてゐるのである。

安藤昌益と云ふ江戸時代學者は、貨幣經濟に反對し、商人階級を卑下した人であるが、その直耕論は有名であり、人間の生活經濟を以下のやうに營み得ると信じたのである。

「自然人は直耕直織す。原野田畑の人は穀を出し、山里の人は材木薪炭を出す。海濱の人は諸魚を出す。薪材、魚鹽、米穀、互ひに易へ得て、海濱、山里、平地の人倫皆共に薪飮榮用不自由なし。安食、安衣、直耕、常業、無慾、無上、無下、無賤、無尊、無富、無貧、無聖、無愚、無盜、無刑、無貧、無知、無說、無亂、無樂、無苦、無色、無事、無軍、無戰安平の世なり。これ金錢無き自然に於ける自然の德なり」

斯くて安藤昌益は自然の德と貨幣排斥とを結びつけたのであり、その貨幣論にも一見識あり、同時に少しく極端の嫌ひはあるが、直耕に依る自然生活に人間經濟生活の至上性を認めそこに倫理の動きを感得せしめるのである。

西洋の經濟道義論

西洋の學者で經濟に德性を稽へた人は多い。自由主義の眞の始祖ケネーは大の自然主義者で、自然の暗示を理性で發見之に順へと說いたのである。其の後アダム・スミスも冷血經濟を編んだやうに想はれるが、彼自身は心から自由は人間社會の道義的發展となると考へたので、その富國論を乾燥無味な物だけの富の增殖とはしたくなかつたらうと信ぜられる節がある。「工業家と商人とは一般民衆を欺いて利して居る」と彼の利一本槍でない主張を明示し、「神は人間に自利と仁愛と本能を賦與し、これ等の本能の發達を適宜ならしめる爲に、同情の感情を與へた」とも言ひ、其の名著富國論は單な

る射利本位のつもりで書かなかつた事を知り得る。

スミスの富國論が時代の波と時の思潮の流れに揺られて、リカードの「經濟人」となり感情と道義は經濟から排除されたかに見えたが、十九世後半に到りその前半さしも燎原の火の如き勢を示した資本主義も、發展の本土英國に於いてさへラスキン・モリスの如き及びロバート・オウエンのやうな熱情的反對者を出し、而して學派自體の中からですらマーシャルなどの溫健なる道義經濟學說を出したのである。

ラスキンとモリスは藝術的批評眼から當時の經濟のなりはひを見たのであるが、前者は「人は利己の爲に勞働するのではなく社會的奉仕のために働く」と言ひ、且つ勞働者の機械化に同情せず、中世紀の藝術化されたる仕事に生命を發見しようとしたのである。

十九世紀前半に活躍して世界の三大空想家と呼ばれたフランス人、シヤルル・フウリエの本能觀も見遁すべからざる社會道義性論であり經濟的倫理性の是認となるのである。彼の商業批判論は、大多數者の犧牲に於いて、少數者の暴富狀態を招來するものと結論するのであつて、この現象は理想、倫理等の要素を經濟學から除外する事に基由すると言ふのである。

ジョン・スチユアート・ミルは古典學派から出でゝ其の學に多分の社會政策的要素を注入し、社會政策學の開祖となり、「教育、宗教の進化が經濟動機を道義的ならしめようし」とて、自ら祖述する自由主義經濟の缺陷を專ら社會政策——例へば勞働保險法などに依つて補正しようと試み、經濟學に德性注入の必要を痛感したものの如くである。

英國古典學派の流れを汲んで多分に近代思潮を取り入れたマーシャルは其の學說の到る處で經濟學に道義性を加へてゐる。「經濟人も肉と血の人間に他ならぬ」とか、經濟學は一面富の研究を爲し他面人間の研究を成す、と云ふのは正しく其の意味以外ではあり得ない。

獨逸の歷史派は全一主義、國家至上主義であり、人間の經濟的相互關係を利潤一本建で計量せざる道義經濟學が其の所産である。

所詮、經濟學なるものは上世から倫理性を無視しては成り立つてゐないのであつて、マルサスなどの悲觀說でも倫理的狀態の實現が經濟からは結果せぬと獨斷した所からの悲觀であつて、經濟法則に涙も血もあり得る事を知り得たならば、彼とて必ずや滿悅を禁じ得なかつたであらう。

全體主義、大我主義の經濟は完全に經濟本然の姿に還り、其の固有の道義性をとり戻し經濟構成體の細胞である個人々々の思惟の中にかすか乍ら持ちつゞけられて來た連帶性に目醒め、玆に目出度く、新しくして且つ復古的な世界觀の上に大きく動き出さうと、今次大戰爭は戰はれ、且つ新秩序建設の大業がなされつゝあるのである。

第七章　經濟活動動機論

人間生活に調節あらしめる物及び其の物の動きに理念を與へる思惟、之を一貫して經濟現象が起り、その起る機因を私は經濟活動動機と言ふのであるが、此の點では經濟學とは財の學問なりとする學者も、經濟に動機あるのは否定してゐるのではなく、動機は思想論の一面なるが故に、如何なる經濟學も思想研究を忘れては成り立たないのである。たゞ財による富の增加及び財から結果する享樂などの研究に偏倚するが爲に弊害があり、吾等の新研究を必要とするに至り、社會も亦眞個の經濟的活動を思想界に需めんとする形勢あり、人間慾求の動機の正しき解析と會得は、生活の潤ひとなると認識するに到つたのである。

そこで動機の正しい認識が問題として殘るのであるが、私はそれを人間の本能的慾求に歸し本能は道義的であり常に向上すると言ふのである。然るに私の否定する資本主義とその學說は、本能の一部である物慾のみが經濟活動の機因を提供するものと定め、一圖に財の獲得を目標とした所に置いた點に私の立場と見解を異にするのである。

私は經濟的思惟とそれから發動するところの心的本能現象は倫理性を持ち常に向上する必然性ありと前提するが故に、かゝる構想に立つ經濟の物的歸結は善ならざるを得ずと斷じ去るのである。然らば本能の動くところは何か。

本能的勞働慾

本能が慾求するが故に經濟的活動をなし、本能が命ずるが爲に文化的向上に己が勤勞を提供する事は人間活動の最も望ましき型と想はれるのである。かくなる事は勞働の淨化であり、勞役の藝術化である。

凡そ人間は一生無勞働で暮らす事が出來るだらうか。生きるだけの資を與へて遊んで居れと命令されて悅ぶものがあらうか。云ひ換へれば人生働かずに活きられないのではないか。口でこそ成るべく用事の尠い給料の多い位置を獲たいなど言ふ者もあるが、その種の人々でも、萬更勞働なき局面を想像してかやうな放言をしてゐるのではないのである。南方の土民などには怠け者があつて、手を動かすのならば糧を口に運ぶをすらもの憂しとするものがあるなど云ひ傳へられるが、それは一種の物語の域を出ないのである。ブラジルの噺にかう云ふのがある。

身につゞれを纏つた一人の土人が立派な共同墓地の一石碑の前に力なく首を垂れて眠るが如く蹲まつてゐた。ある旅人が之を見て、何故かと尋ねた。土人の答はかうであつた。

「飢えたら死ぬつもりでかうしてゐるのだ」

「それは氣の毒だ、わたくしと一緒に來給へ」

と促し立てゝ旅人は土人をとある一食料店に連れ行き、彼の最も好んで食すると想はれる豆の何程かを買つて與へた。土人はその何品なるかを知ると、

「これは生豆でせう。之から料理したり煮たりする程の勞働をするなら、死んだ方がよいのだ」

人間がどの程度まで怠け得るものかの譬喩として語られた以上の如き人物の實在は考へられないが、併し廣大なる地球上少數の極端なる怠惰者はあるにしてもそれは例外でしかあり得ないのであつて、大多數の人々は働かずには生きられないのである。

自發的に働く、何と崇高なことではないか。本能なるが故に經濟的活動を營む、而して其の活動は勿論道義に立つと言ふのであれば、八紘爲宇の目的の彼岸はそれ以外の動機では達し得られないと思はれるのである。

尊德の四綱領

二宮尊德の報德教に四つの綱領がある。一至誠、二勤勞、三分度、四推讓と云ふ。其の何れもが尊德經濟の本を爲すところであるが、特に第二は私の本能的勤勞慾と關聯して稽へたいので、云ふまでもなく之を自發的勤勞と解するのである。報德教は儒教經濟と曰はれ、德者本也、財者末也の原則から出發するのである。即ち經濟行爲の倫理性を前提とし、私の大我主義經濟の思惟するところと同一であるが、報德教が綱領を擧げて儒教經濟を敷衍祖述して經濟と道德の一元、同根なるを教へて居るところは面白い。今我が邦德川の末期に際し實際經濟を一貫せる主義理想を以つて終始せる先覺二宮尊德の勤勞報德の教へを以下に要約して置くのも無用ではあるまい。

報德教の四綱領から說明を加へろと、その一至誠とは、誠を以つて事に當れと言ふので精神的「動」の命令である。經濟の基、私の所謂經濟的思惟を誠としたのである。近來の學者は概念とか思惟とか認識とか云つてゐる中に、尊德翁は手取り早く「至誠」を基とすと言つてしまつたのである。

其の二勤勞は上述の如く本能的に働くことであり、且つその働きに德性を加味するのであつて、あるひはそれを宗教的奉仕の態度と見ても良からう。二宮經濟では「天地人三才の德に報ひる」のであつて、天地は自然神明の事であり、「人」は君父の恩、又は社會隣人の恩と解してよからう。即ち彼の思想的基礎である「德者本也」の儒教の流れがここに閃くのであり、天地と自然に憧れを持つ點よりして之を宗教的信仰と關聯しても稽へられるのである。

つぎに分度と推讓であるが、前者は分を守り入るを圖つて出づるを制せよと言ふのである。彼は貧富を定義して財產本位とせず收入を以つて計量したところ奇拔である。即ち百圓の月收者が八十圓を使つて二十圓を餘す者は富める也、千圓の收入でも千百圓を使ふものは貧者也と云ふので、云はゞ身の程を知れと云ふ事である。推讓とは人に施せの意である。勤勞し分を守り剩るところを以つて推讓しろと云ふので、飽く迄道德教であり、人生の勤勞を玆に基礎せしめよと主張するのである。

報德教は皇道經濟學でもある。天地人に報ひる自發的勞働を尊重した。當時の日本經濟は農を本としたものであるから二宮翁の報德經濟は自然農業的實踐の上にあつたが、其の經濟活動の發足點を至誠に置き、且つ我が肇國精神を其の基礎としたのは著しい事實である。

ふる道につもる木の葉をかきわけて
　天照神のあしあとをみむ

と詠じたる、天地のもと萬象悉く天照神につながると觀じたのであり、此の點彼の經濟が皇道經濟なる所以を明らかにしたものである。

二宮尊德には神儒佛三味一粒丸と云ふのがある。「佛教一さじ、儒教一さじ、神道二さじ」の混合調劑を喰へとしたものだが、玆にも神道二つとして彼の皇道的世界觀を表現してゐるのである。

本能的勞働慾と言ふのは、勞働せずに居られない人間の性の傾向又は性それ自身の性格を自然及び必然の赴くところと考へるのである。あるひは自發的勞働を慾求する狀態を謂ふとしてもよいが、勞働希求には他動的の場合も亦想像出來得る。而して他動的と云ふものにも兩樣があり、一は信仰的、義務的に勤勞を爲すもの、他は物質的報酬や利益を先想するものである。第二の場合について私は本能的物慾として、別項に述べるのであるが、其の第一は精神的、道義的なるが故に本項――本能的勞働慾のもとに論述しようとするのである。

爰に比喩して見よう。以下三の場合が私の理論を簡單に云ひ現はすやうに思ふ。卽ち

一、さあ働きたい。飛行機を造らう。（自發的）

二、さあ働かう。天罰があたる。國家がさう要求するのだ。飛行機を造ることにしよう。（義務的）

三、さあ働くかな。食はねば生きられぬ。金儲けしたい。位階と勳章が報ひられるぞ。（報酬先想）

第一は至誠であり本能の自發的慾求である。第二は善を爲さんとする本能的慾求で、最後の三は他動的勞働動機となるものである。以下その一つ一つについて研究を進めよう。

本能的善の憧憬

本項は前項と大差なき關係にあるものである。本能の善への憧憬が經濟行動動機となるのはとりも直さず經濟の倫理性であり前章縷述した通りである。神之を命ずるが故にとの敬虔な心で勞務をとるのも、勞働を喜ぶが故に働くのも共に神聖なる動機を形成し、自然その結果するところも崇高である筈である。かゝる勞働の蔭には物質報酬など思念されないのである。

古來我が國學者の言ふところは常に道義的であるゝ、荻生徂徠は兎角功利主義者と批評されるが、商人の不道義を痛罵して「商人は不定なる渡世をする者故……然れば商人の潰るゝことをば、嘗つて構間敷也、是又治道の大割の心得也と可知」と蔑視し去るのである。

前にも引用せる安藤昌益の經濟論は短刀直入倘農論に入るので、農業勞働を經濟生活上の至上至高なるものとなし、それに反する總てを排除するので少しく極端であつても其の信ずる善への希求、憧憬はたしかに偉觀である。たゞそれを實踐經濟論としては倘議論と研究の餘地ありとするも、兎に角自ら耕し自らを養ふを建前とし、孔子を以つて自然の天道を盜み、上に立ちて衆人の直耕を貪食して遂に亡命したと痛擊してゐる。

「孔子老いて春秋を作る。後の世々の爲めと稱するは失なり。自然天地の春秋は、春は萬物生じて米穀育ち、秋は萬物實りて米穀を收む。人倫之れによりて安食安衣す。孔子の春秋は口先のみ。其身は不耕貪食して天道を盜む。用ひられずして亡命する所以なり」

「諸法敎說悉く盜人の言譯なり。聖人耕やさずして、衆人の直耕を貪食し、天の耕道を盜む。釋迦耕やさずして、獨身となり、衆耕を貪食して、天道を盜む。是れ盜の始めなり」

釋尊も孔子も安藤昌益の前に顏色なしである。轉じて吾等しばらく現代の聖雄と呼ばれる印度のガンデイを想起する時右兩者の間相通ずるものを發見するのであり、經濟の德性と經濟動機の善への向上性を認識せざるを得ざるのを見るのである。

ガンデイは自ら鹽をたき、自ら糸を紡いで布を織り之を着るのである。彼は頭腦の人であり、道德堅固な政治家である。然も尙直耕の擧に出づるもの、毫も奇を衒ふのではない。一は勞働の神聖を印度民衆に敎へ、而して崇高な彼の理想

である國家の獨立を企圖するのであり、善への憧憬を以つて民心の向上を指導する所、到底凡人の企て及ばざる所なのである。

安藤昌益の論は萬人皆勞の社會を作りなすを目的としてゐる。本章の餘論に亘るやうだが、もう少しその說を引例して置かう。「諸國の不耕貪食の遊民を停止して、それ相應の田地を與へて、耕やさしめ、衣食領以外の田地を耕やさしめず、若し耕を怠りて、遊蕩を爲す者には、一族共に之に食を與ふべからず」而して彼は利潤經濟の必要を見さるが故に貨幣の存在を嫌忌し、貨幣の存在を以つて利潤追及の念に拍車をかけるものとし、金銀の通用を止むる事を欲したのである。「上に立つもの不耕貪食して、榮華を爲すは天道を盜むなり。下之を羨みて財貨を盜み、戰亂之より始まる。上に立つもの榮華侈費することなければ、下に枝葉の賊自ら絕ゆる」として飽く迄不耕者を排斥惡罵したのである。

之に依つて見れば安藤昌益は、貨幣經濟に反對し、スミス經濟學の生命である分業にも共鳴しないのである。同時にそれは勞働本能論であり、勤勞至上論でもある。ある意味では、英國あたりのラスキンやモリス等のローマン主義經濟論と似たところもあるのである。

本能的物質慾

物慾と言ふのは物に對する慾望である。物が欲しければこそ働くのであつて人間の最も自然なものと考へられたところである。否是までの人々は殆んど此の慾望を以つて吾々人類の經濟活動動機の唯一のものと信じたのである。

物を欲する人の性向に何等無理はないと想はれるが、世間では往々にして其の反對の無慾を喜ぶが如く見えるのは慾求が不自然に所謂道を外れるからである。私の主張は自然道は心的にも動き、心的自然は世界觀の基と相通じ倫理性を有すると云ふので、此の趣旨の貫く物の慾望は毫も忌むべきではないのである。然るを自然なるが故に「慾」は世道人心を蠹と考へるのは物慾ばかりを見て心的なものに盲なるのいたす所と言はねばならぬ。

私は物慾を三大別しようと思ふ。（一）生存慾、（二）生殖慾、（三）所有慾である。

ヘツケルは物質慾を生存と生殖に別け之を以つて人間の根本慾となし、其の他の諸慾は此の根本慾から派生したものと考へた。それでよろしい。此の分析の仕方だけの上では慾が二分して考へられやうと、三分されやうと問題はないが、たゞ此の哲學者が人間はたゞそれだけだと獨斷し去るのはどうかと想はれるのである。たゞ人間が生存し生殖するのであるならば獸と同一であり他動物の性能と何等の差あるを見ないのである。

獸物は自然に順じて生活し單に生存慾その他の物慾を本能として動き廻つて何等不思議はなく、其の存在價値はそこにあるのである。人間は生存慾を獸物以外の他の意慾と併存併行せしめるが故に、自然生きる使命に他動物との差を發見するのである。活きようと言ふ本能慾、それに働く本能と善の本能とが作用して初めて人間の全き生存慾となり得るのである。

生殖慾も人生の根本慾望である。而して生殖は人に與へられたる大使命であり、生それ自身の發祥でもある。併し此の慾望が野放しされたならば如何、此　本能的動きが主觀的な放縱的な自由に左右されるのであるならば其の光景や蓋し目も當てられぬものであらねばならぬ。併し人間の動きには他の本能慾あるが爲に、幸ひ生殖慾も大我に通じ、社會の全一を見るが故にそこに道義があり、從つて生殖慾の發動も放縱ならずして自然の道義に則るならば毫も誤るところなきを考へるのである。

所有慾の發芽も人生れると同時に在るのは否定出來ない。人の性は孟子の云ふが如く善であつても、荀子の說の如く惡

であつてもよい。所有せんとする本能は赤兒の思惟として存するのは否めない。此の所有慾を嬰兒の他の本能である强度の生存慾と共に「主觀的私」を動機とする「自由」に委したならば、其の末廣るべきものがあるのである。

所有慾は人間經濟活動動機としては、生存慾と共に其の大部分であるのは承認出來る。但し是等本能慾が他の本能慾と併働し道義が其の間に發動作用する事を前提とするのである。近代の自由主義は所有慾を法律的なものにし、人の權利として之を是認したのであるが、他の心的現象との離合飽和に懸念するところなく、所有慾の自由我がまゝを見遁した爲、あらゆる方面の經濟事象の滑らかなる流動に支障を來さしめたのである。

物慾に基する人間の勞働慾は本能の自然であると共に後天的に發展しつゝ進むとも解せられる。勞働を以つて權利と見る經濟活動動機論者は勞働慾が本能であるか否かを深く究めず、たゞ人間生きる爲には財を需め財を獲る爲には働く天賦の權利ありとするのである。佛蘭西革命は最初から天賦人權說に發足するのだが、殊に一八四八年の二月革命に到つては完全に勞働權に重心を置き、人は勞働を希望し而して政治が之に自由を附與すべきものとなし、ルイ・フイリツプの無能とギゾーの反動政策に反對して蜂起したのであるが、畢竟當時佛蘭西は物慾を追つて極端に走り經濟活動動機が「物」のみにあるとした一知半解の思想を實踐に移せる歷史上の一挿話となり了つたのである。

先入主的物慾偏重

私の主張に從へば經濟生活と云へば、物の方便で生きることで經濟活動とは生きるため物に向つて働くと言ふ事になる。皇道經濟學では生きる爲の動きの形而上的一面にも研究の手伸ぶべきものとの信念のもと、本書第一部を思想篇として、人間物質經濟活動の裏の力として取り上げて來たのであるが、世の中の實際では兎角物慾本能が他の心的本能を制壓して居るのは否めない事實である。

私の主張では自然は清く正しいが、自然を甲羅に着た「個」が働き過ぎると不自然が强く人生に投影するが故に、物慾偏重となつたり、怠慢生活が過ぎるやうになると言ふのである。旨いものを食し、美衣を纏ひ、大厦に住居せんと欲する分外の希望は、一般に信ぜられるが如く自然ではなくて却つて不自然が動き過ぎると言ふのである。殊に資本主義時代において、人をして物質を至上と信ぜしめ活動の刺戟をそこに發見せしめんとした事に拍車かけられ、物慾偏重は容赦なく進行したのである。

物の經濟生活は慾望充足の貌となる。それまでは是認出來る。併し資本主義經濟生活はその上に營利の原則をも併用したのであつた。皇道經濟學は倫理的背景を持つ物慾經濟生活を是認し、倫理的背景に立つ利潤觀念をも容るゝのであるが、營利の爲の利潤は之を是認しないのを原則とするのである。營利の經濟活動は其の內に生活の慾望充足なる部分も含まれるが、他面自己の生活に不必要な「物」や貨幣をでも營利の爲に獲得をなすと云ふので、兎角大きな社會惡釀成の源を爲して來てゐる。人間生活に適宜な着物、食物及び家を必要とするのは勿論だが、資本主義社會はその適度を遙かに超えて、物慾偏重の弊に陷り隣人を窮せしめ、社會を害毒すること尠からざるものがあつた。

例へば、吾等の常識では豐作は民の潤ひである。我が邦の米收穫が一年七千萬石であるよりは九千萬石である事を欲するのは自然であり國家國民の祈念でもある。併し、資本主義の社會では平年作七千萬石どころか、それが五千萬石であつて一石四十圓の米が五十圓と伸び六十圓と飛躍的に騰貴するのを喜ぶのを定石とするのである。此の同じ筆法で言ふと一國の飢饉に食料が不足すればする程、營利を追ふものは儲かる理窟となる。かゝる實例は過去の資本主義經濟に蠢々として發見できるのであるが、爰に擧例した如く、亞米利加の物價吊上げ政策が、豚數百萬頭を屠殺し肉を細民に與へては豚

肉市價の引上げとはならないので、わざと豚に石油をぶちかけ地中深く埋め去つた事實、及び小麥を燃料として使用せしめ乍ら一方失業貧民群千二百萬人を有した事などその著しいものと言へるだらう。

要するにかうした物質慾に偏した經濟生活が吾等の間に存在したのは、悲しむべき事實として今や其の淸算が行はれんとしてゐるのは喜ばしき傾向であり、經濟學者達の今後の努力はかゝる時代の推移に盲なる事なく、その潮流に乘つて新時代に指導標識を與へるに吝かであつてはならないのである。

私の本能的經濟動機論は以上で其の概說を終つたのだが、玆に佛蘭西の學者にして私の所說に近い又は同一な根據に立つものにシャルル・フウリエがあるので今彼の社會學理論にして經濟學に關係ある部分を書いて見ることにする。

フウリエは人間本能を三群に分け第一群を感覺的又は快樂の本能と呼び、臭、視、聽、味、觸を擧げ、第二群をば精神的又は集團本能とし、友情、愛、名譽心、家族等をそれに附屬せしめる。第三群は競爭本能、變化本能、綜合本能で、第一群は物慾本能であり、第二群は善への憧憬的なもの、而して第三は大我全一を造りなさんとする人間本能の慾求であつて、觀點の角度こそ異れ、私の本能解釋と異るところはない。フウリエは神は人間の幸福を欲するが故に諸本能を與へたものでそれ等本能は善であり、從つて本能の自然開放は社會の混亂を意味せずと言つてゐるので、丁度私が本能を自然に委せれば人間經濟社會から貪婪、强奪などを除き得ると信ずると同一であると思ふ。」

第八章　經濟學の定義

皇道經濟學の定義は在來の諸學說からは其の類似品を見出し得ない。それも其の筈、經濟學に對し物心兩面から研究を進め立體的に縱に一貫した學の體系を建てようとする以上、その定義を資本主義にも社會主義經濟學にも發見し得ざるのは當然である。

我が國には明治以前經濟論はあつたが科學としての經濟學體系は無かつた。本居宣長、二宮尊德、新井白石、荻生徂徠、熊澤蕃山など巨匠の經濟一家言は忽諸に付すべからざるものだが、殘念乍ら彼等からは近代的經濟學又は經濟原論は殘されてゐないのである。此の點吾々は泰西の學者に對し後進の立場にあり、明治、大正と進み、昭和に入つて尙日本經濟學としての獨自のものは出現しなかつたのである。然し、今や機は熟した。我が邦肇國の精神に鑑み自身に內在せる大使命を發見せる日本民族は經濟學の上でも、西洋流學者の流れをのみ汲むを許されないに氣づいたのである。それでも現在において兵馬倥傯の間である理由も手傳つてまだ學者達の中から卓拔なる經濟學とその定義の據るべきものの與へられるを見ず、私としては比較すべき何物をも、參考材料の一つをも參酌するところなく左の如く定義するの止むを得ざるものがあつたのである。卽ち

經濟學とは人間協同體生活及び個人生活に必要なる經濟財の離合集散の法則を物心兩面に於いて研究する學問なり。

經濟學は社會科學であり人生あつて初めて生れる學問である。此の點學者の凡てが一致するところであつて、假りに個

人の富の增加を目標としても又は社會の物質的幸福を主眼とするにしても、經濟學が社會科學であり人生との關係を否定するものはないのである。アルフレッド・マーシャル教授は「經濟學は一面富の研究であり他面人間の研究である」と云つて居るし、其の他如何に純正經濟學が經濟現象を假定的に人から獨立した存在と見做したとて、亦中にはリカード一流の如く「經濟人」なる利己一點張りの假想人を創つて見ても、經濟の實際が人間生活と沒交涉に生起する自然現象と考へたものはない筈である。その偶々經濟の動きを自然と結びつけたり、物質的富なるものの自由な運動を考へたり、あるひは損得の理法が宇宙に浮動するが如く云ひ做した類は、要するに手前勝手な研究の便宜の爲の口實でしかなかつたやうである。

併し一時的便宜とは云へ人生との關係を忘れて研究を進めた結果は、吾等二十世紀第二次世界大戰直前に見る如き無慈悲不秩序の經濟現象に直面するの止むなきを見たのだが、歐羅巴では當時はやくも此經濟異變に氣づくものありいち早く體を躱したものもあつた。その極端はロシヤの共產主義社會となつたが、伊太利及び獨逸のファシズムも卽ち轉身の必要からであり、英吉利に於いてさへマーシャルは人生と經濟の相關を極力主張し、學問の上で經濟學と人間生活の切實緊密なるべきを以下の如く言つてゐるのである。

經濟學は人間幸福の爲の物質要素使用と密接な連繫に於いて、日常個人的社會的に行動する人間を研究する學問也。

A study of mankind in the ordinayy business of life; it examines that part of individual and social action which is mostclosely connected with the attainment and with the use of the material requisites of wellbeing.

以上に見るとマーシャルは Well-being の爲の物質要素の使用關係に於いて常日頃働き廻る人間の福利厚生の研究を經濟學の目標とするのであつて、多分に人生の幸福なる經濟的心的現象にふれてゐるのである。

西洋經濟學者の精神的及び思想的一面を閑却するのは、その領域を無視するのではなくて心理學及び哲學に分擔研究をなさしむべきものだとするのである。併し形而上に動く心的研究なくては恰も足土を踏まざる感あるかして、彼等の著述には屹度、人と經濟の關係、人と經濟活動動機、經濟と倫理及び政治などに數頁乃至數十頁が割かれて居るのである。ただ彼等の動機論が功利的となり、權力と搾取の原動力となり、極端に非社會的・非道義的結論に終る傾向を辿るのは不可解であるが、兎に角經濟學には經濟活動動機論のあるべき淡い責任を感ずるかに見える心理的傾向は尙微笑まれるのである。

さて研究の途上經濟學と人生との關係の必然はさる事乍ら、人生を個人單位で視くのと人間協同體として觀察するのとは大きな差がある。個人を以つて社會構成の原子となし其の理學的集計を國家なり社會なりとすれば、それは舊來の經濟學に追從するのであつて、何等新體制も新秩序もあり得ないのである。吾等の經濟學は協同體又は國家と個人との不可分關係を認識する個卽全なる大我一元の思想に立脚するが故に、個人生活及び協同體生活と定義中に言つても、そは二つの異つた生活行程を意味するものではなく、渾然融和の有機的生命體たる一存在現象の動的一面を言ふものなる事を指摘したい。

經濟學が社會學の一分科なるに異議を挿むものはないだらう。あるひは人間經濟活動は人間社會活動の大部を構成するとも放言し得るかも知れない。殊に經濟行爲を物心兩面に亘つて研究對象とする皇道經濟學では、社會現象の廣範圍を掏獵するを要し從來經濟學に與へられた分野よりはずつと廣汎なものと考へてよいのである。而して社會的現象を目標とするとは云へ其の取扱はれる現象は單に膝手に、自由に無秩序のまゝの現象を採り上げるのではなく、國家に依つて規律づけられ計畫され、道義精神を中核として動く經濟現象の多くを考察し、法則づけを爲すのであつて、常に國家の存在と結

び付く事を意圖するのである。例して見る。今玆に何の某が材木千石を所有するとする。彼はこの材木の値上りを待ち國家が造船用材を必要とし、重要工場が工員の住宅を必須とするのを屈目に、材木の値上りを待つて自己の所有物を倉庫に收め藏して出さなかつたならば、昔の經濟學ではそれを是認したのだが、それは精神的に經濟慾求の原理に背き且つ大我的國家觀念を缺き加ふるに人生生活並に國家行動と沒交涉の理由の故に私は之を正しき經濟活動とは言はないのである。換言せば如上の材木は國家生活と人間生活とに無用のものでしかなく、個人的には所有主の財產の一部を形成するかも知れないが、それはゴムの樹が天然林の奥深く繁茂するのと何等擇ぶ所はないのである。

私は人間經濟行爲は動因があつて生ずる旨を第七章に既述したが、其の動因は國家又は個人の生活を營む爲のものであり、從つて之を他の言葉で、國家又は人間の生活慾充足と言つてもよいのである。あるひは慾望充足と云へば舊經濟學の履む道ではないかとも考へられないではないが、新經濟觀念では生活を營む爲の物の慾求に道義を忘れず舊體制では利潤を考へた點に兩者の間相當なる開きがあるのである。

イリノイス大學のブロージエットは「經濟學は人が限りある手段に依りその慾望を充足する爲の活動の記述である」と云ふが、米國の經濟學は先づ彼の見解に依つて代表されると見ても差支へなく、イーリー博士も「經濟學は富を獲得し富を使用する爲の人間活動現象の學なり」として獲得と使用を中核思想とする慾望道經濟學と大なる逕庭を見ない筈である。

の裏づけに道義を以つてすれば定義だけの上には我が皇道經濟學と大なる逕庭を見ない筈である。

正統學派經濟學は、人の慾望に限界なく經濟財には限りがある。かゝる不均衡の關係を調節する法則などを發見するのが經濟學の職責であり、偶々かく發見される法則が道德的であるか否やは經濟學の是否する範疇ではないと言ふのである。

皇道經濟學は個人又は國家の必要なる財を目標とし、個卽國家の慾求する所の財貨を積へるがそれを需める慾望の無限大を惟ふものではなく、もし人間本能の中に多少でもさる意識ありとせば必ず他面その傾向を制肘する倫理的本能の動きも亦考へられるのである。つまり無限の慾の跳梁を許さない經濟生活を新しく構想するのである。

道義に基礎づけられた慾望はたしかに經濟學の研究指標である。國家の綜合計畫が必要とする慾望充足の途は吾が經濟學の闡明探求すべきところである。併し國家も道義もしばらく問ふ事なくひたすらに「人は慾求するものだ。人の慾求は限りなく擴大する」と云ふ前提で學問の檢討を進めるのは新しい道義世界觀の容るゝ能はざるものなのである。

是認され得べき慾望とその對象たるべき經濟財とそれ等の關係を支配する法則の研究は、とりも直さず經濟學の內容を構成するのであるが私は少しく慾望の物的一面を記述して見ようと思ふ。畢竟慾望の發展は、まことに無限とも見える樣相の記述を試みるのである。

吾等の生活は現代に入つて巨大なる發達の足跡を印したのである。行燈の代りに瓦斯燈となり電燈となつた。電燈は圓球から流筒と進みアーク燈はネオンと利用度が逾つて來た。家庭の食糧貯藏も近代設備電氣冷藏庫がある。人造氷の冷藏函は殆んど普遍化されるに至つて居る。昔の驛遞は郵便となり電信となり、無電、電波利用の何々とまだ〳〵發展の餘地が殘されてゐるのを豫知し得るのである。昔時の人力車は人間交通の誇りであつたし海では帆前船だけが外國にまで吾等の祖先を運んだのであるが、當時たれか能く今日の快速豪華船を想像し得るものぞ。食料品の分野を見よう。米と魚と味噌と醬油に食物の實體やら調味料を獲た吾等の食膳には何時しか肉類が上り、バター、チーズ、トマトソース、マヨネーズと色とり〴〵の品物が加へられた。飲料にはウイスキーありブランデイ、ビールが數へられるに至つた。

たゞ活きるが爲の必須條件だけが是認されるのが經濟學ならば、以上に列擧せる如き近代的生活樣式の凡ては非經濟的

と格付けられるのだが、私は一概にそれ等を贅澤の沙汰と言ふのを止め、用途と目的が道義にもとづき國家生活の要請と乖離しないものであるならば、當然人間生活國家進運の向上として、かかる慾望の暢進を是認し且つ之を奬勵せんとするものである。

經濟財

個人又は國家の慾求は廣範圍に亘る。純政治、純文化生活の要請するところに現象があり行爲が起るが、それは經濟ではない。經濟には一端に物が結び付いてゐねばならず、他端にその物を動的位置に据ゑる動機が伴はねばならぬのである。而して爰に言ふ物を稱して經濟財と呼ぶが、何故物ならば物と明示せずして異つた呼稱を與へるかが疑問となる。單に物と指示すると空氣、水、光線などの生活上最大寶物にして尙經濟的に價値なきものもあるので、此の間の區劃を明らかにする爲に經濟財なる用語を使用するのである。

然らば經濟財とは何か。曰く人間が働きかけねば獲得出來ぬ物、又は人間が働きかけても無限に獲られない物となるのである。卽ち物の面から見れば有限的存在であり、求むる側からすれば獲得のために「勞力と方法」とを必要とする物となるのである。

物の稀少性が經濟的物財の性格であるが、ある時は此の稀少が自然の制限から來る事あり、或る場合には人爲的に獲得方法——機械又は資本の不足から由來する事がある。然し稀少性が物に經濟的價値を與へるからとてその價値の增加を狙つて無理に稀少性を作爲した不作法が舊經濟秩序下に許されたのである。米價吊上げを目論見て米の買占め操作を行ひ、蜜柑の値上りを希望して收穫を破壞するなど以前には屢々繰返されたが、かかる經濟操作は倫理的動機を缺くが故に皇道大我主義經濟構想の中に容れられる位置なく、もしかかる工作の加はる物が存在する場合、國家は之を處罰するであらう。

し、新經濟學はそれを正しい經濟活動とは考へないのである。

物の稀少性を生產手段の缺乏から由來するとなす經濟學者は多い。ライオネール・ロビンスは經濟學を以つて、不足勝ちな生產手段の處理に關する人間活動研究の學問だとさへ斷言しその他亞米利加の經濟學者の多くが此の說を採るのである。然し私は稀少性を物それ自身の側と之を利用する國家又は人間の使役する獲得方法との二面から判定する方がより正確だと思ふのである。

財の離合集散の法則——交換

經濟學の定義に於いて私は、財の離合集散なる文字を使用した。財は動く事なしでは經濟現象を起さない。一人の山樵が自給自足生活を營むのには經濟はないのである。つまり原始時代の物生活には經濟財の動きは無いのであつて、物が甲より乙に乙から丙にと移動するところに經濟が始るのである。此の意味からして經濟の初期には貨幣がなくても經濟行爲はあり得たのである。一部落の甲が栗一箱の餘剩を生じたところへ同部落又は他の村の乙が幸ひ栗を需めるのでそこに落ちつき場が發見された。而して乙が丁度その時其の場所で小豆を所有し、甲之を要求してゐれば直ちにその交換と條件が相談されるのであり、小仕掛ながら完全な經濟行爲が成り立つのである。あるひは彼等兩者の間其の時其の場所の受授を爲し得ざる事情存在し、例へば乙に小豆の持ち合せなくて他日その引き渡しを約束する時にも完全な經濟現象が起つたと見做すべきである。

而して離合集散には交換の意を含むは言ふを俟たざる所であつて、先に例示せる如く經濟には與へる者と受ける者とが

豫想され、此の兩者の間に交換行爲があつて初めて經濟現象が起るのである。たゞ時代の輾轉は交換の規模を大にし受授者が國家又は會社、組合などと移り替ることはあるが、交換は必ず經濟の中核條件を形成するのである。

舊經濟秩序の下で交換は自由に放任すべきものとされたのである。甲は買主が世界の何處に居住するかを知らずに帽子を製造する。商人はかく製出される帽子を何處の何の誰に賣る目當なしにそれを仕入れるのである。而して一方農家は米を耕作し馬鈴薯を作る爲に何等の計畫も調査をもなさずして作付を斷行するので、かうした行き方を自然に放任すれば、需要者が表はれたり、又は價格作用に依つて需要者が減少したり、結局經濟の均衡を得ると言ふのである。併し新經濟觀念はその自由放任が自然調節を遂げるとは信じないのであつて、交換は經濟あるための必須條件ではあるが、その交換は國家と人間生活を中核とする人生計畫に基づくものなる事を明らかにするのである。

交換は時代と共に複雜となり其の初め二人の間に行はれた過程が現在では一つの交換が完遂される爲には幾重にもの手續を經ねばならぬのである。日本の雜貨が海外の某國のある一人の手に入るまでに、製造人からブローカーの手に入り輸出商へと渡るが、此の一つ一つの場合に何物かの對價物件との交換が行はれる事は勿論想定されるのである。それから此の同じ雜貨は海運會社の手で仕向け落ちつき先に屆けられ、そこでも亦輸入商、仲買人、ブローカー、卸賣商、小賣商と交換手續の幾回かを經て小賣人の店頭に飾られ又は消費者の使用となるが、近代經濟では是等無數の取引手續は貨幣との交換と云ふ形式で一先づ片づくのである。

玆に於いて吾等は近代經濟では物と物との直接交換が行はれずに、先づ物と貨幣なる仲介物件の存在を考へねばならぬやうである。貨幣は利潤追及思想に拍車をかけ、自由經濟、資本主義經濟を以つて貨幣經濟と同義異語と想はしめる程にも相似點を有するのであるが、是までの貨幣は必ずしも倫理に裏づけられたる經濟界の構成分子であつたとも限られず却つて非倫理的動きをさへ爲したと想はせるものがあり、將來の經濟界に不可缺な條件ではあつても同時に相當な觀念的及び實踐的變革を要求されるのである。此の點の詳細は本書第三部の貨幣及び信用の章に詳述するつもりである。

財の離合集散と分業

經濟財の離合集散は市場に於いての毎日の出來事であり、物の稀少性の爲及び物の獲得方法の困難性の爲にそこに一定の傾向と法則を產み、交換の便法に依つて愈々經濟現象の複雜加減を增加し、人間慾望の擴大性に煽られて愈々經濟行爲の增大となる過程を辿るのであるが、之等幾十回と繰返される離合集散の現象を惹起する事と表裏して世の中の分業が存在する事を記憶せねばならぬのである。

經濟學の祖スミスは分業を以つてその始めたる科學を飾つたと言つて良い。彼のピン製造の工程に就いての說明はあまりにも有名であるが、吾等も亦之を繰返し後の研究に參考を供する事としよう。

スミスの分業論と自利的活動の原理は後の時代には彼の想像しなかつたと思はれる社會形態を作り出すに至つたが、其の實彼自身は經濟學をある特殊階級の利益を目的として研究したものではなく、矢張り社會の全體的福利を主眼としたのであつた。その自由政策にしても神の造つた自然に從へと云ふ程の意味であつた事は彼の色々な論述に親知出來るのだが、それはそれとしてここでは經濟社會は分業に依つて保たれるとする說の基本的例證であるかの有名なるピン工程の話を取り上げて置いて見よう。

全くの素人は一人一日一本のピンを造る事は困難である。然るに分業の方法に依ると一人の職人は針金を伸ばし、つぎの人は之を眞直ぐにし、あるものは一端を尖らし、他の者は頭部を研ぎ、頭部を着けるのも亦異つた職工の爲す所とな

る。かくて出來上つたピンを磨くのも亦之を包裝するのも各々異つた仕事異つた職工が行ふのである。スミスは言ふ。「私は嘗つて十人ばかりの職人が働いてゐた此の種の工場を參觀した事がある。そこではある者は二三の全く異る職能を兼ね行はねばならなかつた。彼等は極めて貧弱で、必要なる機械ですら不自由に當てがはれるに過ぎないのであるが、然も一生懸命に働いて、一日約十二封度のピンを造る事が出來た。一封度のピンは普通型のものならば四千本以上であるから、是等十人の職人は毎日四萬本以上のピンを仕上げ得るのである」

而して分業の利益を左の如く擧げて居るのである。

一、同一の仕事から來る熟練

二、一仕事から他の仕事に移り行く爲に要する時間の節約

三、一種類の仕事に從事する者に自然に暗示されるだらう發明

げに社會は分業なしでは一刻も居られない程にも複雜化しつゝある。農業家は他階級業の人々に食を與へるための生業に從事し分業を擔つてゐるのである。頭腦勞働者、官吏、藝術家などはそれぞれ分に相應した仕事の分野に働くのであり、その限りでは分業であると言つてよいのである。

併し分業にも限界が置かれねばならぬ。一つの仕事を完全に知悉し、之に熱中する結果、常識の疑はれるやうな人間が出來るのである。云はゞ偏屈人は分業過度の所產である場合が多い。かう言ふ世間ずれのしない人々には詐欺漢などの犧牲者が往々あるのである。

何はともあれ財の離合集散するのは分業あるところから結果するのである。われ等超原始生活への復歸を夢見ない以上當然分業、便とその利益に信倚せねばならず、かかる經濟制度は人間社會とその生命を偕にするだらうことは明言できるのである。

經濟學は物心兩面の學問なり

私の經濟學定義は物心兩面現象の學問であるとしてゐるが、それについては本書第一部第三章に縷述してあるので爰では說明を省略することにする。たゞ簡單にかう言つて置かう。即ち經濟現象は心的には本能的慾求から始り其の慾求の本質・正體を研究するのが斯學の思想論であり、物財を捉へて其の人生との連關の法則を討究するのが物的經濟論なのである。私はこの檢討方法を立體的經濟學への道と呼ぶのである。

皇道經濟學の定義は最後に、經濟學は科學なりと言ふに答へねばならぬ。凡そ科學の職能は森羅萬象を集積、取捨、分類し其の間の原因結果の理を究め、法則を剔抉し、而して之等を編輯して類別、分科を與へ系統を建てるのであつて、雜然紛然現象を現象として徒らに羅列を事とするのでは不可なりとされる。

即ち自然科學は一定量の同系統に屬する現象が人間に依つて實驗され、其の中から法則が發見され、集大成するところに存するのであり、人文科學は更に物と國家及び人間生活と有用なる連絡にあるを必要條件とするのであり、此の意味に於いて經濟學が科學である資格は充分であるのである。殊にその科學が國家社會に有用に連繫すと言ふ一段は、皇道經濟學の特に强調せんとする所である。

科學の中でも自然科學は自然界の物象を研究する學問である。自然界にあるがまゝの物から法則を曳き出す時にその法則が人生に惡影響を及ぼすものであつても學の獨立性の故に止むを得ずと考へる向もある。洵に其の通りであつてよきもあしきも有るがまゝを研究するのが自然科學の責務であるが、其の場合害惡を人生に及ぼす法則などあり得ざるので、一

見惡いと見えてもその正確なる性質發見の故に人生にその豫防法を講じ、禍を轉じて福とならしめる譯となり矢張り人間生活に有用なものとなるのである。

科學を自然科學と社會科學の二樣に分類するのは吾等の常識である。化學・理學・植物學の如きは第一類であり經濟學や政治學は後者である。自然科學の研究對象が比較的恒久性を帶び試驗管中で同一條件のもと同一結果を與へる經驗を繰返し得るに反し、社會科學は複雜多樣の現象を相手とし、無形の「連繫（むすび）」と言ふが如きもの又は私の皇道經濟學の場合において は「動機の倫理性」などの形而上的現象をも考察思惟するが故に、同一經驗の繰返しは甚だ困難となるのである。遠い將來はいざ知らず今の時に於いて人間を試驗管に投じ藥品を加へて一定の心理的動きを發見しそれを景氣波動に統計加算して、自然科學的答案を引き出す事はまづ考へられないのであるが、さりとて如何に複雜極まるものとは云へ、日本の生糸不作が、マンチエスターの綿織市場に投影したり又は亞米利加の勞働賃銀に小波動を與へる一脈の經濟的行程は觀測し得るのであつて、玆許經濟學の科學たるに疑義を挿む餘地理由はないのである。

私は玆に重ねて言はんとする。宇宙は人生なくても存在する。人間がまだその貌を具へざるに先だち世界は存在したのである。やがて世界の一小圓點である地球に人生なるものが出來、世界の一小超微分子的存在として人間の呼吸は始つたが、其の小超微分子にも世界は在るのであり、大世界に通ずる關係は物質的であつたり、精神的であつたりするが、その元は一なのである。偶々物質と精神が二つの異體であるが如く思惟するのは吾等の錯覺でしかないのである。物心其の源を一にし其の性格を同じうする理の究明は哲學的よりはむしろ信仰的であると惟ふが、その信仰は無理のないところのもので、近く吾々の論理や心理の深刻なる研究と錬磨とに依つて、理性に愬へて證明し得るものとなると考へ得る程の信仰なのである。

かかる關係の物心二面の現象を科學的に分類したり集纂するのが人文・社會科學と呼ばれるところのものであるが、經濟學はその中の生活財の部面を分擔し、財の依つて動く精神的動機に着眼する事に依り眞の學問としての公理本分に達すると私は解するのであり、依つて與へたる定義も亦さる心に則つて下されたのである。

第二部　經濟學の問題

第一章　經濟主流學派一瞥

過去二百年に亘る世界の經濟組織は正しく資本主義を中核とするものであつた。中には國家社會主義政策を執つた國があり共產主義の上に經濟組織の大變革を試みた露西亞の如きものもあるが、大體に於いて世界は自由主義的資本組織の經濟を行つたので、獨逸歷史學派の經濟組織も經濟學として見れば寧ろ資本主義政策學に傾いてゐたのは爭はれないところである。たゞ歷史學派の國家主義經濟が倫理的經濟組織を目指した點は、われわれが志向する彼岸でもあるので、或は之だけはファシズムと同根類似であり、皇道經濟學と理念的に略ぼ同一であるとして取扱ふべきであるかも知れない。とまれ私は、概念の混雜防止の爲、皇道經濟學、ファシズム、資本主義、社會主義、共產主義のあらましに就き說明を加へて置かう。

ファシズム

一言にして盡さんとせば、ファシズムは國家統制主義である。國家の政治が先行して經濟組織を作り成すところファシズムの經濟が在るのである。亞米利加の經濟學者ブロージエットの如き、之を國家資本主義の變態と評するものもあるが、當らずとも遠からずである。亦ファシズムを全體主義と理念づける事も出來、「公益は私益に優先する」ものとして國家の至上位置を前提とするのである。

ファシズムは唯物主義を排斥し、機械的、物理的社會觀を排除するが故に、當然その逆である社會の生命體、有機性を是認しその倫理性を主張するのである。獨逸では民族的國家と言つて居るが兎に角國家の全體に依據して個人があり、個人に俟つて國家があると考へるのであつて之を全體主義と呼ぶことの眞に理由あるを想はしめるのである。

ファシズム經濟の特長は（一）私を國家に結び着ける、（二）國家の政治が經濟に先行する、（三）指導者原理、（四）行動主義にあるのである。而してそれ等の特異性を一貫する道義を第五として擧げる事も出來るであらう。

ファシズム經濟を資本主義の一種だと云ふ學者があるやうに、此の主義は「私」を沒却し去るのではなく、貨幣經濟も私有財產制度も共に容認するのである。たゞ公益は優先すると言ふのであつて、經濟なるものが國家政治の外にあるのではなく、財產共有の共產主義の如く個人經濟の全貌的無視でもないのである。

指導者原理は獨逸及び伊太利の政治原理であるが、經濟組織の上に反映してこの賢良主義は新經濟組織の特長となるものである。ファシズムは人間の機械的平等性を否認し、人は異つた性格と差別ある叡智の持主であるが故に社會を成すのであり、其の中に特に賢良なる者が指導者となる。而して指導者はどうして擇び出されるかと云へば、それは賢良自らの自覺とインアビレイションに依り必然的に發生し來るのであり、賢良は高く身を持し德操に缺くる所あつてはならないのである。一體民主主義は多數主義であるとは言つても、それは一種の口頭禪の域を脫せず、一黨一派の少數者が指導し、而して國民の一部分がその一黨一派を擇ぶのが常則であるところよりして必ずしもその名民主は民主ならざる實情であるのである。

亞米利加は民主主義の總本家であると自任して居るが、大統領選擧に際し大體何パーセントの國民が一人の大統領を選出するにあづかるかを考へて見ると、先づ四千萬人の有權者の五八%が投票權を行使すると假定する（實際の有權者はも

つとある。而して上の比率はルーズベルト第三回選出の時の比率だが、普通の場合五〇%以上は棄權を爲すのが米國の選擧狀況である）卽ち二千三百萬人の投票となる。その中當選候補者が五二%を獲得したとせばその確定投票數は一千二百六萬四千票であり、之を國民有權者の全數四千萬に比して僅かに三〇%に過ぎないのである。卽ち米國でも大統領は國民の一小比率の投票で選出されてゐる實狀である。兎に角、賢良指導原理は民主主義にも實際上適用されて居たとも考へられるもので、ファシズムが此の原理に活を求めるのは過去の經驗からであり新政治原理として一應肯けるところである。

ファシズムには英雄的、行動的部分がある。ムッソリーニやヒトラーが性格的に左樣であるばかりでなく社會又は國家統一を感情的にも成し遂げようとするところから伊太利の黒シャツ黨は古代羅馬帝國の復興を標語として採用したのである。

ファシズムは行動的であり且つ倫理的である。國家を中核に國民生活を律するが故に個人の我執も利己も容れられる餘地がなく行動は道義的であらねばならぬ事となる。而して正しき思惟は直ちに行動に移せよと教へるので極めて積極的であり第一次世界戰後の獨逸、伊太利が英、佛、米の聯合側に加へられた重壓から起ち上る爲には一刻の遲疑を許さなかつた情勢からして、行動主義性格を其の規矩としたのは素よりしかあるべき必然であつたのである。

異つた角度からファシズムを國粹主義・變形資本主義・階級協調主義・非議會主義と見る事も可能である。經濟を國家統制で括りつけ自由競爭を許さないから勞資は協調せざるを得ず、產業は總て計畫的調和の上に立たねばならぬのである。勿論私心を含まざる競爭は部分的には存在すべきであるが國家計畫の全體の上にはひとり協調のみあり得るのが全體主義經濟のなりはひとなるのである。而して議會主義否認と言ふは議會の立法權の至高性と民主主義時代の多數決及び議員の選出方法の否認であつて、獨逸でも伊太利でも議會は依然存在したのである。

我が邦の議會に關する限り政黨の變革と議會政治理念の入れ替へはあつたが、帝國議會は嚴として存在し議員の選擧法も依然存置されて居るのである。あるひは時と共に多少の改革は免れまいが、寧ろ帝國議會は官僚獨善を監視する意味と、國家賢良の集合を目的にその權能の弱體化は避くべきであると惟はれる。たゞ議會をして其の職能を盡さしめる爲には、その昔彼等議員が政權を私し同黨異伐の泥合戰に終始したやうな機會を與へず、ひたすらに政府の政治に參與する機關として存置すべきである。

要するに、全體主義經濟は形態的には我が皇道主義經濟と異るところ尠いのである。たゞ國情の差に歸因して經濟の實踐に夫々適宜の處置の採られる事は素よりあり得るのである。然らばファシズムと、皇道經濟の精神的部面はどうか。此の點も吾等は大同小異であると言ふを憚らないのである。たゞ、全一主義に於いて個は全の爲にあり、全は個を掩護するのだとの個と全の對蹠的存在觀念を更へて、我が日本精神の上では個卽全、全卽個と稽へて其の對立を認めず、是等二つの觀念を不可分とする所に其の長所があるのであり、それでこそ一億一心も、君民一如も、差別卽無差別も、多卽一も悉く同一思惟の中に收め得られるのである。

資本主義

現在のところ蘇聯を除いて世界諸國は多少とも資本主義制度のもとにある。日本及び獨逸の如きは皇道主義、全體主義と餘程異つた方向に針路を執りつゝあるが、それでも全然資本主義から遁逸したのではなく、寧ろそれの生成發展であると云ふ方が適當なのである。

資本主義の特質を先づ掲記して見よう。」

一、企業の自由
二、利己的動機
三、機會均等
四、私有財産制度
五、貨幣と價格
六、競爭の自由と獨占の自由
七、經濟政策

資本主義では企業は全く自由との原則に出發する。企業の善惡を個人の判斷に任せ鍛冶屋だらうと農夫であらうと何等第三者の意志で左右されるのではないと言ふのが建前である。何でもよい企業者自身の目的に叶へばよいのであつて、社會や國家は個人が利すれば自然その利益に均霑すると考へるのである。

併し利己的行動の自由はいくら資本主義の下でも相當の掣肘は受けたのであつた。第一社會的良風俗に於いて抑制を受ける。盜財行爲は不可であるし詐欺も許されない。政府が「最少政治は最良政治なり」と無干渉を標榜しても町の角々に設愚する酒場やカフエーの開店や、街の表通り二階家の上層どれもこれも玉突場であつてはならず、法律を造つてそれに許可制を布いて調節せねばならぬ。併し大體論として資本主義は企業の自由を原則としてゐる。

資本主義經濟は利潤追及の經濟である。これは個人の物慾動機だけを助長する態度で進歩し來つた經濟制度に當然育まれさうな現象であつて、十八世紀の終末に始る產業革命以來富をのみ說き利潤追及を奬勵した結果は、極度の社會不安を釀成するまでに其の發展を見たのである。

資本主義經濟は利己的動機に依つて推進されるとは言へその利己は利潤追及ではない場合もある。卽ち社會的榮譽、家族的愛の發動又は愛國的行動などの場合である。某會社の高級社員が年收五萬圓を捨てて政府の顧問となり一年の報酬八千四百圓に甘んずるが如き、親なる社長が他人を雇入れる事が便宜且つ有效なるにも拘らず、其の子の將來を慮つて之を雇用するなど利潤を無視した場合だが、然しその動機は利己にあつたのであり、資本主義は是を是認して居たのである。

利己は資本主義の常則とは云へ之亦無限にその翼を伸ばしたのではなく、資本結合に依る利益の壟斷は法律に依つて阻止され、工場設備の不完全なるは監視を受け、小兒の勞働は制限を受けたのである。吾々新しい經濟秩序を創めんとするものには以上の如き掣肘を最も合理的にして且つ公理なりとするのだが資本主義は之を例外則と見るところに兩主義の差を見るのである。

資本主義は自由主義のもとに發展したもので同時に平等を主張し、政治的には自由・平等と一呼吸に取扱ふ程であつたので、その思想に基する經濟構想が機會均等を狙ふのは當然なのである。然し實際問題として資本主義制度下の機會均等は一種の空文に終つたのである。幾多の競爭は出發點の均等ならざるが爲に有爲の士を犧牲にし、數多の企業が均等ならざる環境に崩壞の餘儀なきに至つたであるが、所詮平等も機會均等も富める者の空念佛にしか過ぎなかつたのは否めない資本主義の汚點であつた。

つぎに資本主義の特異なるものに所有權を數へる事が出來るが、所有權は皇道經濟でも全體主義經濟でも之を認めるのであり、ひとり資本主義のみ之を獨占するのではない。ある意味では社會主義も消費財だけに關しては私有權を是認するのである。社會主義の場合私有を否定するのは、生產の方便機具（生產財）の公有共用を主張する場合だけであり、個人の生活の資又はある程度個人享樂の物資には干與しない態度に出るのである。

私有權と言ふのは人間固有の權利であるか、又は人間社會生活に基因し、歷史的職由からかかる習慣權が發生したのか、我が邦では古來土地に關しては皇土なる觀念があり、大化の改新、明治維新に於いて御上に奉還する思想が明瞭に動いた所から見て、土地所有權を人間固有のものとは考へないが、世界の他の國々でも所有の權利が社會生活の所産だとの說が多いのである。經濟的には所有權原理は企業を覆轍し創意を働かすと言ふにあつたやうで、資本の蓄積も所有慾あつて初めて達成し得るとしたのである。

資本主義下の私有權もまた無制限ではない。善良なる風俗に背き公衆衛生に害ある如きは勿論個人の財產自由行使の許されざる理由となるのであり、その他動產についても同樣の事が言ひ得るのである。たゞ資本主義のもとでは之等制限は例外であり本則は私有の保證と云ふに存するが、わが皇道經濟學では是等例外も亦本則なりとの建前に理論を定着せしめようと意圖するところにその特異點を發見するのである。

貨幣と價格の制度は資本主義の重要なる機能である。近代の貨幣は多くは金銀であり又はその代用紙幣であつたが、貨幣が米であつても麥であつても貨幣たる意味に差はないので總て物の交換が行はれる時に物と物が直接に取り交はされずに其の中間に第三者的仲介の存する場合その仲介物は貨幣であるが、資本主義經濟は高度の分業に依り複雜なる交換を行ふを趣旨とする關係上、貨幣の高度使用は當然なのである。

且つ、貨幣の存在は物を量目で又は各物品の異る質に依つて其の物の交換的位置を表現する繁を避け、貨幣に依る値段を定めて一言の下一見の裏にその値打を言ひ現はすのであり、ひとり資本主義ならずともかかる便法に依據するのは物の自然であると想はれるのである。昔時全くの物々交換の行はれた原始社會はいざ知らず、苟も初期經濟の樣相芽生えた時既に貨幣らしきものは存在したと想はれるが、資本主義の時代に入つて初めて經濟に貨幣の缺くべからざる關係を認識したのであり、之を以つて資本主義經濟社會の特質とさへ考へるに到つたのである。

資本主義の下には競爭は成功の武器であつた。既に私有權を是認し利己心の活躍を容認する以上、競爭は最も自然な歸結なのである。競爭が完き機能を發揮する爲には第一、賣主と買主とが市場に存在するを條件とする。第二に賣る側の販賣約束、購入者の組合規約などの人爲的拘束の挿入なきを前提する。第三に關係者がある程度市場知識の所有者であり商品操作に心得ある者たるを要するのである。之等諸條件が働いて各人は無用に高價な市場價格を貪る事なく、人の虛につけ込んで弱者窘めの相場で富者が物を引きとると云ふやうな場合も少いのである。げに資本主義の需要供給は競爭に依存すと考へられる程で資本主義に競爭なきは正しく床の間に掛軸なきが如きものなのである。

併し物には際限がある。競爭も極度に達して弊害を產み、不公平なる競爭、發足點均等ならざる競爭、富者が貧者を强壓するやうな競爭が資本主義經濟を闇むに至つて、それ迄一直線に進行をつゞけた競爭も其の針路の轉換を必要とするに到り經濟界では協調、協力の空氣を醸成し始めたのである。勞働組合は卽ちそれであり、カルテル、トラスト、コンツエルン等は悉く個人競爭の弊に堪へ兼ねて經濟的協合の趨勢を追つたのだが、之がまた獨占の競爭なる新しい樣式を作り出したのである。

獨占的競爭は二樣に解釋が出來る。企業の合同に依り賣買又は生產の競爭を大規模に行ふのと獨占的企業形態を構成する手續上の競爭と云ふのであるが、いづれにせよかかる競爭は近年驚くべき大仕掛に亞米利加で行はれたのであり、戰前の我が邦も、聊かそれに眞似たところ無いでもなかつたのである。

產業協調は企業の合同を促し競爭の弊を絕たうとしたのだが、今度は却つてより大なる競爭を營まねばならぬ破目に陷り、廣告に依り、品質と値段の競爭に依り、ある意味での社會貢獻をなしたと認められる節もあつたが兎に角亞米利加に

於いて其の著しい大袈裟な競爭の例を見るが、かの二三煙草會社の如き廿本入何程と値段の協調は出來、包裝の制限にも一致行動を執りつつ、廣告の上ではあらゆる美辭麗句を以つて自己を宣傳し、又は有名なる男女映畫俳優の寫眞を景物として添附して人氣を煽り販賣戰を營んだのである。

資本主義の競爭は尙玆で止まない。同一物品ならずとも購買主の側に於いて代用品を使用する惧れもあり、發明に依り一商品の需要減退するなどの事象もまた競爭であると考へてよい。例へば氷製造業者は電氣冷藏庫の出現に依り自己商品需要の大激減を見るが如き即ち之である。

かくて資本主義は競爭に終始し、發達し、また類廢の運命を辿るものと斷言しても差支へない程なのである。

資本主義經濟は自づと貧富階級の懸隔を生み數多の社會惡の釀成となつて十九世紀の中頃にはその矯正の爲とて社會主義經濟提唱され、サン・シモンの集產主義、ローマン主義・復古主義など唱導されたが、いづれも實踐的效果世界的なものはなく、其の間ひとりジョン・スチュアート・ミル以來の社會政策派の主張に依る資本主義行き過ぎの矯正施策のみ相當なる勢力を占め、獨逸に入りてはシュモラー博士等指導する社會政策學會の誕生となつて、愈々經濟政策に依る經濟の倫理化は强められたのである。而してかかる政策に依る資本主義の行き過ぎとその犧牲との緩和が圖られた方が、むしろ學派學說に依り經濟惡の根本に遡る改善は尠少であつたと言ひ得るのである。

かくて國家權力に依る經濟政策は、好むと好まざるとを問はず各國の政治を支配し、我が國でも外國貿易の上に、米穀取引所法改正に、電力の國家支配に、製鐵法制の强化等にちりぢりと政策の複雜化は進行、終りに現在の國有、營團、統制の端緒を開いたのである。

之を亞米利加に見ると實例の著しいもの數限りなく存在し、「最善の政府は最少の民間企業干涉を爲す」との民主主義、資本主義の公理を逆に、頻々たる企業干涉的政策を考へ出し之を實行に移したのである。がそれもその筈第一次世界大戰後の米國はともすれば民業が政策を曳きづるが如き形貌を呈し、セオドル・ルーズベルトの有名なるトラスト征伐の棍棒政策にも拘らずモルガン一派の財閥は天馬空を行くが如き勢で米國國民生活に喰ひ込んだので、自然政策の行手は干涉主義たらざる可からざる情勢にあつたのである。

一九二九年の世界大恐慌の種を蒔いたと想はれる大統領ハーデイングとクーリッヂの放漫政策は益々財界人の政治腐蝕を助長したかの觀があり、それだけ一九三三年フランクリン・ルーズベルトの時代となつてニューデイールなる極端な政府干涉政策となつて表はれ、州際鐵道調整、農業政策、金融助成、家屋建築貸付と景氣引上げ人爲工作、その他何と、煩雜極まりなき政策の施行となつたのであり、米國のニューデイールはそれ自身統制であり、全體主義的經濟政策なのだが、それでも傳統的に民主主義とか自由主義とかに愛着を感ずる亞米利加人は、未練を言ひ乍ら世界の必然の動きについて行かねばならぬ破目に立つのである。

つまり、飽く迄自由の名の下、資本主義經濟制度を死守せんとするアングロサクソン及び其の同系國家群はミル以來の傳統である經濟政策に依る調和を意圖して來たが、頻發する政策は結局全體主義の經濟理論に援けを需めなくては經まりの付かないものとなつたのであり、吾等は世相の潮流が必然に一定の歸着點を發見する凄じい勢に、今更ながら喜悅と驚異を感ずるものである。

社會主義

極く大まかに社會主義の概念を把握する事を目的として說明するならば、社會に於ける生產の方法又は手段を個人の手

に置かずして之を社會に移すと言ふのが此の主義の中核構想である。生産の手段には自然的な土地と人爲的な生産財が考へられるので、社會主義制度では私有權の一部否認を意味することとなる。現在世界で社會主義國家と稱せられるものは露西亞であるが、ロシヤの共産主義は私の言ふ生産手段の公有だけの社會主義とは異るものがあるので、純粹の社會主義實踐の國も社會も是までのところ存在じなかつたのである。

ロードベルトスやワグナーなどに依つて強く主張された獨逸の國家社會主義はビスマークに依り一部の政策的實行となつたが、それはほんの一部に過ぎないのであり全面的に社會主義の行はれた國は未だ曾つて存在しなかつたのである。

社會主義社會では、私有權は消費財だけに限られる。此の種の經濟社會では資本も土地も公有であるが故に、當然利子も地代も無いので、社會が何物を必要とするかその社會內の個人生活は何財を要求するかは、公共機關に依つて綜合計畫されるのである。個人は企業家たるを得ず從つて利潤を獲る事は許されない。生産は總て團體計畫に依るが故に企業の選擇も一に懸つて國家又は團體に存する。かくて個人の利潤追及は企業の動機とはなり得ないのである。

社會主義の社會では私人的經濟動機に動く人間活動は尠くなるのである。社會の構成員は個人財産獲得も企業の自由も許されざるが故に自づと經濟の目的を集團本位に導くだらう事は想像出來る。而して個人は支配人となり一介の勞働者となり生産に參與し受けるところは貨銀となるのである。個人は貨銀以外には社會的榮譽を獲、儕輩を指導する誇りなどの光榮に滿足するに至るだらうと想はれるのである。

社會主義下にも幾分私人的物慾を考へるだらうと想はれるのは、此の社會に於いても貨銀の水平的平等は考へられず、人はその勤勉と能力に依り幾分の差を認められ許與されるからである。また自己の就職すべき企業についてもある程度の選擇自由は承認されやう。何故なれば人各々好不好あり修得するところの知識經驗に差あるが故に各自の長所を最善に活

用する爲には職業を一二にする必要が生ずるからである。但し以上の如き理由に依る勞貨の差又は仕事の自由等は資本主義下のものとは背壤の差があるのは素より當然である。

社會主義に遺産相續を認めない。社會主義産業は競爭を否認する。凡てを計畫生産に依り、總てを計畫配給に俟つ以上競爭は痕を絕つ以外に方法はないが、それでもより良き生産位置に於いて一層高き貨銀を獲んとする努力の競爭はあり得る。消費財獲得面に於いてもなるべく多量に且つ良質のものを受けんとする競爭は絕えないだらう。たとへ度合が僅少であつても貨金收入に差等が承認される上からはそれに依つて需めんとするところに幾分競爭の餘地あるは否めない。

社會主義制度では貨幣の用途は極めて狹められる。社會主義の原則は社會の計畫なるが故に貨幣の仲介に依る自由市場の交換は思惟に上らないのだが、併し物の計量のために貨幣の直接使用でなく、計畫のために便宜な名目の爲にのみ貨幣單位が用ひられやう。あるひは外國貿易にだけは暫定的に貨幣の必要は殘るかも知れない。土地及び生産財は夫々異る生産機關に分與され、貨幣見積額何程とだけは呼び做されるかも知れない。

生産資本は社會主義では國家又は社會の計畫に依つてその出所が規定さるべく、資本主義下の如く利子の蓄積からも租稅からも出て來ない。生産資本は悉く國家又は團體資本であり、産業經營は悉く公營である。配給機構も亦同じ。

以上私の說くところは社會主義の造り就さんとする社會の想像されるあり方であるが、かう云ふ目的達成の道程に於いて社會主義には數多の異る構想がある。マルキシズムに於ける階級鬪爭などその最も著しいものである。マルクスの社會主義は唯物史觀・辨證法など云ふ理論的難解の點もあるが、それ等の一言でもを了解せざるものでも階級鬪爭の何であるかを知る程に、マルクス社會主義はそれと結びついてゐるのである。併しどの社會主義もが各階級間に於ける對立關係を惹起する條件を除去し、階級そのものをすらも消滅せしめんと志向するに一致する點は記憶すべきである。

社會主義の生産財集中は勞ひ、現實問題として現在の小資本家の財産を如何にして奪取し如何にして之に酬ひるか。小株主の無數、小地主の巨大なる大衆をも大資本家、大企業家と一樣に取扱ふのは政治的に面白からざる結果を齎すのではあるまいかとの懸念は充分にある。玆に於いて社會主義の一派はそこに一つの區別を設け以下のやうな說明を與へるのである

「生産手段の社會化は大資本家に對し及び賃銀勞働者を用ふる大企業に對して適用し、自己の勞働に依り生活する人々の小財産はそのまま保存しようと言ふのである。然も彼等は之等の方法が進化の運動に適するのであると稱し、矛盾又は日和見主義の非難に答へようとしてゐるのである」

共産主義

共産主義と社會主義とは概念的には同一である。ある意義では以上二態の制度の差は程度問題でしかない。共産主義の私有財産否認は消費財にも及ぼすのであつて、そこでは貨銀も技能や勤勞に依つて支拂はれるのではなく、人間の生活必要が標準となるのである。極端に云へば共産主義社會では貨幣も傳票も必要でなく、ひとりひとりの團體構成員が生活の費を倉庫に行つて欲するだけ引き出して來ればよいのである。この場合自己の必要以外の品物を持ち出しても社會の他の構成員に買手があるのでなく、市場で交換が出來るのでもないので誰もが生きる必要以上の物資を掠めないと考へるのである。

社會の主義社會には競爭の餘地は幾分殘る。卽ち職場獲得又は消費財獲得上の品質種類の競爭など考へられるが、共産主義では全然さる社會員の選擇は許されず、從つてその點に努力は向けられないのである。一九一七年十月革命に依つて樹立された所謂ソビエツトロシヤは稍々以上の理念で國家組織に手を下したのであるが、その後數次の改革に依り、現在の蘇聯は共産主義の嚴格なる意味のものではなくむしろ統裁主義の全體主義となつたのである。

資本主義でも、社會主義でも、又は全體主義でも同樣であるが、凡そ學者が主義又は派と格づけするものに劃然、截然限界を規定し得るものはない。一度指導者等が主義、主張の色別を定めて見ても實踐して見ると幾多の支障が起る。共産主義はロシヤなる特殊の地盤の上に一大破壞が行はれ、其の上にレーニンの理想を植ゑつけんとしたのであつたが、やがて天下の土地を全的に國家所有とするの不利なるを發見し、配給や分配の平等は生産の混迷と低下を防ぎ得ざるを知り一種の特配制を立てなどした。最近では共産主義の依つて起つところの唯物的見解からする宗教排擊を停止し教會の再興を認めたとさへ傳へられる。依つて見るにロシヤに始められた社會主義的經濟國家も、他の經濟形態を借用し交錯混淆宜しきを得る爲に幾多の改訂を必要とするのである。

歷史學派

歷史學派の主張する經濟組織は歷史的傳統又は歷史的習慣から經濟法則を歸納せよと云ふのであつて獨逸に始りフリードリツヒ・リストを祖とする。リストの學說は主として貿易方面に向けられ、英國の自由主義貿易に對し後進獨逸の保護貿易の城塞に立て籠らねばならぬ理由を力說したのである。

リストは經濟理論は國に依つて異るとするのである。凡そ國民經濟の發達は五階段に分れる。漁獵時代、牧畜時代、農業時代、農工時代、それから農工商時代と進化するので、農業時代までは自由貿易もよいが、農工時代にまで一國が進歩するとその工業が外國のより進んだ工業の壓迫を避ける爲に保護政策を執らなければならぬ。凡そ一國の國策を樹てるに

は眼前の民利民福と永久のそれとを研究し、常に一時的犧牲を忍んでも國家百年の計は忘れてはならないのが爲政者の責任である。自由貿易に依り外國の安價な且つ良質の物財を獲るのは眼前の利益に相違ないが、それが爲國内に産業を起し得ないのは恒久の損失である。依つて左様な場合に保護の手は當然伸ばされねばならぬと、リストは說いたのである。

リストの保護主義は獨逸と亜米利加に於いて實踐經濟政策となつて輝かしい成果を擧げたのであるが、各國は各自の歷史的必要に應じて經濟政策を編み出すべきもので一概に世界共通原理などに幻惑さるべきでないと考へた事に依り之を國家主義經濟とも歷史學派とも呼んだのである。

ロッシヤに到つて國家主義經濟の主張は圓熟化し、英國正統學派の物質本位を排して國家の圓滿なる發達と社會の共同生活を經濟目的に取入れる事に依り愈々經濟の國家的色彩が強められたのである。以來獨逸の經濟學が英國正統學派に對し、個人に於ける國家の關係を截然區別し來れるは著しい歷史的事實であり、現在に至つて全體主義政治理論と全體主義經濟學を生み出した源は、リスト、ロッシヤに遡つて見ると明瞭なのである。

シュモラー博士に至つて獨逸の國民經濟學派は反對學派のオッペンハイムからは講壇社會主義者と批評されたが、經濟生活の發展を歷史的に檢討し、その研究の成果から歸納的經濟理論が生るべきであると彼は考へたので經濟學は愈々歷史色濃厚なものとなり、自然その歷史の背景をなす國家との關係は密ならざるを得なくなつたのである。シュモラーの新歷史學派と呼ばれる他の理由には彼の社會政策學會がある。而して更めて經濟に倫理的意圖を加へる點を力說したところにも彼の新しい學派たる面目がある。

獨逸の國家主義歷史派の學者を通じて見られる特異な點は、純正經濟法則の否定、經濟法則の發見を歸納法に依る事、自由主義よりは保護政策、共有産業制度反對等であり、概觀して經濟學と言ふよりは經濟政策又は社會政策學派と格づけする方が當れりと想はれるのである。シュモラーを主柱とする研究會を社會政策學會と呼びなされた所以でもある。

オーストリヤ學派

嚴格な意味でオーストリヤ學派は全く經濟學の上に一新原理を提示しただけで、實踐經濟に何等の寄與もしてゐない。學の提唱者メンガーはかの有名なる限界效用なる價値說を以つて獨逸の歷史學派に對し、且つ英國の交換價値說にも反對的立場にあつたが、要するにその學說がどれだけ經濟政策に役立つたかは明示出來ない程度でしかない。

併しオーストリヤ學派の經濟學研究途上の貢獻は大きい。英國正統學派の物質的なるを排し、獨逸學派のあまりにも歷史的事實に拘泥しようとする態度をとらず、價値決定に主觀的心理要素を挿入したところに、將來斯學開展のために示唆するものがあると謂はねばならない。

メンガーに始つた澳太利學派は個人の慾望を中心にその主觀的價値を決定し其の間の過程法則を典型的現象と稱して歷史學派の個別的經濟現象から區別して一般的純正原理のあり得る主張を辯護したが、同時に經濟現象を個人的主觀から判斷する結果は利己的要素をとり入れる傾向を生じ、メンガーの後學の間からすら已に綜合有機的研究につき有力なる反對論者を出だすに至つたのである。

さてこのオーストリヤ學派は主觀學派とも效用學派とも呼ばれるのであるが、彼等の主張は、價値は凡て人の內的に作用する效用見積から由來する。卽ち人の欲望が效用を惟ふところに價値が生れる。古典學派が言ふやうに此の財貨の生産費が何程であるが故にその物の價値何程となるのではないと言ふのである。

よく擧證される效用學派の價値論說明を一つ書かう。ある一人が食慾を感じて飯を求めるとする。空腹なるが故に一杯

は息をも吐かず食ひ終り、それから三杯、五杯と進み第六椀は無用と云ふ感じになる。卽ち品物の量と共に食慾減退となつたので、之を效用遞減の法則と云ひ、御飯の最後の一杯を效用の限界又は最終效用とも云ふのである。

メンガー及びその祖述者等が價値の原理に主觀的方面を開拓したのは宜しい。併し財貨の價値決定は限界効用の他に種々なる要素の挿入されるのであつて、此の學說も一小局部的價値を有するに過ぎざるものとなつた。

第二章　經濟原理と經濟政策

經濟學は社會科學であり動的現象を律する學問である。昨の眞理必ずしも今日の眞理ならざるものをも取扱ふものなるが故に千古不滅の原則なるものは殆ど無いに均しいと想はれるのである。スミスの富國論は當時の現實界を風靡し去り、ピット、グラツドストンの如き政治家の政策規範を供與したのであつたが、さしも華やかなりしその經濟論も今では歷史に繰り入れられる運命を辿つたのである。

其の餘の原理方則と見られた例へば收穫遞減・收穫遞增の理でも、時の進運と共に其の永久性は失はれるに至つたのであり、マルサスの人口論の如き僅かに數十年の生命でしかなかつたのである。現在の社會は政治力が大きく表面に押し出されて來たのであるが、その爲に自由主義經濟學の金科玉條であつた需要供給に動く價値論も甚だ覺束なきものと化し其の他何と從來の經濟原則は全面的に動搖を感ずるに至つてゐる。

併し是まで幾多の學者達の檢覈し來つた原理が總て恒久性を喪つたとするのは早計である。物の稀少性が經濟財の要件であつて其の故に光線も空氣も乃至は水も經濟財とは呼ばれないと言ふやうな法則は永久に眞理として取扱はれるやうである。經濟學の生產論に於いて主要要件として大地、勞働、資本、企業の必要を叫ぶところにも眞理の發見がある。とかやうに言へるのであるが概觀するところ、是まで經濟學原論として列べ立てられたものの多くは、ある一定時の政策的方則であつたのであり、この意味で經濟學原則は動搖常なき暫定的のものでしかないのではないかと考へられないでもない。

然りその通りである。だが經濟學に心的現象をとり入れると、幾多不滅の原理が生れ出るのである。本能的勞働慾、善良なるものへの憧れと其の獲得を志す活動、國家計畫と個人活動の一元的目的、八紘爲宇への漸進、農業企業の擴大鏡的前進、重要產業の國策的配置など將來打ち樹てらるべき經濟原則の數多は精神的經濟活動を基礎とするだけに恒久性を帶びて吾等の前に展開し來るのである。

どの經濟學にも共通するところだが、先づ生產が說かれ其のつぎには價値論とか、企業論とかがある。分配論も屹度登場する立役者なのだが、主義・學派の異ると共に足並も衣裳も一致しないのである。げに分配に關する學派・學說の主張するところは多岐多樣である。社會主義の搾取分配形態、社會政策家達の分配凸凹矯正論など極めて多いのであつて、その又多くは政策的なものばかりだが、その中からも皇道經濟學は一定不變の多くの法則を發見してゐるのである。例へば將來國家が存立する爲に必要とする國營事業に對する國家收入又は所得——國家事業と國家利潤の新原則など皇道經濟學と共に永く生き拔くべき原則なのである。

一體分配に關する經濟學說は生產論に於けるが如く、各學派各別の主張を持つのである。資本主義は個人の利己心に出發するが故に、個人所得を重んじ企業利潤、地代、資本利子等を語り、勞働賃銀にも一部の重點を與へてゐるのであり尙足らざるをば社會保險などの社會政策で補つて行く。社會主義は社會國家又は團體の所得を主とし、個人之に從ふと云ふ建前であり、共產主義の純粹な制度下では所得論の必要を見ざる程である。而して以上諸制度又は諸學派の所得分配方式は時の流れと共に動くので、經濟原論としてよりは一種の政策論であると見るのが正しい。

勿論以上の如く純粹經濟原則の存在は承認さるべく經濟學は卽ちそれを主論として說かるべしとするも、尙一卷の經濟學書としては經濟政策に關する部分を原論ならずとして排斥するにも及ばず、又實際問題として原論と政策との區劃の識別し難き節もあるのである。且つ經濟原理說明の爲に政策の推移に依り擧證する事もあり、しかも其の實經濟原論だとて經濟政策學だとて其の根は一つであり、其の目的も均しく國家生存、民利興起である以上、研究の途上兩者の混淆毫も妨げざるのである。

要するに經濟學と經濟政策學とは不離の關係にあるが、尙ほ要領として、政策は時間的要素で改替される可能性があり經濟原論は本質的には永久不變であるべきものと考へればよいと想ふのである。

凡そ經濟學書と曰はれる程のものとして、財政、貨幣論、交通論、貿易論等を取扱つてゐないものはない。而して以上は殆んど經濟政策學の部に編入さるべきものである。貨幣論に於いて金は資本主義のもとの不可缺條件であり純正經濟學の一原理と考へられたが最近左樣な硬貨本位の建前はぐらつき出したのであり、貨幣の必要すらも新しい經濟制度では重視しないやうである。卽ちここにも不動と想はれた一原則の搖らぎゆく狀景を吾等は直視するのである。

貿易論でも同樣であつて、重商主義は自由貿易となり保護貿易に相當程度の變革を餘儀なくされ、將來は政治先行の計畫貿易の日を迎へんとしてゐるのである。吾等は如上の經濟實踐の遷移を一々不動不搖の原則に照らし合せ以つて謬りなき政策を樹立せねばならず、たまたま政策が原論の中に同居することはあつても不思議でもなく又は無稽でもないと信ずるのである。」

第三章　經濟發展の階梯

經濟發展の順序及び遲速は民族と場所とに依り異るものがある。日本には家族經濟時代が相當永きに亘つてつづき、西洋では遊牧時代など我が邦にない經濟時季が織り込まれるのである。英吉利の産業革命は十八世紀の半ばに始つたが、日本は十九世紀の半ばに漸くさる形勢が熟し初め急速調で先進國を追はねばならぬ破目に陷つた。今便宜上日本經濟の發展階梯なるものを辿つて見れば、

一、一家自給自足時代。二、氏族自給自足時代。三、部落經濟時代。四、封建時代。五、資本主義時代。六、農民協力時代。

と區分する事が出來やう。この日本的經濟發展と比較して西洋では樣ざまな區別が擧げられる。獨逸歷史學派の始祖フリードリツヒ・リストは野蠻時代、農業時代、農工時代、農工商時代と四大別し、シユモラーは村落經濟、領域經濟、國民經濟とし、ヒルデブラントは分類標準を交換に置き、自然經濟（物々交換、貨幣經濟、信用經濟と分類した。またマルクスは社會主義の見方から原始共産主義、地主經濟時代、資本主義經濟時代と人間經濟の三季的發展を劃したのであるが、要するに各學者はそれぞれ研究の便宜に立脚した區別方法を擇んだもののやうであり、日本經濟は家族、莊園、領主、明治維新後と云ふやうに研究するのが最も都合が良いと想はれるので私は前述の分け方に從つたのである。

日本經濟は初めから部落時代即ち莊園の制が行はれる頃までは完全に農業を以つて終始したのであり牧畜もなければ工もなかつた。僅かに商業らしいものはその頃でもあつたが、自由貨幣に依る交換制度とまでは進んでゐない。戰國時代から織田豐臣の時を經て德川の治政に入つて經濟は農工商の面影を具へるに至つたが幾多の掣肘が法令に依り又は自然に加へられてゐたのは勿論であり、資本主義の展開は却々に考へられさうにもなかつたのである。

國有財産制

そのいまだ我が經濟が部落時代の域を脫しない頃に肇國の精神であり我が民族固有の思想である天皇に歸し奉る制度が財産の上に明記される時が文武天皇の御宇に起きた。即ち大寶律令に依る班田收授の法令であつて、此の事あつて我が私有財産制の性格に一點西洋式疑義を挿む餘地なきを明示し且つ的確に一億一心の觀念に基礎を置いたのであつた。

我が班田法と云ふのは人生れて六歲に達すれば一定の土地の班給を受け死と共に　朝廷に返上する制であつて、普天の下卒土の濱何れも王土なりとの思想から由來するのであり、天下の財産は　朝廷のものであり之を臣民が生産に利用するのは假りの便宜に出づるのであるから國家の急が需むる時は當然之を私すべきでないと大寶時代に明らかに法令化されたのである。同時に吾等は上　皇室から必ず生活の資を與へられる事を知り、大家族の一員として待遇を受くるので「人生れて六歲にして一定の班田を與へられる」條令の發布に依り天照大御神以來國民の間に行はれ且つ潛在意識であつたものが大寶に入り初めて制度化されたのを知るのである。

我が國の私有財産制は帝國憲法に依つて保證されてゐ、今の時その公有化を夢みるものもあるまいが、併し憲法の保障を西洋流に解するのを謹しまねばならぬのは其の理論的根據を此の大寶律令に發見してもよいのである。尙同じ理念は明

治維新に繰返され民の記憶を新たならしめたので、將軍慶喜の大政奉還と版籍奉還が雄辯にその間の事情及び精神を物語つてゐるのである。

封建時代

日本經濟は資本主義樹立についてこそ後進國であるが小規模乍ら、農、工、商らしい經濟形態のあつたのはずつと以前からであり、奈良朝時代には相當發達したらしく想はれるが、豐臣時代となつては朝鮮征伐があり且つ南方諸國に往き來する邦人があり、天文十二年(一五四三年)にはポルトガル人が種子ヶ島に漂着したのに端を發し、天正八年には西班牙人の來航あり、それから和蘭、英吉利との交通となり、一時は禁止的に彼等との自由交易に制壓を加へたとは言ふものの丁度其の時分歐洲に行はれつゝあつたマーカンテリズム(重商主義)の風潮は我が西國民衆を支配したのは素よりあり得る事であつたのである。西紀一六〇〇年は我が邦では關ヶ原戰爭の戰はれた年で英吉利ではグラッドストンが自由貿易に太鼓判を捺した當年であり、貿易的世界制覇の進行中であつたのに對應的に德川は漸く緒に着かんとする近代產業革命經濟潮流の移入をその芽生えに芟除したので、その結果日本は所謂重商主義時代の僅かをしか經驗しなかつたのである。

封建的な江戸時代農業は自給自足の殼を次第に破るやうになり、所在に富農階級が生れ農業經營には季節勞働者や日傭勞働者使用が流行するやうになり稍々資本家的氣分が農村に漂ふに至つたのである。

德川時代は武士階級の截然他民衆と分離して考へられた時であり大名は參覲交代制に依つて三年毎に國詰め江戸詰めを强制されたのである。此の結果全國到るところに都市の發達を促し、自然商業と工業の目覺しい發展を見るに至つた。その理由は戰國時代までは農兵一致であり一度び戰爭が終熄せば兵は歸農したのが、江戸時代の大小名が武士階級を居城の附近に居住せしむるに至つては、やがてそこに都會が成り立つのは當然で、江戸の最盛期には人口百三十萬人もあつたと推定され、京都、大阪も五十萬の人口を擁し其の他十萬の人口を數へた都會數ケに上つたのであるが、かかる人口集中の片面に色々な新しい經濟實踐形態が生れたのは當然である。

英國ではエリザベス女王及びクロムウエル時代の十七世紀半ば頃、我が德川家光及び家綱の時に相當するが、彼の重商主義世界貿易が英國の世界制覇を遂げつつある間は、我が國では對內的に商人階級の旺んに勢を成しつつあつた時代であつたのだ。寬政の頃には大阪富豪の一顰一笑は一國一城を傾けたと謂はれる程にも大名は豪商よりの金融に依存したのだが、家康が士、農、工、商と深き慮りより商を最下位に階級づけたにも拘らず、實質に於いて商業資本家が大名を慴伏せしむるの勢を呈したので、既に江戸時代に於いて我が邦資本主義は萌芽したと見て差支へないやうである。

封建制度とは土地經濟を基本とする上層土地所有者と生產農民との關係である。土地を基礎とする政治支配者が農民を自己領土內に固着せしめその上に武士族を支持し支配者自身の位置を確保するのが、東西を通ずる此の制度の建前であるが、武士が城下町に棲息するに至つて農民も亦城下町を慕ふ傾向があり、さなきだに都會の人口集中は彌が上にも增加するやうになり商人階級の擴大は愈々止むところなきに至つたので、當時の文獻を見ると如何にその榮え行き盛りきる新階級を制御するかに苦心が拂はれたかを知るに足るやうである。

何方迄が江戸の內にて、是より田舍と言ふ限なく民の心儘に家を建續ける內意、江戸の疆限年々に廣まり行き、誰許すともなく奉行、御役人にも一人として心付人もなくて、何の間にか、北は千住、南は品川迄家續に成たるなり。此又古法を不知誤なり。郤つて大切の事なり。

以上の如く荻生徂徠は言つてゐるが、以つて都市の殷盛と商業の興起想ふべきである。

而して徂徠は商人を蔑視して左の論評をあびせてゐる。

「惣じて商人は、利倍を以つて渡世する者故、當時の有樣にても一夜檢校とも成、亦一日の內に潰もする物にて、是、元來不定なる渡世をする者也。武家と百姓とは、田地より外の渡世は無て常住の者なれば、只武家と百姓の常住に宜敷樣にするを法の根本とすべし商人は不定なる渡世をする者故、善惡右に言が如し。然れば商人の潰るることをば、嘗て構間敷也。是又、治道の大剋の心得也と可知」

安藤昌益は天文寶曆時代の學者であつたが、之も德川時代一般の風潮であつた尙農卑商主義の學者であり、「士は之を始め、農は食を出し、工は家を作り、商は用を通ずと。是天下の政法、聖人の爲す所、理に似たれども、士を立つるは、亂の用農を下にするは天の責めを蒙るなり、工は美家大廓無益の用を起し、商は利慾の用、皆天下の費、大亂の本なり」とし偏へに農を立て直耕する者のみ天下有用の士と極論して居るのである。

封建的都市が形成されるとそこに商業が起り、原始的工業が起つたのは自然の成行きであつた。工業と言つても極めて幼稚な手工業であつたのは勿論であるが我が德川時代には既に手工業を家庭から工場に移した形式はあつた。併しそれが機械工場制になつたのは德川も極めて末期で、先づ武器の製造に手を染めた事に始り、佐賀藩、長州、鹿兒島、水戶と云ふやうに擴まり幕府自身は反射爐、軍艦、大砲銃等あらゆる兵器作製に乘り出し、之を明治維新に引き繼ぐ形勢は玆から熟したのである。

日本資本主義進行の經路

日本の資本主義を特長づけるものは、後進性と不平等性であつた。少しく說明しよう。後進性と言ふのは西洋の經濟進度に比較しての事であつて、英吉利が一七六四年にジエームス・ハーグレーブが紡織機を發明したのに孀を發し、アークライトの水力紡績機、カートライトの織布機と相次いで發明され、そこに發足せる產業革命は國力の巨大なる增加となり、その勢怒濤の如く渦卷くこと七八十年。自由貿易の勢威その頂上に達したと想はれるグラツトストン大宰相の時代にやつと我が邦の資本主義は內から盛り上る力はなく、外からの强制に餘儀なく擡頭したのである。卽ち世界的潮流が我が邊疆に迫ること頻りなるに止むなく起ち上つた吾等日本人は、資本主義經濟制度の爛熟せるに目を瞠らざるを得ざる程にも自らの後進性を發見したのである。

而して日本が更に自らの經濟力に自信を持ち得ざるに目覺めた事由は、新たに交際する列國が所謂修好通商條約を締結するに當り我が國を對等と認める事なく、治外法權なる政治的屈辱と關稅干涉權を以つて臨んだ事であつた。以上の理由で我が邦は明治四十二年に至るまで關稅の自主權なく、これ以前英佛に對し多少後進國であつた獨逸、米國等が英吉利に對し又は佛蘭西の先進工業に對し保護政策を執り得たにも拘らず、我が國はさる選擇權もなく其の後尙曠忍數十年、その間慘澹たる苦心を爲しつゝも、資本主義を極めて手際よく泳ぎ就したのである。

明治維新の政治家達はこの資本主義後進性の故に、天下り產業政策を執つた。卽ち國家民生向上の爲にあらゆる工業その他產業の官營を試みたのである。政府の海運、鐵道企業、紡績生糸業等後に民營で成功した事業は一度政府の手を經て來たのである。その他企業家自身も民間人は當時極めて少數であり、多くは武士及び官吏出身が擇ばれたのであつた。澁澤榮一は生れは百姓であるが德川慶喜に仕へて武士となり、ついで實業界に入つた人であり、岩崎彌太郎は土佐の鄕士であつた。その他明治實業界を創始または牛耳つた人々、中上川彥次郎、莊田平五郎、豐川良平、園田孝吉、和田豐治などみな武士の出である。

かくて政府の企業直營に依つて新事業澎湃として起つたのであり、武士階級出身の實業人が指導して日本の資本主義推進の業は軌道に乘つたと言つて良い。それで我が國の產業革命らしい過程は日清戰爭から日露戰爭前にまで及ぶと想はれるが、それは英吉利よりは百廿年、獨逸よりも尙七八十年後れたのであり、資本主義形態の社會が略ぼひとりあるき可能となるまでにはそれからまた三十年ぢかくを經た滿洲事變以後支那事變にまで及ぶものと見てよいのである。

日本資本主義の特異點

日本資本主義の特異點は前述の如く其の後進性と不平等性にある。尙他國と異る點は武士階級から指導者が出、政府が溫床を供して事業を起した點にある。その上に著しいのは、農業の犧牲に於いて諸他資本主義企業が進行したと言ふ事である。

明治政府は先づ稅制と貨幣制を正し、銀行を始め鐵道を起した。是等は產業の興隆に必要なる地盤を供するものでありその主要なる保姆である。明治二年に銀本位制布かれ始めて硬貨幣が圓形となつた。明治四年には更に金本位となつたがそれはほんの名のみに過ぎず、眞の我が金本位制は明治三十年に於いて名實共に實行に移されたのである。

明治六年に銀行條例が出來第一銀行の創立となつた。それから矢繼早に興起した國立銀行は百五十三行を數へたが、是等銀行の紙幣發行その他の理由で一時はすさまじきインフレに惱んだのである。ついで銀行は悉く民間企業となり明治十四年の正金銀行同十五年の日本銀行の創立に及んでは國家干涉の意義形式が以前とは大きい差異のあるものとなつたのである。

鐵道も明治二十三年頃現在はやくも千五百哩に達した程でその始めは政府資金に依るものであつた。明治三十年を中心に日本の鐵道企業は非常な勢で進展し當時企業の五八%は斯業であつたと云ふ統計があるのである。かくて明治四十年に鐵道國有のこと定まり現在に至つてゐる。交通の他の一翼をなす海運は紆餘曲折の後、明治十八年に日本郵船會社が成立した。

日本政府自身が工業に手を下したのも古い。勿論想像される如くその初めは軍需工業である。東京、大阪の砲兵工廠を主とし橫須賀造船所、長崎造船所、兵庫造船所、石川島造船所、鹿兒島造船所、羽工作局、深川セメント工場などが出來た。品川硝子製造所も政府事業で明治九年に設立されたのである。かの有名な富岡製糸場も略ぼ同時代のものである。

棉紡績では鹿兒島の紡績所が本邦最初のものであるが、政府は島津家の第二堺紡績分工場を買ひ入れ之を大藏省の所管に移した。ついで明治四十二年の千住製絨所があり、同じ時代の松方正義の計畫せる二千錘紡績などの事あつて明治十六年に及び我が紡績史上を劃するに足る大紡績工場が起つたのである。即ちそれは大阪紡績の起業であり、山邊丈夫が澁澤榮一の依囑に依り英吉利に於いて自ら紡績技術を修得、歸朝に際し一萬五千錘の機械を携へかへつた事に依り大進展の機運を作り、明治二十年を中心に紡績起業は急速に增加進暢をとげ明治二十三年には初めて日本綿糸の海外輸出を見たのである。而して明治三十年に入り綿糸輸出數量は四十二萬九千斤となり當時既に今日の日本紡織業の基礎成つた譯である。

日本資本主義の不平等性は關稅の不自由に出發するが、それでも亞米利加領事ハリスの好意的態度で二五%乃至三五%の稅率を認められてゐたが、その後下の關砲擊事件、鹿兒島事件など簇出、一種の賠償的意味もあつて稅率は愈々窮屈なものとなり五%にまで限定されてしまつた。然も貿易の實權は悉く所謂外國商館なるものの手にあり明治十年に至つても尙我が海外貿易の九五%は之等商館の占むる所であつたのである。

以上に概觀するやうに後ればせながら日本の資本主義は進展に進展をつゞけて來、第一次世界戰の終つて二年大正九年には新企業資金は五十一億一千三百萬圓、之を大正四年の二億九千二百萬圓と比較すると實に隔世の感がある。それから尙研究を進めると以下の如き事實を發見する。卽ち明治初年から大正二年までの事業資金・會社拂込資金等の合計は十九億八千三百萬圓であつたが、大正四年から九年までの六年には實に百四十三億七千萬圓に上つたのであり、當時我が邦の近代產業國たるの形式は完全にちかきものとなつたのである。

土臺石役割の農業

日本產業の後進性の故に先進國の域に達する爲の大努力が拂はれねばならず、然も江戶時代の無系統無秩序な財政經濟のあとを受けて產業資金らしいものとてなく、生產の要具など勿論あるべき筈なく、明治の要臣たちは先づ租稅に依存して政府費用の他に產業資金の調達もせねばならなかつた。而も租稅と云へば地租を意味するのであり、最初の政府の低地租意圖に反して課稅率地價百分の三の標準以下に下る能はず、それに村費としての地租の三分の一を加へると農家の負擔は收穫米代の三割三四分に上つたらしく、維新前の賦米又は年貢米四割乃至五割と比べて大なる差はないのであつた。たゞ稅制の正確味に甘んじた納稅する側に不平なく、政府はそれに依つて官業の推進を圖り得たのである。

日淸戰役後國民は地租の輕減を考へたのであるが、三國干涉の事實よりして我が邦としては次の戰を用意せねばならぬ緊迫せる空氣で支那から償金三億六千二百萬圓を獲たに拘らず、軍備擴張の國策にまたしても農村の犧牲に於いて事を行はねばならぬ破目に陷つた。其の後日露戰爭を機に產業の大飛躍はあつたが農業は依然として置き忘れられた貌で殘り、その經營形式に於いても維新前と大差なく農業の機械經營は依然遲々たるものがあり、其の限りでは現在に於いても化學肥料、水利起業など極めて局限された部分を除き農業には資本主義の利益充分均霑されずにあると言つてよい程である。併し今や農業時代再び來らんとしてゐる。本書第三部企業の章で詳說する如く、吾々は現在の饑物文化のつぎに是が非でも農に依つてのみ生きる時代の再來の可能性を發見するのであつて、然も饑物文化の生命はあまり久しからざるものなるを知る時、今の時に私は尙農興農論を高らかに唱へんと欲するのである。

歐米資本主義の進行

英吉利の資本主義又は貨幣經濟は十八世紀の最終四半期に始る。西紀一七七六年はスミスの「富國論」が世に問はれた時であり、亞米利加ではトーマス・ヂェファーソンが「人間は生れながらにして平等なり」と叫んで米國の獨立聲明を書いた記念すべき一年に當るが、大體この頃を以つて英吉利の產業革命は始り同時に產業の資本主義化が行はれたのである。それから十八世紀の半ばには工場らしいものはあつたが工場で使用する工具はまだ手工用に充てられるに過ぎなかつたのであり、工員の多くは半農であつた。交通なども幼稚そのもので通行金を支拂つて泥濘を行くと言ふ程で主として水運に依つたところが多い。それも重商主義に依る貿易は相當に發展してゐた實情であつた。

併し、工場產業が完全に行はれる爲には分業が採用されねばならず、機械動力などの大進步と發明を必要としたので、一七三八年ケー式梭の發明、一七六七年ハーグリーブの紡績機ジェニィの發明、一七七一年アークライトの紡績、一七七九年クロムプトンの以上二者の改良機、一七八五年蒸氣動力の紡機應用、カートライトの機械發明など相次いで興り玆に產業革命の緖は華々しく切つて落されたのである。

蒸氣の工業應用は產業の土臺と言はれる製鐵業の進步に拍車をかけ以前の木炭に依る方法は石炭に依り代替され、英吉

利つ鐵は一八四〇年には百年前の七十五倍の生産に達したと言はれる。製鐵の簡易化は鐵道の發達を促し一八二五年にはスティブンソンの蒸氣汽罐がストックトン・ダーリントン鐵道に使用されたが鐵道會社側ではその後之を中止した。然し一九二九年にリバプール、マンチエスター間に再び蒸氣汽罐を登場せしめた事から永久に蒸氣の鐵道使用は確定したのであつた。

産業の發達は自然に社會惡を隨伴した。先づ貧富の差を擴げ富者の橫暴を助成した。小兒勞働の極端なる使役、下級勞働者の長時間就働、大衆の粗惡なる生活狀態等後の世の人をして慄然たらしむる底のものであつた。十九世紀の初めの頃一英國裁判官は勞務者が每日二十時間に及ぶ勞働に堪へ兼ねて訴へ出でたるを裁いて、かかる怠け者は英國を亡國に導くと言つたと傳へられる程にも上層階級は勞働者に同情を持たなかつたのである。

其の結果は無論社會不安であり苟も世界に覇を唱へる英國の事である。この樣相に盲なる筈はなく、其の後幾多の社會政策を執つたのである。經濟學者又は社會學者も社會の要請に答へて社會政策學の研究に精進するもの勘からずあつた。ジョン・スチユアート・ミルは其の最初の人であると想はれる。先づ商品檢査法が登場する。小兒勞働保護が問題になる。勞働者負傷についての對策が講ぜられる。それから公共事業の公營が緒に就くと言ふやうに、政府の企業干涉、生活財調整などが徐々ながら確然と行はれるやうになつたのである。

亞米利加合衆國の獨立は一七七六年であつて丁度アダム・スミスの富國論と同年に生れたのである。それから十四年目に國勢調査が行はれ人口三、九三〇、〇〇〇と發表されてゐる。それ以前の數字は一七四三年の壹百萬人と云ふのから推定して獨立當時米國の全人口二百五十萬乃至三百萬人であつたらうと想はれるが、それら先住民の構成が、イーリーの說に依ると、農奴、逃走徒弟、無錢負債者、放浪者、誘拐兒童、その他色々な罪人に依つて占められる部分が大きかつたと言はれる位であるからして、當時英吉利を中心として歐洲を席捲したかに見える重商主義貿易が新移住者の新大陸で應用される筈もなく、たゞ移住者達のひたすらなる「西方獲得」運動のみ活氣を呈したのである。併し獨立國家の成立と共に國家意識からする產業の興起はあり資本主義機運澎湃として動いたのは當然であるが、併し新興國に有りがちな諸現象は國家統一の上に、ある程度の妨害を與へつゝあつたのは止むなき事であり、今尙亞米利加は同じ現象に禍ひされてゐると見る幾多の事實がある。

先づ亞米利加移民は政府の充分なる保護を期待し得ざるに原因して不羈獨立の氣象を養つた。さなきだに白人種通有の個人主義は亞米利加に於いて更に强大となり、自我・恣意的なものとなるまでに進んだ。初期亞米利加人は大陸の大自然に働きかけ之に挑む事に依り生活し得たので常に新しきに對する積極性を持つやうになつた。創造よりは開發、節險よりは獲得、從つて陽氣であり浪費的であり積極的である。米國人の傍若無人的なる、駄法螺的なる、凡てに世界一を誇る自大妄想的なる、みな此の初期移民の性格に胚胎するのである。

亞米利加人が割據的、專恣的なる理由には以上の他に、人種問題がある。現在千三百萬と稱する黑人種は最初一六一九年にバージニヤに上陸したものだが、社會的、產業的に此の人種問題は米國の癌となつてゐる。その他十九世紀から廿世紀の上四半期に潮の如く移民し來つた歐洲移民はそれ〴〵民族的色彩の一部を保有し、知らず識らず米國民の恣意的性格に寄與して居るやうである。

亞米利加の資本主義はその獨立の日から歐洲の形式を其の儘取り入れたが其の後米洲的新環境に支配されて止揚せるところは完全なる自由主義であり、利己を中核とせる經濟の極度の發展となつて表はれたのである。一九四二年に於ける米國國民收入は約一千弗の個人當りとなるが、それ以前一九二八年の世界景氣の頂上に於いては一人當り七四五弗、平均一

家三、〇〇〇弗がその收入であつた。而して此の所得を以つてして尙食ふに糧なく寒さに慄へねばならぬもの一九三三年には千二百萬人に及んだので、吾等をして一概に米國の資本主義を批判せしむるならば、僞善的富貴を追及する經濟社會と呼ばんとするのである。

政治的に米國の民主主義は出鱈目である。社會的、經濟的にその國に平等公平などは無い。國際的には御節介であり身の程を辨ぜざる成り上り者である。僞善にして上邊を取り繕ひ、獨善にして恣意强情なる、この民族の母體である歐洲にもその比を發見するに苦しむのである。亞米利加國民の心あるものは既に其の資本主義の行詰りに氣づいてゐるのであり、議會を通じて多くの社會政策、經濟政策は執られて居るものの到底左樣な彌縫位では救濟不可能となつてゐるのである。米國民が精神的に生活を更改し心的要素を經濟にとり入れる事に依つてのみ現在の行詰りの打開が可能となるので、彼等が其のこゝに至るまでには尙歲月を要するので、此の點では今回は吾等が先達國となり米洲人等は後進國として追隨し來る運命にある。

第四章　自由主義の終焉

資本主義に於ける自由は其の必須要件である。資本主義經濟組織の否定はやがて自由主義の終焉を意味するのである。同時に利潤追及の思想も商業主義の進行も亦停止されるのである。

資本主義崩壞と云へばマルクス社會主義を聯想するのであるが、玆に吾等の說かんとするところは資本主義爛熟して自壞の途を辿ると觀る點にかゝり、マルクシズムに於いては社會と勞働階級の鬪爭的活動に依り資本家的企業に鐵鎚を加へんとするのである。つまり資本の集積集中過度にして人間社會生活の到る處に不均勢狀態を生じその重荷のもと自ら倒れ去るのと、資本主義の沒落を奪ひ取らんとすと云ふのとの差である。

自由主義とは？

自由主義が最も主張されたのは佛蘭西革命前後に於いてである。而して自由主義を經濟學に織り込んだのはスミスに依るのであり彼の前にはケネーがある。歐洲では中世紀の神へのひたぶるの信仰を喪失した民衆は、個人と個人間の關係攝理は先天的なものでなく契約にもとづくと考へるやうになつた。而して契約に於いて當事者は自由であると信じ、自由、平等を以つて革命の旗幟としたのがフランス革命であつたのである。

フランス革命の自由は天賦人權說から始る。神之を人間に降し給ふた權利と言ふのである。フイジオクラツト學派（重

農學派）の祖ケネーはその經濟論で之を承認し、自然に卽したる自由は卽ち神ながらの自由なりと神聖化して考へたのである。併し玆にひとり自由に神性を與へないが自利心なる人間性を與へて自由を是認した學者がある。彼の名はチュルゴーと呼び、半ばフイジオクラット派の人との格付けを受けた人である。チュルゴーの自由についての此の見解はアダム・スミスに依つて受繼がれ後の自由主義經濟を一貫する源流をなしたのである。

自利心が人間經濟活動動機の唯一のものとすれば、最初から經濟活動は忌はしく憎むべきものであつたのである。而してそれと表裏關係にある自然も亦忌避に値するのである。併し人の經濟行爲は自利心だけが動機である筈はなく、自利心は勿論之を抱擁し尙その上に物心兩面に亙り他の動機が動くのである。私の見る所では如上數多の動機こそは、「眞の自然」であつて、物慾の直ぐそばに道義的向上心が起り、利己心と偕に博愛慈悲の念生起し、之が人間行動を左右して玆に經濟現象が成り立ち經濟活動が在るのである。而して是等物心兩樣の同時發動を自然の動きと見て自然に向上性、道義性、積極性を發見するのが皇道經濟なのである。

心的經濟現象と物的現象――この兩者は二にして一であり不可分關係に立つのである。吾等の研究に便せん爲以上の如く二分して見ても其の實、物と心とはある一つの存在――不可視のものに依つて作用され所謂有機的に動くので、私はこの不可視的存在を「勢」とも「業」とも名づけるのである。あるひは之を法則とか言つても良からうが凡て此の不可視のものも亦自然だとは私の主張なのである。

眼に見え、觸覺に感じ得るものは言ふも更なり總て視界に入らざるもの及び吾等の常識に不可解とされるもの又は現在學界に於いて知られざるものでも之を自然と呼び、それ等總てを縫つてそこに一種の運動を起さしむる「勢」や法則や規則までをも自然と云つて仕舞へば洵に自然は神でもあり佛でもある理となるのである。語を換へて言へば人間が感觸し得るものの總て、人が感知し得ざるものの總て、未知の總て未見のあらゆるもの而してそれ等森羅萬象の交錯融合が自然であるならば、自然科學の天地に於いてその法則が極めて整然炳乎たるが如く吾等人間の關係にも不和、亂雜等の不都合はない筈である。而して自由が此の自然に基調を置けば自由主義に非難すべき何物もないのであるが、チュルゴーに依つて自利心の注射を受けて以來の自由は遂に自然の反逆者と下落し了つたのである。

自由主義は個人主義と表裏一體を爲すが故に其のまゝまた我态主義に通じ功利主義的觀念を釀成するのである。自己の幸福達成は人間行爲の中軸であり最大多數者の幸福達成は政治の要諦であるとするベンサムの理論に從へば、幸福の解釋如何に依つて眞理の解釋が右し左する譯であり、英米は幸福を物質的と判定した爲に兩後の自由主義はまつしぐらに物質獲得に走り享樂に墮し、且つ排他搾取となつたのである。

苦惱の自由主義

自由主義の赴くところ世界各國の物質的富は累積したのである。併し一社會一國家の一部分又は少數者が富む爲にその一國の富の數字的表現は巨大であるかも知れないが、その內容に跛行的なところがあつては最大多數の幸福すら期待出來ないのである。而して斯かる現象は如實に世界各地に發生したのであり、その最も著しいのが亞米利加合衆國に於いて發見されるのである。本書の他の部分に於いて述べてある如く一九三三年大統領ルーズベルト就任當時米國の失業群は千二百萬と註せられた。而もそれと對蹠的に米國富豪の倒產が傳へられるところ極めて尠かつたのである。一九二八年の個人所得稅納入者百萬弗以上三百十二人、五百萬弗以上三十八人であり、一國の財產四六%が〇・八%の少數者の所有であり、米國の貯蓄預金一九二八年に於いて總計百八十億弗の中勞働層總がヽりでその一〇%をしか有せずと云ふみじめさ

で、而も其の翌年の大恐慌に際しこの富裕階級に何等異變なきにひとり多數を占める國民にのみ不況と生活難が迫り來つたのでかゝる經濟生活は健全なるものである筈なく、かくなる上はその本を更める事なく表層だけに加へる社會政策ぐらゐでは象に針を刺す程の改善も異變も稽へられないのである。

尙一九三三年ルーズベルト就任の年に至つても形勢に些かの變化もなく、其の年聯邦準備銀行の統計では國內預金者口數の九六・五%が僅かに二三・七%の預金額を保有し、〇・一%が預金の四七%を所有する資本主義の常態を顯示したが、政府は之に何等かの根本對策を講ぜんとせる形勢もなく國民はたゞ皮層的救治としての社會政策的立法を要求せるに止まるのである。富の偏在について、もう一例を擧げよう。一九二九年の米國生命保險の支拂總額は十九億六千百萬弗であつたが、それに對する事務費の總計は九億二千百萬弗、比率では六〇%對三八%となるが斯かる事務費の嵩む理由は極く少數の上層支配階級の高額俸給の爲であり、如何に利潤追及が生命保險の繁榮を來したと言へ一年十萬弗の年俸者少數ならざるに他方一年一千弗に充たざるもの多數存在する有樣は、毫も公平なる經濟制度として默許し得ざる事となつたのである。

果然一九二九年から一九三三年に亘る亞米利加は社會不安に經濟界の安定を失ひ、銀行の倒產するもの數千行に上り、細民益々細り勞働者は失業し農民は生產物を燒くと云ふみじめさであつた。物價は低落を重ね證券は省みられず農產物は豐作にしてしかも鬻ぐに市場なく、肉類に市價なくて豚を生埋めにするの慘をすら敢へてせねばならなかつた。三千の在鄕軍人等が華府に駐屯しキャンプに篝火をたいて恩給の卽時拂ひを要求したのも此の時であつた。

政府は途にあふれる失業者救濟の爲に緊急政策として例のエヌ・アール、エーなる一聯の法令陣を布いた。つまり此の手段に依つて自由主義に由來する經濟恐慌を救治せんとせる統制主義の實踐であつたのだ。曰く農業救濟法、耕地制限、曰く住宅貸付、曰く青年雇用法（CCC）曰く失業者就職及び雇用法に直接救護金交付等其の金額數十億弗を以つて數ふるものの支出を決行、產業經濟の萬般に亘り政府干涉の手は伸び、當時の國民は政府の產業最少限度干涉を心とする自由主義を失念し去つて、ひたすらに政府の袖の下に隱れんとする焦躁のみに終始したのであつた。畢竟するに米國も亦自由主義の內壞傾向に自覺するところあり一種の强力なる經濟の新しい手に依憑せざるを得ざるを認識するに至つたのである。

自由主義復歸は痴人の夢

一部社會批評家の中には自由主義の現在位置は戰爭中の一時的進行中止だと位に考へるものがある。思はざるの甚だしいものであつて、自由主義は其の本家である米國に於いてすら一九三三年のニューデイール政策樹立と共に葬り去られたのであり、それ以前既に實質的には內部崩壞をなしたのである。然るに我が國の如く國民一度肇國の源に遡つて慮るところあれば直ちに頭を廻らして經濟の本道に立ち還り得る國柄に於いて、今尙利潤追及に未練を殘し、戰後舊政策の轉回を庶幾する幾多の經濟人の存在するらしいのは不可思議と云はねばならぬ。玆に經濟の本道とは道義の裏づけある經濟理念のことで吾等之を大我經濟、皇道經濟と呼び做すところのものなのである。

繰返すまでもなく資本主義經濟の進むところ利潤追及は許されるのである。利潤追及は前述の如く、豐作を喜ばず、醫師が病患者多きをのぞみ、僧侶が死人を歡迎する狀態である。二十世紀の半ばは資本主義爛熟して正にこの修羅場の實現を見たので、亞米利加人が牛乳を河に流し河水爲に白く、桃の山に石油をぶちかけて燒き去つたり、豚二百萬頭の生け埋めを斷行して市價の維持に努めたるなど擧證すれば、誰人も此の世ながらの地獄が自由主義の名に於いて演出されつゝあつた事を否定し得ないのであつた。併し世の「必然」は眞理である。神ながらの道は今や人類に蘇りつゝあるのである。

第五章　自由主義と商業主義

商業が經濟生活進行の上に缺くべからざる條件であるのは言ふを俟たぬ。併し商業を以つて必要なる惡であるとする學者の尠からずあるのはどう言ふ次第だらうか。要するに商業そのものは近世人類生活の一生面であるが、そこに內包するある性格が兎角人の誘惑に陷り易きある素地を含むのではなからうか。もし果して然りとせばそこに何等かの救治方法は無いものであらうか。

商業は物を供給する人と需める消費者とを滿足せしむる奉仕作業である。物々交換の社會に商業は不必要であつたが、需むるもの與へる側が廣汎な地域に散布して存在する場合商業の奉仕手段は複雜化するのである。而して商業の本分は財の創造ではなく財を甲より乙に移す事に存するのであり、原則的にはそれ以上でもそれ以下でもあり得ない。機能の上から商業を仲介業、卸小賣業及び補助商業などと分類し、保險、運輸業、金融なども商業と總稱するのであるが、一概に商業の眞髓理念と云へば前述の如く簡單明瞭なものなのである。

而して商業なる企業の要求し得る利潤は甲より乙に渡す事から發生する奉仕料なのであり是もそれ以上でも以下でもあつてはならないのである。此の原則の嚴格なる遵奉を私は商人道と呼ぶのであるが、資本主義の社會ではかゝる正々堂々の商人道に終始し得るものはなかつたのである。

商人は奉仕に對して奉仕料を頂くのであるが故に物の市價高き時は高いだけに買受けそれに加へるに適正奉仕料を以つてして賣渡代金となす。低價なるが故に商品の思惑買をなして高價に之を販賣せんとするのは投機である。損失の場合を想定して適正利益に何物かを加重せんとするのも投機である。最低期間の販賣數量以上に買ひ溜めを計畫するのも投機である。奉仕の勞を竊み安逸せん爲の所謂商機の窺儉も亦投機である。甲との取引に失つたものを乙から取り戻さうとするのは惡質投機である。

商人と工業は良民の膏血に衣食すると極言した經濟學者がある(スミス)。商業は必要なる惡と斷じた學者のあつた事は前に書いた。佛蘭西の社會學者にして經濟學者であるシヤルル・フウリエは父の店に於いてある品物を鬻ぐに際しその不完全品なる事を客に告げ父の怒りを買つた事に不平やる方なく學に志した人で、其の一生を通じ、他人を欺いて賣り瞞着を以つて世に立つ商人とその業を極度に嫌つたのである。他人の不幸が自らの幸福となる商業、それが何故商業の本質なのであらうか。吾等新秩序の建設を以つて使命とするもの、商業とは以上のやうであつてはならぬことを銘記すべきである。

商業主義は何故輕蔑に値するか。商人道の本義に基き適正奉仕料に滿足し、完全に甲乙の間の需給を充たすに快感を持つ心構へさへあれば彼は紳商であり士商であり得るのだが、兎角人は物質に眩惑する物質界の先入主と習慣に禍ひせられて、物の存するところに心を奪はれると云ふよりは心の存在を忘れ去るのである。つまり薄志弱行の致すところと云はざるを得ないのである。其の道義心さへ堅持し得れば譬へ資本主義爛漫の社會でも、たとへ先入主が十重二十重に己に迫つても動ずるところなくて濟むべき筈である。吾等は之を現時の銀行家に見るのだが彼等每日金銀紙冊の間に起居しつゝも心榮れて其の一部を私したり之を掠めたりする事は絕對に無いのである。果して然らば商人達が物質處理の間にありて商人道と共に心を一二にせずに不動の態勢を執り得るのは要するに經濟道の眞如を把握すると否とにかゝると信ぜざるを得

ん。

古往今來商人は蔑視されて來た。處の東西を問はず商業は卑しめられたのである。我が邦の碩學荻生徂徠の商人蔑視論は私の引用したところである。卽ち彼に依れば商賣は浮草の如きものである。商人は不定のものなれば國政は彼等に介意すまじきなり、と言ふのである。之に反し武家と百姓とは「常住」のものであるが故に治の根本と爲すべしと敎へるのが徂徠である。また「世事見聞錄」の中には、以下の如き一項がある。

町人は豐年なれば飮料下直にて、餘德あり、凶年なれば世の狂ひに依つて餘德あり、兩樣共に德あり、町人は何れに廻りても取るべき程の利德は取る也。武士百姓は孰れに付ても、利得を奪るる也。依て利德をとる町人は段々榮え、利德を取らるる百姓は段々衰る也。是世の損益盛衰の理也。

勤勞[1]耕主義の學者安藤昌益は、スミスが商工は農を敷いて業を營むと言つたと其の軌を一にし「工は美家大廓無益の用を起し、商は利慾の用、皆天下の賊、大亂の本也」として商工を蔑視するのである。彼はひとり商工を排斥しただけでなく聖人も政治家も武家町人でも直耕せずして衣食するものを亂慾妄惡のものと見做したことについては前に書いた。

私は先に商業道を說き道義に立脚する商業奉仕說を爲したが、我が邦には以前から之を主張したものは尠くなく就中石田梅巖の石門心學など頗る我が意を得たるものである。梅巖は商人であり學者であつたが、道は自然にありと覺じ、悟るところあり博く商人階級の間に講話したのであるが、彼の商人道の中核理念は、

「商人の道を知らざる者は貪ることを勉めて、家を亡す、商人の道を知れば、慾心を離れ、仁心を以つて勉め道に合て榮るを學問の德とす。」

として商人の慾心を去るを慫慂し、然らば乃ち道に叶ふと斷言、つとめて商人掩護の態度に出たのである。梅巖は進んで利潤是認論に一見識を有し、商人の利益を獲るは武士の祿と同じく士祿無くして主に仕へざる如く利なきところ商人なく、商人皆農家工人とならば「財寶を通はす者なくして萬民離儀とならん」と說く。士農工のみ祿を受け、作料を頂きて報酬を要請する權利を許して、商業のみ利を求むるを慾心なりと言ふは當らずと、この町人學者は主張したのである。

また、本居宣長も商人を蔑視する態度に出ず、「交易のために商人もなくてはかなはぬものにて、商人多き程國の爲めにも、民間のためにも自由はよきもの也」と批評したが、同時に富が商人に偏在し農家の想像を絕する奢侈を爲して世を害するも[2]としてゐるのである。

「大かた世上の金銀財寶は、うごきゆるぎに富商の手にあつまる事なり。富める者、商の諸事工面よき事は申すに及ばず……金銀は次第にふゆる事なるを貧しき者は、何事もみなそのうらなれば、いよ〳〵貧しくなる道理也。」

かく通觀すると商業のこしかたは有罪的宣告に値するのであるが、さりとて吾等皇道經濟學に於いて主張せんとするが如く、また石田梅巖がその石門心學に說くが如く、道義に基き、私心を去り必然なる倫理に動機する經濟活動をなすところ商業は必要惡ではなく、必要善であり奉仕生産の役割を擔つて新世界觀の眞只中堂々の進軍をいそしんで可なるものなのである。

商人が社會の顰蹙を買つたのは泰西に於いても其の昔からであつて、ギリシヤの先哲アリストテレス時代に遡るのだが、斯く商業の擯斥されるのは斯業に內在する性質に職由すると想はれる。卽ち利を追ふことそれ自身が生業であるとする心が極度に働いて儲けさへすれば成功也とする紀文大盡的思想の是認されるに至り、現在の我が國に於いてすら、闇取引の行はれるもの悉くこの商人根性に負ふと言つて何人かよく之を否定し得やうぞ。所詮吾等は商業の自由主義的行き方を排し、業の統制と商人敎育の嚴正なる新規繩を以つて新時代の新流通經濟に臨まねばならぬのである。

第六章　國民皆勞論

單に戰時だけでなく平常時に於いても國民に遊休者あつてはならず、他人の勞に衣食するものの存在を許さずと云ふ一種の勞働論として一つの提唱をしようとするのが本章の目的である。

勿論本見出しに掛値のあるべき譯はないのだが其の中でも一つ強調したい方面がある。それは青年皆勤・青年皆徵なのである。つまり青年一度年齡に達すれば病者と虛弱者を除き、體格適合者も不合格者も必ず一度國家の錬成場生活を通過せしめよと云ふのである。

國民皆勞の理論は必ずしも經濟的勞務を限るのではないので、現在世界は擧げてかかる必要に逼られてゐる實際であるが、私は人間の本能的慾求の倫理性からと自然に迸り出る行動の原理から、國民として又は社會人として分相應の勞働的寄與を爲すべきだと言ふのである。平常時に於いては老幼は除外されてよく特殊の勞務に一生のある期間執掌したものには、ある種の慰勞的待遇を與へるも可と想はれるが、その他は働く事を原則とし貧富の故に又は身分の故にこの國民としての光榮から遁逸したり免除される事は許されないのである。殊に青年に於いて然りとするのである、勿論吾等の勤勞が經濟的であるか、文化的政治的であるか、筋肉勞働か頭腦勤務かは問ふところではない。

現在の制度は青年層の一部を徵兵する事になつてゐる。世界各國この點に大なる差異はないのであるが、たゞ青年の何パーセントが徵集され兵營生活をなすか否やに違ひがある。平常時我が邦では青年の大部分は體格不適の故にて乙種又は丙種と格付けられて村に歸り又は各自の職場に落ち着くのであるが、尙その中には都市に於いて無職浮浪生活を爲すものもあるのである。親の財產・遺產の故に又は投機的收入の故に數十萬の青年がたゞ爲す事もなく右往左往し、或は宿屋下宿屋に眠りつゞけ又は家に閑居する者も相當數あると云ふ實情である。

小人は閑居せば不善を爲すのである。小人ならずとも無爲無職であつては兎もすれば不良となる傾向がある。東京都中央地區に於いて夢遊病者の如く遊び廻り練り歩く青年の多いのを耳にするが、吾等は戰時には勿論之等を一括軍務軍屬として勞役せしむべしと主張するが、平常時にてもかかる存在はそのあるがままに放置すべきでなく、應召兵と同一な期間兵營ならざる國家の錬成設營に於いて訓練すべしと言はんと欲するのである。

青年錬成所には不具ならざる青年は必ず肥瘠の別なく體軀の長短輕重を問はず收容され、朝夕の起居は兵役者と均しく、規律服役も亦軍務にあるが如くすべし。たゞ兵務と錬務との差は毎日一定時間は軍務ならざる公務に從事すると否とにあるのである。例へば飛行場の造營、軍用道路の修築、測量、港灣の修備等への勤勞奉仕などこの第二種青年をして當らしめ時には必要に應じて遠方への出張勤勞奉仕を爲さしむる事も考へ得るのである。青年を斯樣に取扱ふのは、彼等をして本能的勞務慾の覺醒を促さしめるだけでなく、或は彼等青年者に國民構成分子としての職域に奉公する修錬の發足を與へるだけでなく、國家としては多數に上る勤勞奉仕に依り採算を度外視した事業を完遂する事が可能となり且つ政治の公正を期する上から、徵兵青年と否徵兵青年に均等なる課役を施す意味に於いて正に一石數鳥を獵する意味となるのである。

勞働の報酬は心の滿足なり

溫袍に身を包み安逸に日を送るは享樂ではなく苦痛であると考へるのが日本古來の敎へである。「お日さまにすまな

い」とは吾等の父祖が口癖にした言葉である。勤勉な人に疾病の少いのは吾等の常識である。働く者は樂またその中に在りと業その物に慰樂を見出すのである。仕事それ自身・仕事の完成それ自體が大なる報酬となるのである。吾等之を言ふとて鹿爪らしく僞善や强制的信仰から左樣に考ふべしと言ふのではさらさら無いのであつて、眞に仕事を喜ぶものは仕事に苦痛を發見するのではなくその間に悦樂を感ずる境地にひたるのである。文豪トルストイは勞働を崇高にして尊貴なるものとしたが、彼のこの形容は衒つたものではなく獨善的でもない。西洋人にも本質的には勞働を神聖化した一部があつたので此の點東西その軌を一にするものなのである。

我が國には不勞無職を卑下した文獻は多い。二宮尊德の報德教は言ふに及ばず安藤昌益の尙農直耕主義はその著しいものである。今その一例として荻生徂徠の「政談」の一節から以下の如く現代語で拔萃して見る。

「城下には工商に精勵せざるものを絕無とするやうに心掛けねばならぬ。家業に精進せざるものなきに至れば人心充實するが故に、諸惡諸業は消滅するのである。この根本を忘れ惡事の末端に於いて施策を錬つても不行屆なるを免れないのである。されば、無職にして工商をはげまず、武士屋敷など相手にして營業をなし且つ自らは不在にして手代を以つて奉行所への屆出等手續を了し、安居樂生するを世間は何等害毒を與ふるものとは考へないやうだが、風俗上甚だ好ましからず、田舍に於いても大農が業を自らせず、小作農に依存し其の身は江戸の無職業者に似たる生活を營むもの近年多數に上ると傳へるは禁止すべき事なり。

我が邦では如上の論評は苟も政論、經濟論義を爲す程の者の必ず說述したところであり、如何に徒食遊惰の民が我が學者の批評眼に映じたかを知るのであり、之を歐米の享樂主義者等は人間經濟活動を爲すは享樂を先想するが爲と言ふとその精神的方面に大きな逕庭あるを見るのである。

勞働は享樂を目標とするのではない。勞働は勞働それ自身が樂しみであり且つ人間の本能であるから働くのである。報酬としては財貨を豫想するのではなく、むしろそれは偶然に勞働の結果生ずる副產的なものであり、派生的なものである。かやうに考へるのが皇道經濟の踏む途である。勞働のために勞働する。個中に報酬が內包されてゐる筈である。國家は政治の爲表彰に依りその勞働に酬ひたり社會は代償を支拂つてこの勞働に對處するを普通とするが、勞働提供者側からすればさる對價物なくとも毫も不平も不滿もあるべからざる筈である。とかう云ふ原理に活きるのが吾等の意圖するところなのである。

如上勞働の境地は勞働の藝術化なのである。勞働嫌忌の態度など藝術勞働者にはない筈である。日本の農夫が代々世々に傳はる農地に米を耕し麥を作るに際し收穫期の相場を氣にして働くものは殆ど無いと信ぜられるが、此の點我が農家は勞働の眞諦を會得してゐるものと謂へるのである。慈ひに學に志した者、町に於いて富まんとした人達の間、この人の崇高なる使命と本能に心づかず勤勞を卑下するが如き傾向あるは警しむべき事どもなのである。社會批評家ラスキンは、人は相續に衣食するを恥とすべしと言つてゐるし、勞務は利の爲に行はれるものでなく奉仕の爲に與へらるべしと言つてゐるが、たしかに一見識である。ラスキンは近世的機械工業を排斥し中世紀の手藝にかへることから仕事の藝術化を理想とした人で西洋資本主義の間にありながら德川時代日本國學者張りの批評を敢へてしたところ珍とすべきである。

知名の西洋學者にして勞働を神聖化した人々はラスキンの他にもある。トルストイの名は前節に擧げたが尙カーライル及びモリスなども同樣な態度に出た人々である。併し、此の彼等にもまして吾等の異とするところは、正統經濟學中興の祖ジョン・スチュアート・ミルが案外心的要素を經濟學中に攝り入れてゐ、勞働についても以下のやうな意味の事を言ふのに存する。

教育、文化、修養が人の性質に變化を與へ國家に貢獻するところ多大であるやうに、農耕、織物、その他工業が愛國心に發足する愛國的行爲だとされる時が早晩來やう。卽ち彼は經濟人の經濟行爲が自利心よりせずして愛國的動機よりスタ

ートし、愛國的行爲と世間から認識されるに至らうと世相を豫見したのだが、ミルのその豫見は七八十年後の現在既に人の心を支配し其の線に沿つての實踐さへ起りつゝあるのである。

わが皇道經濟は先づ第一に青年の無差別皆勞を主張するのである。而も總動員勞務は强制に出發せず、物質的報酬を目がけるのでなく、偏へにしかせで止みがたき本能の本質から發足する精神の動きてふ點に惟ひを及ぼしたいのである。而して報酬を副産物と考へ勞働を藝術化して活きたいと志望するのである。

國民皆勞が國民體育向上を促すことも忽諸に附すべからざる點である。吾等は痩せ細りたる富豪を見るよりは頑健にして生氣潑剌たる勤勞民の市に充つるを欲するのである。日本人は短軀の上でよし美貌ならずとも可なり。たゞ彼等は全身これ力、渾身これ勇で造り上げられねばならぬのである。

第七章　私有權と利潤觀念

私有權とは人があ〻財貨及び土地の上に使用、占有及び處分權を有する事であつて、その條件のどれを缺いても私有權は成立しない。時として物の使用、占有の事實はあり得るがそれだけでは私有權を形成せず、財の處分權を有し且つ占有の事實はあつても利用權なくては之亦私有權とは言はないのである。たとへば土地小作者が一地積の地上權を有し毎年そこに耕作を續行してもそれだけでは所有權ではないのであつて、其の土地の賣買權をも含めてこそ完全な所有權を構成するのである。

私有權は現在經濟の基本制度であつて、統制經濟、計畫經濟の進行急速度の現在でも尙吾等の經濟生活は私有權を否定しようとはしないのである。共產社會主義のロシヤは生產の用具とその手段を公有としてゐるが、近頃では市民の消費方面に於いてある程度の私有を認め、農業生產の一小局面に私有を許す事となつたやうであるが、其の初め人も物も凡てを公共化した蘇聯がかかる政策原則の轉換を一部に挿入せねばならなかつたところよりして見れば、私有權の先入觀念が如何に人間の性格內に粘り着いてゐるかに吾等驚嘆の他ないのである。

社會主義は私有權を否定すと解されるが、それは生產の手段、資本、機具の上に限られるのであつて社會の構成員が個人々々生活を營むための消費用財については私有を認めてゐるのである。資本主義は言ふまでもなく、生產財たると消費財たるの別なく私有權の基礎の上に總ての經濟組織を作り成すので、我が邦の此の點に關する保證は憲法に依つて與へら

れてゐる、國家の諸法規にして苟も財に關係ある程のものは悉く私有權制度の上に立つと云つて差支へないのである。

神は人間に土地を與へ給うたと言ふ天賦說が西洋學者の間にある。併し人類の創始時代に遡れば物のみひとり潤澤であつて人口極めて疎、土地でも果物でも勞せずして收め得たであらうし當時所有權などありさうにもないのである。西班牙、葡萄牙の冒險者達が新世界を發見したり東印度を我が家として臨んだ時分と云へばまだ五百年に充たぬ歷史であるが、其の時分ですら新世界ではカブラル、バルボア、ラサローなど剛の者又はそれ等隊將の部下達が小高き山に登り「見渡す限りの土地は我が所有なり」と長嘯一番すれば何百萬町歩の土地はその者の所有とされたのであり、かかる經緯から見れば、私有と神の命令とはしつくりしないものがある。

西洋流の考へ方から云へば私有は社會的發展制度であり國家が保證を與へる事に依りそれが確乎たる權利となるのである。ある一人が物を占有して使用してゐても、すぐ他の一人がそれを奪はんとせばどうなる。最初の者は腕力でそれに抵抗するは勿論だが一朝腕力足らざる時は如何とも致し方なく占有はなくなり、使用も出來ず結局泣き寢入りとなるのである。併し現代の私有權は國家之を保護し大衆之を承認するが故に、終に法治國の基礎的制度として發達し行くのである。

成程我が邦の私有權も憲法に依つて保證されて居る。帝國憲法第二十七條は「日本臣民は其所有權を犯さるる事なし」と明示し且つ民法所有權の章に於いて之に關する幾多の規程が設けられてある。之に依つて見ると一見我が邦の所有權も西洋のそれと異るところなきが如く見え、在來の學者の所有權論も亦西洋學派の糟粕を舐めたに過ぎないのだが、今次大戰を機に吾等日本人の所有權に關する觀念は西洋のそれと大なる逕庭あるに氣づいたのである。

その昔、財產と云へば土地が主なるものであつた。生產の機具も生活財も極めて限定された社會に於いて土地こそ財產であり生きる爲の唯一の生產用具であつたのだが、わが國では肇國以來この財產は上

天朝のものであつたのである。

天照大御神・

天孫瓊瓊杵尊を降し給ひて「豐葦原千五百秋の瑞穗の國はこれ吾が子孫の王たるべき地なり」と神勅を授けたまひ先づ日本國土が朝廷のものたるべき基礎を明示し給ふた。當時出雲に根城を置かれた大國主命もまた天孫に對したてまつり直ちに國土奉還を敢行されたのである。

吾等日本人の財產所屬はその源を玆に發するのであり、その後紀元一三〇五年孝德天皇の御時、皇太子中大兄皇子、中臣鎌足等の獻議を容れさせられ大化の年號を仰せ出され天下の土地、人民悉く朝廷に收めて公地、公民となし、皇太子自ら範を垂れられて土地、臣下を朝廷にいたされたのである。「天に二王なく臣に二君なし」とか、普天のもと卒土の濱いづれか皇土にあらざらんと謳はれたのは此の時であり嚴重に財產の所屬を明らかにされたのである。

大寶令に表はれた財產所有權は班田の制であつて、人生れて六歲なれば一定の班田を受け死すれば乃ち之を朝廷に返上申上げるのであり土地の所屬につき一點の疑義をも挿む餘地なく、それこそ天孫瓊瓊杵尊の受けたまへる神勅の精神そのままなのである。その後明治維新に際して我が國所有權の性格がもう一度表面に出た。即ち德川の大政奉還、各藩の版籍奉還及び廢藩置縣であつて、之等一聯の大改革が一滴の血をも見ずして解決したのは最初から我が邦の制度に於ける所有權が明らかに示されてゐたからである。

日本の憲法は

天皇から下し置かれる欽定憲法である。その憲法に於いて所有權が保證されてもそれは

朝廷の必要に際しては如何なる處分を受けても民に不平なき性格のものである。國家の政策が命ずるならば國民は所有する總てを奉上する用意あつて然るべきものである。たゞ國家の側からは專制的にまた無闇に所有權を奏してはならぬし、今の時代に共產主義的行動を執らうとするものは我が國爲政家の中に一人も存在せぬのである。併し私有の形式を其の儘としても一旦國の急となる場合その使用權の徵用や、利潤調整や、整備統制令の如き、要するに苦情申し出などあるべき筋合ではないのである。

財產權が掣肘を受けるのは理念こそ異れ、西洋資本主義のもとですら極めて頻繁である。所謂社會政策に依つて自由主義的資本主義の缺陷をも補正せんとする結果、社會制度のそこ〳〵に彌縫的工作が施されるがその工作總てがやがて財產所有權の制限となるやうである。例へば公用道路敷設に當り私有土地の一部が徵用される。工場建設に際し公衆衛生上個人企業者の自由が許可されない。または市街地の店舖は一定の規則に依らざれば建築停止を命ぜられるなど、數へ來れば所有權の制限は文明と共に增加するのである。たゞ、斯かる場合日本人である吾われは心よく奉還の氣持で之に應ずるのであるが、西洋の思想に慣れた人々は絕えざる政治的抗爭を繰返しつゝ結局社會全般の福利のためかかる制約に服從せねばならぬやうになるのである。

以上說くが如く我が國の私有權の基源は法律的にも歷史的にも炳乎たるところあり、學者の詭辯容るる餘地なきものであるが、それでも英米中心の西洋思想吾に流れること八十年、私有權の解釋も社會契約說だ、天賦人權說だ、または占有說だと樣々に解釋を下されたのであるが、現在日本獨自の精神文化吾等に蘇ることに依り俄然、日本的所有權の眞の姿に還つたのを識るのである。

かかる觀點からしばらく思索にふけつて行くと、現在も將來も日本經濟から、利潤追及を掃蕩すべしとの一法則を確立しなければならぬやうである。國家は計畫經濟を進めつゝあるがこの計畫的性質こそ、來るべき經濟界を支配すべき運命にある以上、利己心の發動は大きく抑制處分を受けねばならぬやうだ。が併し我が所有權の根本である總ては朝廷である懷古的觀念に立ち入り現制度の大變革を賭して之が改定を企圖するものは我が邦には一人もないと確言する。

併し利潤なきところ勤勉なく創意なしと云ふやうな考へ方は日本經濟には許容されないのである。自由主義は既に崩壞したし、資本主義にしても在來のままでは我が國情と相容れないので、此の點に深く留意するところあれば、利潤精神奉還など何等の不自然何等の不便をも釀さないのである。

利潤が創意の素、精力の源であると考へたのは利のあるところ人生の快樂があつたためであり、富める者は殆ど欲するところ行ひ得ざるはなしと云ふ社會情勢であつた爲である。東西の歷史を見ると明らかだが、武が貴ばれた時代に人は武に就いたのである。財產が世間を左右した資本主義制度下で、富を欲したのはさもありさうだが、今や日本の世界觀が大東亞建設、八紘爲宇の實現に構想を練らんとする時、個人の利潤追及は大我、大乘的利潤にその位置を讓らねばならぬのである。而して各自日本人が心構へを整へ邦家の世界觀に自己を沒入せしめ、私の所謂小我大我一如の境に於いて仕事の藝術化を心とせば、創意も精勵も必然湧出すと斷言出來るのである。

世間往々かかる考へ方を共產主義と混同して批評する人がある。誤れるの甚だしきものである。形式の上でも吾が皇道經濟學は資本主義形態から生成發展して來るのであり社會主義共產主義の生命とする財產權の否定を否定するのである。成程吾等は私有財產には重大な制約を加へんとするのであるが、決してその否認ではない。而して經濟行爲の心的方面においては社會主義の唯物的なるに反し之は亦精神的である。經濟現象に心的方面をとり上げ、財產權の掣肘も喜んで之を享け、利潤の觀念も自發的に喜んで之を捧げると云ふ所にわが皇道經濟の世界に冠たる所以を發見するのである。

第三部　物的經濟原論

第一章　はしがき

西洋經濟學の祖述に出發した明治初年以來の我が經濟學には經濟の思想研究はないので、自然本書に於いて私の編みなしたやうな經濟思想論は無いのである。而して經濟學者は概ね物財の生産に發足するのであり、其の限りに於いて本書第三部物の經濟學と相似するのである。

經濟學は社會科學であり經濟現象は無形不可視狀態で動く場合が多いので、時には正體捕捉困難の場合があり、之を自然科學の對象たる計量可能、觀測容易な物の研究と比し、甚だ覺束なさを感ずるのである。世間往々經濟景氣觀測を酷評して「當らぬのが當り前」とするもののあるのは此の間の消息を語るのである。

經濟現象は捕捉し難しと言つても、それは不可能を意味するのではなく、いつかは自然科學に於けるが如く一糸紊れざる公理公則の成り立ち得るものと考へられるが、現在のところ殘念ながら吾等學徒の研究其の域に達せずと告白せざるを得んのである。

私の研究は物の經濟に關する限り能ふだけ從來の慣例に準じたのである。内容的にはまるで換骨脫體の箇所もあるが、兎に角用語や見出しは先覺に倣つてゐるのである。而して殆んど學徒の常識を爲すやうな原則や議論でも本書を經濟學書たらしめる體系整備上、その概要祖述を洩らさぬ用意はあつたつもりである。

第三部に於いて私の力説したいのは貨幣論、商人論、饑物文明論などであるが、未だ研究と資料の不足から總てを說き盡せないものがあり所謂隔靴搔痒の感があるのである。要するに新しい經濟原則の新時代に迎へられるものはあるひはそれ等過渡期未完成材料から歸納されて出來あがるのではあるまいか。」

第二章　經濟財と富

經濟學は人生との關係に於いて物の離合集散を規則づける學問なりと本書第一部第八章で定義し且つ物のどの部分が課題となるかを概說したが、本章は物の性格及び人間生活と物の連繫についても一層詳しい研究をしようとするのである。

物と云へば森羅萬象眼に映じ、耳に聽き、鼻に臭ひ、口に味ふもの悉くが物である。空氣、日光、水、炭、米などの如きである。併し感觸せざる形なき物もまた經濟的に物であるものがある。例へば權利、商號暖簾などそれである。

物なる概念の掩ふところは頗る廣い。だが物なるが故に經濟財であるのではなく、卽ち本章の研究があるのである。

自由財と經濟財

併し、物總てが經濟の目的とはなり得ないのである。凡そ經濟現象のあるところ一方には本能的經濟慾求があり他方に物があり此の關係に於いて浮び上る物だけが物的經濟の研究範疇に入るので吾等之を「經濟財」と呼ぶのである。

經濟財の內容的性格をなすものは（一）效用、（二）獲得困難性、（三）稀少性、（四）計量可能性であり、以上四特異の故に物に價値を生じ人の慾求の對象となるのである。

この故に莫大の效用を有しながらも第二、第三の性格を缺くが故に日光、空氣、水などは經濟財ではなく自由財と格づけられるのである。新世界發見頃まで地球のある地域では未だ土地を自由財と見做し得たものである。つまり當時の冒險者達は山に登つて見える限りの土地上に所有權を絕叫し得程にも、獲得容易である。稀少性を想ふの必要がなかつたからである。併し現代は違ふ。渾圓球上土地は殆んど經濟財となつたのである。石炭も同樣であり地中の黑き塊りとして其の未だ利用法知られざる時代は物であり自由財であつたが經濟財ではなかつた　假りに淺間噴火口中にある種の化學原料があり人生に大寄與をなすかも知れないとしてその物は自然科學研究の目標とはなり得てもそれは物であつて經濟財ではないのである。何故ならばそれには稀少性があり、獲得の困難はあるが效用は豫想されるだけで人生との實際のむすびが起らないからである。

抽象的經濟財

人間の本能的慾求に應ずる手段にして有形なものの中、經濟財を抽出して考へたのは比較的容易であるが、近代生活は左樣に單純ではないのであつて、其の他にも無形な給付、權利及び證券等の頻繁なる發揚に依り財の內容も亦複雜なものとなるのである。醫師自身は財ではないが彼の勤勞給付は財である。機械修理や食堂給仕の奉仕は、奉仕そのものが經濟財を形成するのである。同じ意味で有形財を抽象する權利も亦經濟財となるのである。一工場が五百萬圓と値打ちづけられ五百萬圓の證券に依つて代表される場合その證券は經濟財であり工場も亦財である。たゞ工場計算の上で株證券は借財として表はれるがため國家財產の總勘定の上に重複計算とはならないのである。土地とその上に設定される權利も亦同樣であるのは勿論である。

其の他、物を背景とせざる無形物にして經濟財となる重要な種類が近代經濟生活に織り込まれて來たが、それは公債、業權と云ふが如きもので後者は俗に老舖又は暖簾などと呼ばれるところのものである。國家の公債は概ね無擔保であり、

一國の名譽を背景とするのみである。「關稅擔保など云ふ公債は極めて限定された國の場合である」同じ意味で紙幣も亦無形財であつて物の抽象形式ではない。併し經濟財であるに相違はないのである。

「老舗」とか商標權、製造權、特許權を經濟財とする事は近代經濟に於いて重要なる一面となつたので、自然つい近頃まで經濟學が經濟財を狹義の「物」のみに限定したり、生產を物體のみとし、生產者を直接有象物造作に從事する人々と定義したと異り、凡そ人生との關係に立ち行爲の一端に財が存在し他の一端に本能的慾求があり、その兩端の間に「むすび」のある物心兩面の現象が經濟現象でありとする私の主張は玆でも證明されるのである。

生產財と消費財

以上で吾々は物を自由財と經濟財とに分類し、經濟財の內容をあらましながら研究したのであるが、經濟財が有形財と抽象財とに分類され得る他に觀點を異にして之を生產財と消資財とに系類づける場合もあるのである。生產財とは生產の手段であつて間接に人の慾求を充足するもので、土地、工場、鋤鍬の如きそれである。あるひは之を間接財と呼びなす學者もあるのである。消資財は直接人の消資に供せられ慾求の目的に應ずる財即ち着物の如き、食糧の如き、住居、享樂物など悉くそれなのである。但し家屋が消資財であるのは私有住居である場合に限られ家を有し之を貸付け、家賃收得を目論見る者にあつては家は資本即ち生產財である。消資財と生產財の區劃は極めて困難であるが大體に於いて生產資本を生產する手段は生產財であり、衣食住市場に供給されるものは消資財となると解すればよいのである。此の意味で石炭は工場又は運輸動力用としては生產財であつて、家庭的料理、溫暖用としては消資財となり、勞働も亦兩樣の意義を有するのである。

享樂財と福利財

有象無象の經濟財を縱に分解してもう一つの區別方法があると惟はれるが、それは人生の必須要件と贅澤要件との別である。經濟學に道義を加へることからかかる分類は極めて重要なものとなるので、贅澤要件を更に細分すると其の一部には財と計算されながらも國家、社會をなす上に害毒を流すものもあり、あるひはそれ程ならずとも、あつてよく無くもがなとするものがある。例へば、阿片の如きは前者であり葉卷莨など後者に屬するものである。國民の最低生活を保證する戰時狀態に於いては福利財の確保を意味するので之を生活必須財と名づけて置くも一方法であると考へるのである。

經濟財を必須財と享樂財に分つのは享樂財の一部分は人生に不必要なりとの烙印を付する際の便宜であり經濟學の研究が此の一項に軼掌する事に依りその明朗性を取り戻すものなるを惟ふのである。併し、之を言ふが爲に私は享樂の總てを排斥せよと論ずるのでもなく、演劇、食事、飲料、旅行などに文化的慰安を持つ事の毫も憚忌すべきばかりではなく、時間的に見て曾つての超享樂が、後世の必須條件となれる場合もあり、享樂の中に更に必須享樂的のものを發見する場合も想像出來るのである。たゞ在來の經濟學が全然取上げるところなく、却つて經濟財が惡であると不良であるとは經濟學の問ふところでないと斯學の倫理性に無關心であつた點に、この一投石が行はれればそれでよいのである。

富と資本

經濟財を有形無形の「物」の中に發見し、物の抽象體を含め、形體なき權利だけの存在をも亦經濟財なりとする極めて廣義な觀點に立つと經濟財卽富だと云ふ事に歸着するのである。かうした意味を極度まで推し進める人も亦富として分類

されてよいのであるが、人は物の主人でありその支配者である人生の根本性格の上から人と物との一視同仁を避けるのが當然だが、それでも近來は人的資源と稱して之を資本扱ひする場合がないでもない。たゞ此の場合、資本と云ふのは財として貨幣的計數に擧げられるか否かを考慮したものでなく、たゞ漠然と人の戰力又は生産力と云ふ意味に言はれるので、經濟學的に財物扱ひを意圖したものではないのである。

資本は富の動員姿勢にある部分であつて、人の節儉、先見に由來する經濟財なのである。資本の蓄積から將來の生産が約束され、資本から一般人の消費財及び必要なる享樂財が生みなされるが故に、資本蓄積の動機は愛他的でありまた愛國的であるべきであるが、現代經濟人、必ずしも左樣な崇高な動機で資本を擁すとは考へられないのは殘念である。

經濟財の中でも消費財の大部分は資本とはならない。消費の爲に一時的に在庫されてゐる財物は富を構成するが、資本とはならない。穀は播種されてこそ資本だが、米となり白米化されては單なる消費財である。樂器が家庭で子女の享樂に供せられる間は消費財であるが、之に依つて持主が授業料を收得し又は有料放送を行ふやうな場合それは資本化するのである。

常識的に「無形の富」と云ふ場合の多くは經濟財を背景とせざる富であつて、其の道義性及び社會性の高く値打づけられるにも拘らず經濟學的に富として取扱はないのである。心のうるほひ、豐かな人情、完全なる德操などたしかに無形の富であるが、其の第二者、第三者への移讓困難性（獲得難）の故に經濟財を構成しないのである。

土地と資本

經濟學者の多くは土地と資本とを區別する。土地は永久に存續するものであり、最も基本的性格の財なるが故に土地は特殊資本として差別待遇を與へて說述するのであるが、法律的に又は經濟的に、以上兩名詞の間に左したる區別あるにあらず、從つて土地を資本として研究を進めるのが便利であり且つそれが正しい行き方だと考へられるのである。

私は本書に於いて經濟の倫理化を思念してゐるので、當然經濟財の章で福利財と享樂財を區別し、後者の一部は生産否定の運命にあるを言はんとするのだが、もし方法が發見されるならば所謂「無形の富」なる道德、修身、厚生及び仁義なるものを經濟財となし、福利財として之を尊重し得る事を冀望するのである。おしむらくは現在吾等の財に對する認識は貨幣にて計算するか數量で計り得るかに懸り得るので、あたら大切なる「無形の富」を經濟學的に富としても經濟財としても尙亦資本としても取扱つてゐないのは殘念な事どもである。ある人は經濟學の研究範圍をそれ程擴大せず、それはそれとして他の社會科學の研究に委せばよいとするのだが、私はさる消極的態度に出るよりは形貌なき富の計量方法の案出に依り、社會的にその富を認識し、表彰もなし、人のより强力なる努力と發奮を促す事を得たらんには、經濟の倫理化は無量の迫力を加へられるものと想ふのである。たゞ私の滿足は本書に於いて經濟思想論を經濟學の一部として强調し得たことで、形なき富の經濟活動挿入の序幕がそこに開かれたとの信念にあるのである。

第三章　價値及び價格

價値論のあり方

經濟學を論じて價値論を缺くは玉の盃底なきが如くに考へられてゐるのであるが、價値の問題はそれほどに貴重であらうか。吾等は既に經濟財の研究をした。經濟學研究の對象は財貨であるから、ある學者が財貨の經濟的性格である價値を取り上げるのも無理ではない。勿論價値論即ち經濟論かと想はれる態度に出るのは不可解だが、併し價格を問題とする近世經濟學の構想では、價格との連繫に於いて價格の何たるかを知つて置くのは無用ではない。カツセルの如く、初めから價値や効用を無視するにも當らないと考へる。

價値なる言葉は千態萬様に使用される。道徳價値だ、科學的價値だ、音樂的値打だ、個性だと價値の加はらない人間的思惟はない程にも此の言語の濫用がある。併し吾々の研究に上る價値が經濟財に限られるのであるは言ふ迄もない。

價値論を左迄重要視するに當らずとする私の理由は、國家計畫に主軸を置く價格は人爲的政治調節を加へられる場合が多く、價格の基礎構成を爲す價値も主觀的に效用價値を設いて見ても國家目的とそれが相一致しない時は價値は價格とは正比例しないのだし、極端な場合になると、客觀的價値と見做される勞働價値でも國定の計畫價格が之を變更して進むと言ふ場合はあるのである。だが併し、かうした國家の計畫も一應は價値構成の自然情勢を念頭に置かねばならぬ理由で、

私は其の全的否認を主張しないのである。

價値構成要素

先づ私の價値についての定義を言はう。即ち簡單に之を、抽象的效用（プラス）客觀的勞働（プラス）生産技術（イコール）即價値と表現し得ると思ふのだが、抽象的效用とは消費の面から一般的必要度の謂であり、客觀的勞働と生産技術とは、一經濟財生産費の總和の意であるのである。而して玆に十（プラス）としたのも三要素の理學的合計ではなくその有機的化合であると解したいのである。

抽象的效用とは一私人の一個の財に對する效用と言ふ意味でなく、一般の消費者又は需要者が漠然と「惜しいなあ」とする效用であり、必要認識の程度は數量で計るなどの適確性は持たないのである。とかう見れば價値論が限界效用說などに向けられる個人的主觀に墮する惧れはないのであるが、價値研究はそれだけでは完全たり得ず、それに加へて、勞働及び企業價値即ち價格の上では、賃金と利子及び利潤を加へねばならぬのである。

かう見ると何となく在來諸學者に依つて、複雜且つ面倒な問題として取り扱はれた價値の難解味は消えるやうである。水は效用無限である。併し勞働も企業も加はらざるが故に經濟財とならず、經濟價値もないのである。ダイヤモンドには效用は左程ない。勞働的要素も僅少である。常識的に云ふところの美術的價値はあつても經濟的價値は左迄ありとは想はれないのに、何故價格は常に高いのであるか？　然りダイヤモンドの經濟的價値は左程高かるべきではない。たゞ高價なのは價格の上だけであり、價格には價値構成要因の他に尙一つ、人の享樂的本能慾等が入り來る爲である。價格については後に論ずるが、たゞ玆では價値は必ずしも價格と正比例しない事だけを知つて置けばよいのである。

と言つても價値があるに拘らず價格がないことがあるかと言へば、必ずしもさうでないのであるが、併し效用と價値は

必ずしも同じでない事も知つて置く必要がある。前例水の場合は效用無限であるに經濟的價値はなく勿論價格もないのは卽ちそれなのである。

物の效用

物の效用が價値の大きな內容となるのは勿論なのだが、その效用範圍が無限であれば終には無價値を構成するのは、空氣、水、日光に見るところで、そこで價値を造り出す理由として限界效用說をなす學派があり、主觀的效用を以つて價値となすのであるが、之は楯の一面であつて其の全貌でないと私は斷言するのである。此の限界效用說については後の項に批評するつもりである。

效用は兎角個人的に考へられ易いが、經濟學は國家的社會的に編み成さるべしとする皇道主義から見て、個人の意圖するものは全の優先性に先行されるのであり、效用の意味も全一的意識のものたるべく私は抽象的效用なる言葉を使用したのであつて、其の中には國家の效用とするところの通念的效用を主題とするものなるを記憶せねばならぬのである。從つて效用は主觀的なるが故に個人主義的なりと言ふ人あらば、それは誤解であり、もし塊太利學派がかかる狹い意味で限界效用說を考へたとせば、それも間違ひなりと私は斷言するのである。

價値の原則は大體上に說き示した通りで、其の上に國家計畫が加はる事に依つて經濟的に動員されるのである。米を例にとつて見る。米一石の價値構成分子は、效用の概念と勞働及び企業の値打と政治的考慮等である。此の見地よりせば、阿片に政治的禁止の命が下れば、個人的に效用はあつてもその物には價値なく價格もあり得ないのである。同時に阿片には個人の主觀的效用はさるが一般的效用はない。偶々市井の間この禁制品に市價ありとせばそれは闇相場であつて、經濟的よりは警察行政の問題と化するのである。

西洋の價値學說

經濟學說としての價値論は日本にはない。我が經濟學書載するところは悉く之を歐羅巴に求めたものでありその祖述である。從つて學徒の參考として西洋學說の大體を示すのは無用ではないのである。

價値說は概ね三つある。主觀論と客觀論それに價値論否定とである。その最後のものはカッセル一流の學者の主張で、物と價値の關係を既定の事實として價格の研究に出發するので、かかる經濟學者の態度にも首肯出來る點がある。カッセルは價値論を無用だとする反面價格形成論を繞つて貨幣論に一體系を作り出したのである。畢竟經濟學の重要視するものは價格であつて價値と言ふが如き心理研究に入る必要を認めないのである。

客觀的價値論者は一名勞働價値學者とも呼ばれる。所謂古典學派は之に屬するもので、スミスからリカードそれからマージャル等の碩學は卽ち此の派の人々なのである。彼等は價値を交換價値と使用價値とに分ち、前者は購買力であり後者は物の效用力であると做す。交換價値を構成する分子は勞働であり資本であり利子、利潤、地代などが計算されるので、その物の力卽ち購買力を貨幣で現はすものが價格であると說明する。效用價値は交換價値と密接な關係に立つが必ずしも其の全的基礎を爲さない。何故ならば空氣の效用は大であるに拘らず交換價値は無であるからである。要するに客觀的に物自身が價値を生むと言ふのが此の論者の見解なのである。

之に反し、主觀論者は財の價値は人の主觀的評價に依つて決する。人間の慾望が物に內在する效用を判定して其の物の價値を判斷する。而して物に對する慾望が熾烈なればそれだけ人はそれの獲得に向け努力を捧げるのである。從つて物の

效用はそれだけ增大する理由である。併しかうした效用增加の反面、物の獲得が容易であつたり物が比較的多く存在する場合、效用度が減少して來る。ある一人に對し二合の米は一日の生活絕對量として重大な意味を有するもその一日の糧として一升が配給されて來ると同じ米でありながら其の人に對し效用の度合に差がある。然らば其の一升の米のどの邊が效用の境ひ目であるか。以上の例で言へば米の新しい配給を明日に控へて今日の必要は、二合の自己生活用、二合の養鷄用、二合の不時用として餘る四合は此の人に關する限り效用なきものであり自然效用の限界は六合の不時用の點に懸るので、經濟學の限界效用學者達はこの點を經濟價値の決定境界とするので、之を限界效用學說と呼びなすのである。

限界效用學說に從へば、物が夥多であればあるだけその效用は大であつても、人に對する效用限界は低下するのであり人の慾望も薄らぐので自然その同一物の經濟價値は低位に決定されると言ふ事になる。水も空氣も此の理由で說明され、一つの林檎より五つの林檎の效用限界は少くその經濟價値も之に準ずと見る。

限界效用說はゴッセンに始り、メンガー、ゼボンス、ワルラス等に到つて愈々華々しく學界を賑はし且つ實際社會に應用されるところも尠くなく、ひとり價値論と限局されず經濟學を價値の研究とまで進めた學者もあるのである。

以上客觀及び主觀的學說の價値概念を述べたのであるが右二學說の差を次の一例で說明すると一層明らかになるやうである。卽ち客觀說の側から云へば玆に金十圓也の財貨があるとせばその價値の據りどころはその生產費であるに反して、主觀價値說ではある財貨が十圓で賣買し得るが故に九圓何がしかで之を生產すると言ふのである。

價　格

經濟財に價格のあるのは價値があるからである。價値の割合に價格が廢いと云ふ場合のやうに價値と價格は一定の割合で上下するのではないが、併し兩現象の逆行は絕無なのである。

經濟財の價格は他の經濟財との比率を貨幣を以つて表現したものなのである。交換の經濟社會では、米一俵は酒二斗、魚十貫目、果物十五貫目、又は汽車旅行一千哩と言ふやうに計算する複雜を避けて、一種類の經濟財を中心に交換比率を定めるのであり此の中核的役目を擔ふものを吾等は貨幣と言ふのであるが、かかる手段に依る交換比重を價格と言ふのである。

皇道經濟學に於いては現代的經濟要素をとり入れて貨幣との交換價値そのままを價格とは言はないのである。卽ち價格の中には多分に政治的國家要請が織り込まれるので價値、政治的考慮、享樂的慾求の總和が價格の構成要素だと言はんとするのである。之を前に研究ずみの價値の素因から一貫して說明して見ると以下の如く成る。

價　値

抽象的效用、勞働及び企業＋享樂的慾求＋政治的考慮＝卽ち價格

價値に享樂的慾求が加はるとはどんな狀態なのか。假りにダイヤモンドをとつて見よう。その超高價格なのは價値があるからではなく之を購はんとする者の慾求が旺盛だからである。而も其の慾求たるや本能的發動であり所有慾・愛美慾に歸因するものなのである。併しかくして生起するダイヤモンドの價格は平常の場合に於ける現象なのであつて、之に政治的考慮が加はる事に依り、愛美慾など、贅澤な沙汰なりと布令でもされれば、高價なる寶玉も忽然としてその價格を失ふ場合があり得るのである。

また米を例にとつて見よう。先づ效用、生產費を計算した價値は一石六十圓に上るとしても、國家の政治的理由が之を五十四圓に配給したい時に、政府は別途の方法で差額六圓の出所を究めて置いて米の價格は價値をはなれて五十四圓と決

定されるのであり、玆にも價値と價格の必ずしも並行線で進まない一例を見るのである。併し價値が價格構成の重要分子なるに變りはない。

戰ふ國家が計畫的に物價を統制するのは申すまでもない事ながら、普段時にありても物價が恣意的に動搖當なきは政治の要諦ではなく、恐慌の經濟となり、國民の生活不安を釀成し國家財政の不定狀態を招致するのである。新世界觀に立ち萬人をして生に安んぜしめんとする經濟社會は、絕えず物價安定に介意すべく、その安定の鍵が物價決定の要因に「政治的考慮」なる一種のプール的制度に存する點、我等の注意せねばならぬところである。

統制價格と自由價格

統制價格とは政治的考慮の加はつた價格を言ふのである。自由價格はそれの加はらない舊經濟秩序の價格である。國家計畫を中心に動かんとする新理念の經濟組織に自由價格は極めて限られた範疇にしか動かないのであるが、如何に統制とは申せ自由價格を基礎とするのでなくては統制を施す基礎を失ふのである。その上近世生活に於ける吾等の取扱ふ財貨は數萬種にも上るのであり國家は一々之に公定價格を與へるのは不可能であり、當然自由價格を其のまま國民交換の上に放任せねばならぬ場合が多々ある。

例へば、文房具の如きもの、小間物、工藝品のやうなもの、携帶品、身邊裝飾品など之を自由に市井に放置する事は平常時經濟に於いて何等問題はないのである。而してその放任に伴ふ自由價格も亦交換の原則に依り價値の法則に準據して進行するのに何の不都合もないと惟はれる。もし國家が之等消費財の上にも監視の眼を瞠るとせば、それ等財貨の價格が投機的性格に狂ひ出す時と、生產品の質が國家目的に隨伴しない時などだけであり、普通にさる場合は想像し得ざる所である。

統制價格の行はれる場合は、國家が高度國防國家建設のためとか、國家があるひは國家綜合計畫完遂の必要などの時に施されるのであつて、目標とされる財貨は國家の所謂重要物資とするもの、及び一般國民の生活必須物資と平和時に於ける標準的文化生活物資であらねばならぬ。之を具體的に言つて見れば、鐵、石炭、石油、軍需機械、船舶、航空機、自動車、化學製品、米、麥、味噌、石油、食料油、木炭、其の他夥しい財貨は統制價格制の下にあるを原則とし、成るべく價格の變動を避けねばならぬ。もし政治の理想が萬民をして其の所を得せしめるのに存するならば、當然、一度經來つた吾等の自由主義經濟生活の苦い經驗は繰返してはならず、生活の據り所あらしめるために生活物資の主要部分の價格に安定を與へる事に注意せねばならぬのは勿論である。

自由價格はどこから出て來るか。其の基本的なものは價値から來る。然らば價値からする自由價格はそのまゝ不動であるかと云へば、却々さにあらず價格は空間的にも時間的にも常に動搖しつづけるのである。近頃の經濟には統制價格が入つて來て其の面だけには比較的平靜價格はあるが、自由價格は變動常なきものなのである。但し動搖はあつても軌道外れな逸脫は極めて稀で大概は一定の中軸を保ち、恰も時計の振子のやうに動くのである。而してその中軸は生產費なのであり、主觀的效用通念であり、享樂的慾求であり其の上市場の需要供給の原則も一役買つて出るのである。

交換

價格は交換を前提とし財貨を需める力と之を供給する力とが一致する點に物價決定の現象が起るのである。然らば物價現象には（一）需要（二）供給（三）交換の三要件が存在する譯であり、その交換の副現象に市場の觀念を必要とし同時

に交換作用の了解を助ける爲に物價又は市價なる抽象的觀念を把握するをよしとするのである。

交換とは甲のある物と乙のある物とを交換する意義であるは言ふ迄もない。原始經濟に於いてかかる形式が唯一の經濟行爲であり、後の學者は之を物々交換の經濟と言つたのである。併し物々交換の不便は人をしてやがて物と一定の他の媒介的財貨との交換を考へさせるやうになつた。かかる媒介物は米であつたり、麥であつたりした時代もあつたが、種々なる人間の要求が漸く金屬的媒介財に一致するやうになり、近世では金又は銀に集中注意が向けられ之を貨幣と呼んでゐるのである。卽ち現今の交換は一方に財があり他方には貨幣が存在すると云ふやうな形式となつたので、爰に價値か變じて價格となる第一機緣があるのである。

一般經濟的研究では物價又は市價なる言葉が多く使用せられるが、それは綜合的觀察を行はんとするに當り一個の財を取り上げる場合は殆んどなく常に一般的財貨、概念的經濟財を思惟するので、この意味の抽象的價格を物價と言ひ做したものである。而して市場なるものの經濟研究上使用されるのは、均しく觀念的であり特定の某市場を指稱するのではない。例へば米の市價と云ふ場合は米の東京某市場に於ける價格を意味するのではなく、日本の米相場なる抽象的概念となるのであり、物價も同樣、米、醬油、鐵、材木と特殊の數種の綜合ではなく總て一國一地方を單位とする地域に於ける概念的、抽象的物の値段と解すべきである。

さて、吾等は交換の主格である需要、供給の法則を說明せねばならぬが、凡そ一財貨の需要層を構成するのは購入希望者の總數ではなく實際上の購入希望者にして之を買ひ得る力を有する人であるから之はとりも直さず購買力なのである。この購買力は又目的物の値段に依つて上下浮沈するのであり、物價が上昇すれば購買力は減退し、物價の下落はその增加を促す事となる。供給も亦需要の場合と同じく供給し得る狀態に置かれる財貨のみが供給力を構成し、其の財貨の物價の高低が供給層の幅を決定するのである。卽ち物價高き時は供給量が多くその反對現象は逆に物の供給量減退となる。

自由物價の鍵

價格の側から見て其の高低は需要層と供給層の幅を伸縮するのだが、其の價格を高下する作用はまた需要と供給の側から動くのである。卽ち一定の財貨が一定の市場に於いて五〇の値段である時にその住民の五〇%が需要層を形成するとして若しその値段が六〇に騰貴すれば購買層は四〇に又はそれ以下に減退するかも知れないのは理の見易きところである。然るに一方六〇に昂騰した財貨には生產者卽ち供給者側の競爭が起り物價下押しの現象となつて現はれるのである。同じ作用で物價が四〇に下落すると需要層の擴大となり、需要者間の競爭を惹起し玆に物價騰貴の趨勢を招致するのである。

價格の上下は需要と供給の幅を伸縮する傾向を持ち需給の幅の廣狹に依り其の間に起る競爭の故に物價を上下するのであつて、ある抽象的基準に依りその需要と供給の一致する點が自然に發見され、此の一致點を呼んで交換價格とし又は物價、市價と見做すのである。

而して以上に言ふ抽象的基準とは物の價値の意であり私の所謂、效用と生產費の總和てふことになるのである。（價値構成に於いても計量可能の生產費だけが基調ではなく、ある種の抽象的物の效用なるものが作用するとは、既に價値の項に於いて論じた通りである）

玆に私の取扱つてゐる主題は自由價格なのだが、この自由價格は成程生產費を中軸に、需要と供給が作用するに相違はないのだが、實踐經濟に於いて此の原則を大きく搖すぶる他の動因があるのである。次項で私はそれを取上げようとするのである。

價格の無軌道性

統制價格が國家計畫なる分子に依り大きく動かされるのは言ふまでもないが、自由價格は國家の手いまだ加はらざる時にでも、需要供給法則だけで割り切れないものがあるのである。卽ち玆に需要の一〇〇があり供給側求める値段の一〇〇が受入れられ乍ら尙交換點が滿足されない場合があるのである。更に供給側求める一〇〇の物價を一〇五に進めても供給間に合はず、逆にまた需要する向で一〇〇の購買力を九〇に減退しても、供給は依然伸びも縮みもせず、否時には物價と同時に需要者も減少しても、一〇〇の供給が一一〇と增加する場合のあるのは實際經濟界の屢々實證するところである。さう言ふ現象は消費財には尠少であるが、財に恒久性あり耐久性ある場合には極めて有り勝ちの事であり、ある經濟學者はさる成行きを一時性となし一定の期間內には、需要供給の平常性はとり戻されると言ふが、私を以つて見れば需要供給が規則正しく行はれるよりは不規則に動く度合が多いやうな現在經濟社會では、不規則却つて規則、法則と言ふ奇觀を呈するのであり、一層この不規則の原則を發見して置くのが吾等學徒の任務ではないかと考へるのである。

乃ち、私は之を價格の無軌道性と命名して經濟學の一項目として取扱つた次第である。

言ふところを例示するとかうである。先づ綿糸生産について見よう。ある時に綿糸一梱が八〇に下落したと假定する。綿糸の生産費の總量は七〇であるとしよう。その場合自由價格の下落は規則通りに經濟が進行せば、綿糸工場が操短をなすか、需要側が買ひ進むかする筋道となり、値段の向上が考へられるのだが、此の場合に尙値段も動かず、さりとて製造の手控へとならずに相當期間經過する事があり得るのである。此の事は享樂財貨に於いて殊に眞理であつて價格が銳敏に需要供給を左右する事には相當長きに亘る時間的要素が入つて來る。かかる時間を無視して「自然に法則通りになるのだ」と言ふのでは時を要素に研究を進める科學に對する忠實を缺くと信ずるのである。

繰返して言ふが、近時の統制價格には計畫的要素の加はるが故に、私の所謂物價の無軌道性は屢〻るに足らないのであるが、自由價格だけを論じそれが實際經濟の動きとなる時、此の無軌道性に留意し經濟現象を動かす法則の一としてその研究を忘れてはならないと思ふのである。

適正價格

最後に皇道經濟學に於いては自然價格を標準としながらそれに政治的意圖を吹きかけて、價格を統制する場合ある事につき申述べて置かう。卽ち軍事的必要から鐵の自然價格は極度に矯められ、以つて國家豫算遂行に遺漏なからしめるや、米價を調節し農家と消費者たる國民の一方又は兩方に補助金を支出してまで、統制價格を保持し以つて國民生活の安定を庶幾する事や、悉く國家目的に適應せしめる爲であり之を適正價格と言つたり統制價格と云ふのであるが、此の規格に屬する價格として、戰時行はれる東亞共榮圈の交易價格は最も著しいものではないかと考へるのである。假へば、中華民國に某品を賣つて出るとして先方の貨幣價下落物價高の故に輸出側の利益は莫大の額に上り平時ならば我が輸出は大促進を見るのである。之に反し中國側からすれば物價騰貴の故に輸出は激減するのであり、之を自然に放任せば由々しき片貿易狀態となるのであるが、玆に政府の介入があり輸出に依つて利するところをプールし、輸入に依つて失ふところを補塡するとせば、交易は故障なく行はれるのであるし、もし戰時中さる交易が必要なる國家計畫の一なりとせば、この種の工作は素より必然的であり、そこから生れる人爲的價格、之を適正價格と呼んで差支へないものである。

而して統制價格も適正價格も自然價格を基礎とするのであるし、限界效用、生産費など價格構成條件を見つめつゝ作り

出される價格なるを記憶すべきである。近來頻りに實踐經濟に應用されつゝある原價計算も亦自然價格を產む素として玆に挿入さるべき性質であるを信ずるのである。

戰時に於ける適正價格は軍費の健全なる使消・豫算遂行上遠算なきを期する上に不可缺要件であるは言ふ迄もない。我が軍需品價格なるものは卽ち適正價格なのであり、その構成過程は概ね以下の如き要綱に依るのである。（一）先づ生產原價を保證する。（二）適正利潤を保證する。（三）報奬利潤の制を建てる。（四）同一品に對する價格の個別性を認める。

軍需品生產の根本理念は國力の總資材を戰力化することに集中する。生產費の如き第二次的に考へられるのであつて生產增强が遮二無二推し進められるのである。從つて生產者をして生產費節約に右顧左眄せしめたり、原料仕入に顧慮あらしめるやうではいけないので、兎に角量の確保を成し遂げんため生產に要する費は必ず之を國家が保證する。而して生產費の無軌道逸脫を豫期し原價計算の方法を採用するのである。

原價計算は企業經營能率の增進に寄與するところ大なるは言ふ迄もなく、同時に適正價格形成上の須要條件なるを知らねばならぬ。我が軍隊は昭和十四年軍需品工場事業檢査令制定で原價計算制を採用着々效果を收めつゝある。

つぎに軍需品適正價格構成の一要素として適正利潤を許容する。この利潤については相當に議論があつて創意と能率の素として之をある度合自由に放任せよと主張する向もあるが、さやうにすることは戰時統制の一角に瑕瑾を挿入するものであり且つ軍需品價格に投機分子を加へるものであるので斷然かゝる見解は取り上げられないのである。併し生產費と適正利潤の保證を受ければ、その點に生產が足踏みする惧れはないが、尙他に企業家に何等かの刺戟を與へないではたゞ愛國心鼓吹だけでは叶はぬ場面は起きないだらうか。

之に對し政府は報奬利潤なるものを考へ出したのである。乃ち生產者の勤勉と創意工夫に對し特別利潤を附與するのである。どう言ふ時に特別利潤が考へられるかと云へば、大體或る特定期間に實生產者が命令生產または標準生產を超えた場合、または特定軍需品の生產に當り原料使用量を標準以下に止めた場合となつてゐる。換言せばある工場が生產原價を低下し得たり、製品品質を標準以上に高めたり一定期間の生產規定を超えた場合にはそれ〴〵報酬利潤を以つて酬ひられまたは他の國家表彰の方法がとられるのである。

而して戰時適正價格なるものは必ずしも單一價格ではなく、同一品製造が工場を異にし生產費に差ある時は、その儘差別價格を適正とするのであるが、其の理由は戰時の必要上不能率工場をまで動員するので最低能率工場の生產費を基礎に定められる價格を優良能率工場にも充當して單一價格制を確立せんとせば、後者工場の利潤のみ莫大なものとなり、戰時經濟に最も恐れられる投機熱と、利潤の不公平を招發するからである。

第四章　國家計畫經濟

公・私一元の發足點

新しい經濟理念は國家の大きな役割を想定する。個と全とは卽ち一なりの思想から發足する新世界觀、我が肇國の精神の結晶するところ、文化であれ、政治であれ、また經濟であれ、あるひは信仰に至るまで國家を中心に諸々の行事が進められるのである。個を滅し自由を葬れと言つても個の無視、又は自由から一直線に奴隷になり下れと命ずるのでは毛頭なく、公益優先の爲に個の犧牲や、國家至上權利に對しては自由や私益も擲ち去つて、偏へに、天皇に歸一し奉れと言ふのである。

國家が優先する考へ方は、どちらかと言へば議論になつたり、反對原則の構成を許容するものではないので、世の創め、人間社會生活の始めから國家又は原始團體の利益・幸福が優先し、民衆はその構成分子として國家又は團體に歸一すると納得するところに特長があるのである。それを近世社會學や哲學などが個人主義とか功利主義などを說くに至り、政治學、經濟學にもそれがとり容れられて其の制度化を主張するやうになり、現在ではさうした迷路的風潮を打ち消す爲に、公益優先とか全一主義などが說かれねばならぬ事となつたのである。

人間の社會性はアリストテレスを俟つまでもなく自明の眞理であつて、もし後世の學者等がむつかしい解析論などで眞理の混迷を招來しなかつたならば——國と國民とは不可分であり、國の生命と個人の生命の一元化を想ふ事こそ世界の常道でありそれが人間の必然であると斷言するのは、獨斷でも獨善でもないのである。

皇道經濟學の發足點は如上の見解から歸納して國家と個人の一元から始る。個卽全の思想・公私益の一元。君と民の一如一心てふ基礎觀念の昂揚するところ皇道的大道の展示となるので、國家の計畫を直接・間接一應之を請けると言ふ態度が個人に要求されるのである。併しかゝる太い線で國民個々がゐても國家の機關が專制的であつたり恣意的であつては中世紀以來の歷史をそのまゝな混沌たる社會の再現でしかないではないかと反問する人もあるが、それに對して私は新しい世界はより高き道義に黎明するのだと答へるのである。

國家計畫の理論

何でも國家が優先すると言つて、最少の國家干涉は最良の政治なりとした舊來思想の反動見たいに矢鱈國家の容喙を是認するのではない。政府に依つて代表される國家の側からしても政府を構成する政治家に賢愚の別あるも考慮せねばならず、爲政家が勢に乘じて恣意的行動に出ないとも保證出來ず、從つて觀念的國家は惡を爲し謬りを犯し得ずとして、其の意志代表機關たる政治家にも可成り惡を爲さしめざるための規矩標準を與へねばならぬのである。そこで國家の經濟計畫には國家政治の命ずるところに從つてそれ〴〵原則なものが考へられるのである。卽ち國家計畫經濟の分野に於いては其の必要なる規矩を經濟學が分掌するのであり、新しい國家觀・世界秩序の要求する經濟學は自然、舊來のものと面目を異にするところあるべき筈なのである。

國家經濟計畫なる行き方を是認し、その計畫に指針を供する經濟學ならば、經濟學に地域的境界を認めるものであり歷

史性を加へるのであるから、獨逸の國家主義歷史派經濟學と同一ではないかとの疑問が起るのであるが、私の國家經濟計畫なる觀念は世界の通念的原則として取扱はれ得るもので、洋の東西、時の古今を問はず、一國家經濟計畫に含む公則は時間と空間を超えて不變であるべきである。たゞ經濟計畫の內容を形成する經濟政策の分野に於いては、國境を認め歷史を考察するのであるが、それあるが爲に毫も國家計畫經濟の世界性を否定することとはならないのである。

國家計畫經濟と彌縫的社會政策

國家が支配下地域全面の經濟計畫を樹立するのは、國家の綜合的政策に順應し國家必要の根本を見詰めつゝ行ふのであつて、在來企てられた制度のやうに缺陷を見付け次第その彌縫的工作を施すものと同一ではないのである。十九世紀の半ば頃から漸く擡頭し來つた資本主義產業組織の缺陷が恐慌の經濟社會を作り上げたのに氣づいた當時の政治家及び學者達は、ジョン・スチュアート・ミルを始めとし社會政策なる手段を編み出し、社會の聲を片つ端から修理しようとし、それに依つて彼等の完全無缺と考へた經濟制度を辯護し通せると考へたのだが、たゞそれだけでは次から次へと發生する經濟的社會惡をどうする事も出來なかつたのである。

社會政策學會はシュモラー博士などの主唱で獨逸に生れた。我が國でも福田德三博士などに依つて始められた日本社會政策學會が西洋模倣の經濟惡社會惡の矯正に乘り出したのであるが、抑々資本主義に內包し自由主義に煽りを喰つた經濟組織が產んだ缺陷は一時的な又は局部的な彌縫ぐらゐでは如何とも出來ず、現代に及んで全一的經濟の呼び聲高く、玆に新經濟の機運は熟して獨逸や日本で全體主義又は皇道主義經濟學の興起となつた理由である。

國家の指導的役割と保護的態度

觀念的に國家の經濟的役割を嚮導的と保護的とに分ける事が出來る。前者を積極的後者をば消極的と別名しても差支へないのである。卽ち國家が立案し、國家が產業を始め、國家が國民經濟生活に嚮導的役割を演ずるのが積極的活動であつて、明治の初期、我が經濟生活の著しく西洋諸國に後れたるに氣付いた我が邦の先覺者等は政府を驅つて、遮二無二新企業を起さしめ民業をして纏ふところを知らしめたのであるが、之等は國家の積極計畫の好適例として擧げる事が出來るのである。

經濟の保護的一面は政治上警察制度と相通ずるものである。既存の善良なる風俗及び社會秩序の維持を目的として警察行政の存在するが如く、既設經濟制度を育成しそれを助長し、產業の關係を調節するのが、國家經濟計畫の消極的一面なのである。

國家經濟機構に如上の分析方法を充當して見ると、新設の商工經濟會及び統制會などの大部は消極的國家經濟計畫であり、各種の營團や國策會社などは積極的性質を多分に含むと見られるのである。以上二種の經濟機能は社會政策的な彌縫ではなく、根本的に自由主義に代つて登場せるもので、丁度一病人が藥餌に親しんで辛うじて健康を維持するのと、同一人が體育鍊成に依り身體の再建に成功せるとの差が存在するのであり、此の點に學徒の注意を促さんとするものである。

國土計畫

國家の國土計畫は經濟面の專有機能ではない。併し實際生活に於いて國家が土地を基礎とする計畫を樹てると言ふ時に

は、主なる目的物は經濟の面にのみ存在するやうである。例へば國家が港灣設備を國防上・經濟上の要件を考慮して整へるのも、某地に鐵道を敷設し、何々地に製鐵所を置き、工場の地方分散を計畫し、發電堰をいづれの地方に造營すると云ふに當り、その背景には經濟的計畫の含まれないものはないのである。

國土計畫は利潤追及の舊經濟思想とは相容れないのである。國土計畫は一面產業立地と併進するが他面それと背馳するのである。產業立地と云へば、原料を考察し、市場を研究し、燃料の供給源を見、勞働の所在などを念頭に置きそれ等諸條件の具備又は具備に近き地點を立地條件とするのだが、國土計畫では、先づ國防上の觀點から工場の疎開を圖らねばならず、人口の地方分散を企圖せねばならぬ。果して然らば、製品の市場的條件と勞働力の源たる人の條件についてだけでは以上兩計畫は相對立する譯である。卽ち國家經濟計畫に於いて國土計畫は工業立地計畫に先行すると言へるのである。舊資本主義制度下では立地計畫はむしろ完全に近く推し進められたのであるが、將來の經濟制度は國土計畫の承認なくては工業立地も、商業計畫も不可能となるのである。

近來吾等の話題となる廣域經濟なるものは國土計畫經濟なのである。ブロック經濟と廣域經濟とは稍々異るところがあるが、兎に角ある中核國家の經濟計畫が押し擴げられて行くところに廣域經濟があるのである。我が日本の國土計畫は時代の必要に促されて登場し昭和十六年九月に國土計畫設定要綱なるものが發表されてゐるが、要するところ狹隘な本土を有する日本は、日滿支を打つて一丸とする經濟計畫を樹立し、之を南方諸地域に及ぼし、吾等の至高目的である高度國防國家と、其の中に安居樂業を營む東亞民族を包有するやう設計されねばならぬのであつて、ひとりかゝる經濟計畫は向後、日本のみと限らず世界各地に意圖、創始されると想はれるのである。

日本が必要とする國土計畫を大雜把に書いて見ると、先づ我が國が四邊海に繞らされてゐると言ふ點、雨量の多き事、中央を横に山脈が走る特異點、地下資源は多種に亘るが其の量尠少なる點、人口稠密な點、天災地變頻發、國民の勤勉、その旺盛なる愛國心などを稽へ然る後に、工業立地も國防經濟も計畫されるのである。之を國防的見地からすると、我が國は海に近き爲國土は空襲に晒され危險なるが故に工業の分散が必須條件となり、港灣の設備亦同一な考慮が拂はれねばならない。依つて重工業及び化學工業は滿洲又は他大陸地方への移動計畫があり、既に一部分の實行をさへ見たのであるが、同時に人口資源と水力電氣の天惠の爲に一部精密工業と消費財工業の內地抑留は當然の事であり、殊に國防軍の溫床として、國防を主流とする國土計畫經濟はその舞臺を日本本土に需めねばならぬのである。

我が邦ではひとり昭和十五年九月の國土計畫設定要綱だけでなく、矢繼早に日滿支經濟要綱を制定、國防を主とする經濟態勢を整へ始め、以つて國家百年の計を樹てたので、吾等は大東亞共榮圈國土計畫の經濟理念が、更に、世界の他地域の同樣なる計畫の成功と相俟つて經濟理論上の一大原則として恒久化せられる事を惟ふのである。

重要產業に對する國家計畫

私は先に國家經濟計畫の積極的一面と消極的一面が觀念的に考へられると言つた。國家が主動的位置に立つて產業を營み又は產業に關與する行爲が積極的行爲であるのは言ふを俟たないところであつて、皇道主義又は大我主義の經濟下にあつては國家の左樣な行爲は極めて強度に發動する事を想定し、それを是認するのであるが、今大略ながらそれが如何なる形式で如何なる方途をとるだらうかについて說いて見よう。

先づ國家の經濟的積極行動として重要產業の國營又は國營に近き强度統制が考へられるのである。卽ち近時登場し來れる經濟界の寵兒營團組織、又は重要產業統制會制度等を通じて國家意志が產業の上に行はれるのである。この他我が國に

は國營事業として鹽專賣、煙草專賣及び米穀專賣に見る如き國家產業計畫の強い發現があるのである。更にまた、日本發送電會社の如き民有國營形態の經濟組織が國家の綜合的計畫形態として舞臺上に脚光を浴びてゐるのである。吾等はこれら諸々の產業の分類及び研究については本書第三部企業形態の章で細論するつもりであるが、兎に角國家計畫は國家重要產業と不可分離の關係にあるのが今日の經濟秩序である事を爰では記憶して置きたいと想ふのである。

國家計畫が國家の重要產業を一貫するのは經濟學上の一大法則として是認される時代の登場は既定の事實であるが、然らば其の重要產業の內容を爲すものは何であらうか。吾等は今それについて研究の歩を進めようとする。卽ち重要產業は、（一）國防的見地からする主要產業、（二）國民生活の基本的消費品產業の二大種類から成り立つと思ふのである。更に細別して研討すれば昭和十八年春期に開催された第八十一帝國議會で定義されたところの製鐵、機械、航空機、造船及び石炭等の事業は卽ち是で、それに軍用非鐵金屬、自動車工業も重要重工業なのである。民需的重要產業と云へば米、麥、味噌、醬油、燃料等の製造又は配給を擧げる事が出來、また別に鐵道運營、海運經營、及び國家的土木起業もまた重要產業として國家意志の濃厚に加はるべきを要請されて然るべきものなのである。

一概に國家意志の產業に加はる事を是認する態度を執ればとて、吾等は遮二無二以上のやうな事業又は企業の國營化を實行せよと勸奬するのではなく、時と環境とに充分なる關心を拂ひつゝ進むをよしと考へるのである。たとへば之を我が邦の經濟に當て嵌めて見て、あるひは營團、あるひは既存事業の統制又は國策會社及び國家の專賣と云ふやうに、夫々細心の注意を拂はねばならぬのは勿論であるが、政策學的に考へるならば、重要產業企業は國有國營、民有國營の二形態を最良なものと私は信ずるのである。その理由は企業の章に於いて說明する積りだが、玆で簡單に言つて置かねばならぬことは、かゝる根本的な企業形成の變化について何時も必ず提起される反對は、產業の能率低下と產業人の創意工夫減退と言ふ事なので、それについて私の解說を以下に書いて見る。

政府事業に能率が伴はないのは悲しむべき事實である。併し新しい皇道大我主義の理念に國民を導いて進むからには數年の中には、舊自由主義的經濟思想に育まれた吾等時代の人と新人經濟家の間に大なる逕庭を見出すに至るだらう期待は無理とは考へられないのである。國家が巧妙な表彰方法に依り、同時に社會思想が物質的富にのみ憧憬を寄せないやうな環境を造り上げたらんには、能率も創意も全く新しい舞臺にあり得る旨は本書第一部に於いて重複述べ來つたところなのである。尙近來我が重要產業界に見られる如く、社長を徵用し、技術家を擧げて國家の官吏とし、又は國家の顧問、囑託として重任を負はしめる場合、官吏も民間人も共同責任であり、共同榮譽を擔ふものであるが故に官吏なりとて別に怠惰とは限らない新局面、新事情が展開し來るのが考へられるのである。（能率より至正配給の貴ばれる時が來る）

國家の中小產業統制

國家の統制經濟は重要產業の上に動いては國有國營となり民有國營となり、營團となり統制會となるのであるが、爰に重要產業ならざる主として民需財に關する中小產業は如何なる狀態のもとに國家と連繫するであらうか。あるひは舊經濟秩序下の自由放任を原則として可なるか。私の見るところでは皇道主義、大我主義經濟が全卽個の觀念に發足する理念から推し進めて、輕重の差こそあれ中小產業も亦統制され國家意志の透徹の圖らるべきものなるを言はんと欲するのである。

惟へば自由主義經濟は無駄の多い組織であつた。無秩序、無系統の生產は爲され、無鐵砲な配給網は張られたのである。生產過剩が何時如何なる狀態のもとに起るかなど全く知らずして生產は進行し、揚句の果て折角生產された財貨を燒き又

は之を海中に捨てねばならぬ醜狀を吾等の前に展開したのだが、以前の經濟界では二重三重に不用な配給機構は作られ、一國家の產業は數十萬の不用人員をそこに雇傭してゐたのであるが、之等は自由主義經濟下無計畫企業が容認されてゐたからであつて、新理念の經濟制度では斯かる無駄や不合理は排除さるべく意圖されるのである。

中小產業への國家意志滲透は、積極的に國家が產業を興し又はその增進、躍動を促すと云ふのではなく、むしろ中小企業の系統を正しその高度なる規準の保護を企圖する言はゞ親心の發露と見るべきものなのである。私は農工商の各章に於いて二度此の點を說述するのであるが、概括的にその中の小賣業だけについて言ふならば、之等に對する國家統制は自肅統制で事すむのであり國家は大綱を造つて產業人を整備統合し、衆者の生活向上を圖ると共に、消費者の側に立つ國民大衆をして安心して其の生活資財獲得に便益を得せしむる用意あるべきである。

卽ち商業について之を言へば、我が國在來の無秩序な配給系統は必ず大改竄を加へらるべき筈である。私見するところでは都市に散布するだゞつ廣き商業地域は商店の整備統合に依り其の數を縮少して、之を一ケ所又は數ケ所の中心地點に集合せしめ、市又は統制組合が適當にして見目よきビルデインングを提供する事に依り街の美觀をとり戻し、且つ統制監視も亦都合よく行はれるやうに仕組むべきだと思はれるのである。工業の場合に於いては家庭工業を家の所在地で營ましむるのは止むを得ずとしても其の製品に無軌道、無責任なものなきを期する爲一旦中小製造家達の工作品を統制會社又は統制組合に之を集めるか、又は製品の檢查制度を嚴重にして在來の散慢きはまる制度を改變し、同時に不用人員の整備を斷行して國家の勞務員としてより必要なる部署に振り向くるやう心掛くべきである。其の他農業に就いては自作農尊重、農業操作の機械化、農村人口維持など、國家計畫の極めて重要視せられるのであり今之を一々論述する場合ではないが、玆では農業生產は一面國家の重要產業として國民の消費財配給部面に登場し、統制株式會社又は食糧營團に對し主要課目となるが、他面農業企業經營は自治統制の一項目として取扱はれる氣運にあるやうである。

保險制度の徹底

皇道經濟學の理念は大我主義であり全一、一元である。社會連帶責任の觀念も取り入れられ間接直接の別なく相互扶助の思想が强度に機能する有機的經濟社會が想定されるのである。從つて斯かる家族的親密性を心とする社會は幸福を共にし不幸を共に悲しむと云ふ性質があり、東亞共榮圈は同時に東亞共苦圈であると考へられる所以である。

かゝる精神は近代保險制度の觀念であり、若し方法宜しきを得ば國家經濟計畫の中に保險の種々なる態樣を織り込む事に依つて多く社會惡の矯正、個人的不幸救治、ある場合個人の幸福增進のよすがともなり得ると惟はれるのである。

本項では、保險企業を論ずるのではなく、保險論を書くのではない。たゞ保險の精神は經濟生活に於ける人間の連帶性と相通ずるが故に、國と民とは卽ち一なりとする新經濟組織に於いては、よろしく保險制度の大活用を意圖すべき主張を一通り述べて置かうとするのである。

海上保險、火災保險は一人の危險を比較的多數者の間に分擔する趣旨から始る。生命保險は家族の不幸を社會で扶養し合ふと云ふ心である。たゞ實社會に行はれる保險は危險負擔者が營利會社であり保險が營利本位で行はれるが故に、其の精神の極めて倫理的であるに拘らず實際施用の點に缺くる憾（あるは是非なき事である。吾等が國家の經濟綜合計畫がもう少し保險の擴大を圖り國營としてその徹底化を圖つたならば、あるひは恩給制度、退職金制度をも含めた單純なる然も至平公正なる國民生活保證制度が生れるのではあるまいかと惟ふのである。

吾等の知るところ現在行はれる保險の種類は甚だ多い。海上、火災、生命保險の他に、傷害、病氣、失業、老年、盜難、徵兵、敎育等々がある。甚だしきに至つては歌手の喉が保險され、映畫人の眼球に十萬弗の保險が約束され、舞踊家の足に何千磅と保險の付せられたる事實がある。併し私の關心する保險制度はかゝる個人的贅澤保險ではなく、適度の生命、火災、海上は勿論なるが、それ等よりは寧ろ、國民傷病、定額收入、定業・養老保險を强調したいと思ふのである。

生命保險を國家企業としたい理由は、(一)生命保險の掛金のより低廉たり得る現狀に於いてそれを引き下げる事に依り此の制度の一層普遍化する事の望ましき故である。(二)生命保險の蒐集し得る掛金の莫大なる蓄積は、國家事業の愈々擴大されんとする新秩序下の經濟社會に於いて、國家の必要資金供給源として大なる役割を擔ひ得るからである。

而して傷病、失業保險の國營の望ましき理由は、國家が親として國民に臨む意味極めて濃厚に顯はれる一方便たるを考へられるからであり、「汝の運命は汝の手で拓け」と冷淡に構へた個人主義の時代から、協調、共働を主張する大我主義の時代に入つては、國民一人の悲しみは全體の痛みなりとの考へ方を引き伸ばしたところに、此の種の保險制度は極めて重要性を帶びて登場するのである。たゞかゝる制度の內容的研究については尙多くが學ばれねばならないのは勿論であるが、私は此の說の提起者として、先づ國家が半ば强制的に一定金額を國民の一人々々から取り立てる。その額は普通人生活を標準としたものであるべく、富めるも貧しきも必ず被保險者であり、國家が設定する失業又は傷病保險基金に積立金を爲す。此の基金の運營は寸毫の營利性をも容認するのでなく、ある場合には國家が補助金を與へて此の種基金の增加を企圖してもよいのである。

社會保險に就いては反對もある。政府が斯樣な些事に關係するのは不可である。社會保險は國民に依賴心を起さしめる。乃ち國民を怠惰ならしめ、貯蓄心を喪失せしめる。とかやうに言ふ向もあるのであるが、それは楯の一面であつて他の一面は國民生活の安定なる至大な利益あるを見ざるもの、丁度火災保險あるが爲に被保險者自ら家を燒く犯罪者のあり得るにも拘らず、火災保險が現代經濟社會に缺くべからざる制度となつたと同樣、あらゆる方面に種々なる保險の應用は、吾々の主張する經濟社會に重大な役割を擔ふものだと私は主張するのである。卽ち保險の心の擴充は一隣組の中にでも確保されて然るべき筈であるのである。

第五章　廣域經濟

ブロック經濟

廣域經濟はブロック經濟に淵源する。ブロック經濟とは何かと言へば、政治的其の他の理由で比較的相接近する國と國とが、經濟的に有無相通の關係で結ばれる經濟的了解である。ブロックを形成する國々は利害は一致するのであるが、製品生產財の相異るを常則とする。利害相通じてブロックを爲したものには一九三三年頃からの金ブロックがある。英吉利、亞米利加、和蘭、佛蘭西の如き金保有國が金本位離脫國に對して形成したところである。後英吉利は自ら金本位を辷つてしまつた。

經濟的有無相通を主目的としたブロックとしての代表的なるは、英帝國ブロックである。このブロックは一九三二年七月加奈陀オツタワ市に於いて開催された帝國經濟會議に於いて決定を見た英帝國ブロックの結成であり、多分に政治的自給自足を强調したもので、當時日本の受けた打擊は尠少ではなかつたものである。亞米利加はイギリスの此の政策に對して米洲善隣政策で酬ひたのである。この亞米利加の政策は一九三五年大統領自身亞爾然丁ブエノスアイレス市の汎米會議及び一九三六年、モンテビデオの汎米外相會議へのハル長官の出席とまで進展したが、眞にブロックらしい成果を示したのは一九三八年から始る亞米利加の弗外交行進からで、それまではたゞ掛聲だけの善隣外交でしかなかつたのである。併し米國志すところの米洲ブロックは今次米國の參戰と共に急速に進捗しつゝあるやうである。

日本はイギリスの帝國ブロックを座視してはゐず、日滿支の經濟ブロック結成を公言し着々と手を打つて出た。先づ滿洲に於ける計畫經濟が完全に本國日本の足らざるを補ふ目的のもとに、あらゆる角度から研究され、研究ずみのものは直ちに實行に移されて行つたのだが、更に北支に對する經濟提携についても深甚の注意が拂はれたのである。當時我が邦のブロック的意圖は、中國を含め蘭領印度とも平和の間に經濟的握手をなし、佛領印度支那をも加へた東洋ブロックを形成しようとしたものであつたが戰前つひに其の機は熟さなかつた。併し時の勢の赴くところ不思議なる「必然」が作用しその後東亞ブロックは、更に深く入つてフイリツピン、ビルマ、マライ、ニューギニヤを加へた廣域經濟を目標として進行するに至つたのである。

英吉利のブロック經濟政策は亞米利加に對しても痛手となつたのであり、其の他にも種々なる理由はあつたが、一九三四年ルーズベルト政府の金平價切り下げ斷行には對英報復の意味が多分にあつたのは否めない。殆んど時を同じうして日本の滿洲國建設の事あり、米國は反日本的腹癒せの考へもあり其の後矢繼早に對日經濟攻勢をとつたのである。乃ち日本商品に對する特殊高率關稅など一再ならず强行されたのであり、同樣な米國の反日態度は一九四一年十二月八日つひに其の大詰となつた次第である。

一九三二年のオツタワ帝國經濟會議は間接には今次世界大戰への原因をなす程にも大影響を內包したのである。卽ち其後の十年國際的惡意そこに胚胎し、國と國とがあらゆる國境的障壁を設けて相對立するに至り、我が日本は屢次英國の政策的惡戲にも拘らず、外國貿易の三分の二は米英及び其の屬領地依存であつたし、圓は英磅にリンクされたり弗に爲替率を一定するなどの關係上、一種の國際的屈辱をすら忍んだが遂に叶はず、先づ英米との經濟關係打ち絕たれ、のみち戰爭

をすら強いられるに至つたのである。

自給自足と高度國防經濟

世界各國が所謂アウタルキーを經濟的標語としたのは、その源を一九三二年のオツタワ帝國ブロツク結成に發する。獨逸はそれ以前ヴエルサイユ條約の不正を矯さんとして內に實力涵養の必要を感じ、自給自足の一歩を他より先に踏み出したのだが、その他の獨立國群は全く英吉利のこの會議に警鐘を覺つたものの如く起ち上つたのである。我が國が日滿支經濟の確立方針を樹立したのはそれが爲であつたが、其の他中南米諸國が、或は爲替管理の言ひ分のもと、あるひは外國貿易調整政策實行の必要を強調して起ち上つたのも、之亦英帝國ブロツク形成に契機を見出すのである。昭和十五年の日獨伊同盟以來日本は完全に自給自足體制を確立し、翌年の暮米英に宣戰した時には經濟的に何等異る國際政策をとるに及ばずして、ひたむきに自給自足主義の擴大と其の强化に邁進し來つたのであり、將來ともかかる時期の繼續が相當歲を閱するものなるを信ぜざるを得んのである。

自給自足經濟は一小國單位では不可能であるのは、凡そ一國が生存しその國民に安居樂業を供する爲には、あらゆる原料と物資とを需要するからである。殊に近世國家が國防上要求するところの資材、近世國民の生活上必要とする文化生活の物資は數知れざる程であつて現在地球上國を爲すどの國もが、總ての資材を自給し得るものはないのである。自然、數國乃至數ケ國の合衞聯合に依るにあらざれば望んで達しえられないところなのである。乃ちブロツクを形成する數ケ國の經濟的了解となるのだが、此の經濟的合衞はやがて高度國防國家への進展なくてはやまぬのである。而して歷史はこの點まで進んだのであつて、今次戰爭は米英の高度國防國家、獨逸を中心とする歐大陸諸國のそれ、加へて日本の高度國防國家が輸贏を爭つてゐるのであり、以つてブロツク經濟の當然の歸趨を如實に示したのである。

高度國防國家は政治的經濟的必然の發展であり、自給自足經濟組織を保護する役目を擔ふのである。而して此の兩者の綯ひ合つて止揚するところに廣域經濟があるのである。

抑々、高度國防國家とは何か。一國が他の一國又は一群の國家に對し自己の權益、面目を保つ爲と、國際正義防衞の爲に武裝して邊疆を守ると言ふ意味である。たゞここで使用する武裝には二樣の意義があるので、近代戰の武器に依るものと、自給自足經濟の確立に俟つ平和的武裝であるが、いづれ他の野望國又は變體國家の競爭から免れようとする他の一國又は數國の打ち樹てる政策の謂なのである。

吾が國の高度國防國家は思想的には米英の民主主義思想、北方に對する防共に處して造り就されたものである。而して政治的には米英の支那、滿洲に對する容喙を排斥するに端を發し、之を大東亞全域に及ぼしてアングロサクソンの東亞搾取の息の根を止めんために、一小島帝國の手は大きく動いて、終に大東亞民族の解放となり彼等の經濟的自主獨立を策するに至つたのである。

高度國防國家觀念は空間的普遍性を有するのである。米英の帝國主義的野望、その獨善的押賣り正義觀が絕滅せられざる限り、經濟も政治も武裝を餘儀なくされるものであり、その限りアウタルキーと國家武裝の觀念は持ちつづけられるのである。かかる觀點よりせば譬へ今回の大戰に終止符が置かれるともそれは他の國々の和戰兩樣の構へを打ち壞つ事とはならぬと信ぜられるのである。

勿論、戰鬪行爲の休止は一部軍需工業の緊縮とならう。併しそれは飽く迄緊縮であつてその全的停止ではなく、高度國防國家態勢に於いて、相當期間我が國及びその同盟國群、あるひは獨逸やその同盟國はアウタルキー制度の保持と其の生

成發展に邁進をつゞけるのであらう。

廣域經濟

廣域經濟はブロック經濟及び自給自足經濟の止揚されたものである。ある意味ではブロック經濟の一構成要素である政治的意圖を强度に動的ならしめるところだけに廣域經濟とブロックのそれとの差を發見すると言つてもよいのである。英吉利の場合に於いてはブロック即ち廣域經濟であるが、日本は日滿ブロックから日滿北支ブロックに進み、ついで廣域圈作成に進展したのであり、戰局半ばに亞米利加はその手を南米に伸ばす事に依り自己の廣域地帶を建設せんと焦りつゝあるのである。

大東亞共榮圈と稱する地域は濠洲、印度、ニュージーランドを含めた地政學上の一地帶を包含し、その國々は各々獨立を保有しつつも倘道義に立脚した連環關係に立つのである。ブロック觀念の經濟關係では有無相通を主とし利益の消長で親疎の度を決するのだが、大東亞共榮圈內諸國の親疎は利害で一二になるのではなく、道義に立ち政治、文化、經濟等の國家生活が相互扶助的であり、連帶責任的である自覺に左右されるのである。大東亞の廣域圈內では權謀もなく、術數もなく搾取掠奪など倘更あり得ない。日本はその中核指導國家として、兄であり弟たる關係で構成員たる國家群に臨み、教育、保護、啓發、開發など總ての面に至正公平を期するのである。かくて高度國防國家への延長となり、自給自足經濟の確立となるのである。昔韓文公が指導は仁也と言つた通り大東亞共榮圈に對する吾等は仁を心に銘記するのでなくては今次の大業、佛造つて魂を容れざるものとなり終るのである。

さて、日本が意圖する廣域經濟圈は具體的にはどんなものになるのか。本書を成す當時には大東亞共榮圈はまだ建設中であつた。指導國日本はビルマの獨立を扶育し、フイリツピンに獨立を與へ、中華民國と同生共死の同盟を結び、ジヤワ、ボルネオ、セレベスと東亞民族解放の業着々と進捗しつつあるが、まだ印度と濠洲、新西蘭は敵米英の策動地として殘り、東亞の反逆者たる烙印を捺されても蔣介石の重慶政權なるものはいまだ蠢動をつゞけつゝあるのである。併し大勢の赴くところは如何ともすべからずして是等の故障も大東亞共榮圈構成の道筋に餘命幾何もなく、やがては地政學的公式に依る廣域圈の明瞭に浮き上るのは想見されるのである。乃ち印度、濠洲、新西蘭を含めた大東亞の出現となるのである。

大東亞共榮圈

大東亞共榮圈のあるべき姿を少しく書いて置かう。それはやがて世界の他の共榮圈と相通ずる一種の規準となる運命のもとにあると想はれるからである。先づ第一に圈內諸國間の紐帶であるが、それは東洋文化が世界に誇るところの精神的なものである。他を虐ぐる事なく、己を殺して仁を施せと云ふ愛他的博愛的なもので、中國に於いて同甘共苦と言はれるとこゝの精神である。卽ち道義に基く國家群の共存共榮關係であつて、恐らく永劫に生き拔く眞理だと想はれるのである。つぎに共榮圈諸國の物質的、經濟的紐帶は各自の長を攝り短を補ふの關係に立つのである。

共榮圈の經濟は計畫にもとづいて行はれるものであり、計畫の本源は中核國日本に始るは論なきところである。卽ち日本の放射する國土、立地計畫が基準となつて各構成員國家の經濟的活動が起る仕組である。例へば金融は日本銀行を中心として圓が貨幣單位の標準となる。各國は之をパーツと呼び、ギルダー、ペソと稱しても要するにそれは圓との等價を內容とするに他ならないのである。產業開發に際しては共榮圈全地域の高度國防國家の必要と資源の立地的條件とを睨み合せて仕組まる可く、交易は各地の長を以つて短を充たすの趣旨に則り商業主義の國際利己主義に墮ちてはならないのであ

る。かくてこそ各國その所を得、各人その生を樂しむので吾等の前途に喜悦と光明とがある譯である。

見よ、滿洲國を。建設十餘年にして東邊道は吾等に分鐵六〇%含有の良質鐵を與へるではないか。大豐滿ダム、大豐ダム一部完成して各々數百萬キロワットの電力を與へ、日本が磐土頁より抽出するアルミ捻出を可能ならしめてゐるではないか。眼を蒙疆に轉ずれば龍烟鐵鑛があり、中支には大冶鐵山があり、海南島は鐵と輕金屬の多くを吾等に約束するやうである。佛印のホンゲイ炭、その硅砂、フイリツピンの砂糖に麻、ジヤワ、ボルネオの石油に砂糖、マライの錫、ゴム、スマトラの石油とゴム、ビルマの石油、鉛、銅、泰、ビルマ、佛印の米など、其の上是等諸國には未開發資源山積して存在するのである。加ふるに印度、濠洲の經濟的實力と可能力を以つてする。共榮圈が廣域圈として活きる力は、在來支離滅裂であつた國々の算術級數的總和ではなく、幾何級數的飛躍を意味するのである。

依つて知る。廣域經濟は將來の日程に上り、それぞれの廣域について民その生を樂しみ、延いては他圈との間に圈內部と同樣な理念の生成發展があり、高度國防態勢の必要すら撤去されるやうになれば、そこに生れるものは八紘爲宇であり、世界の渾然たる家族主義實現であり、幾多の社會改良家、詩人、文人の夢みるところの理想境實現である。されば廣域經濟はその彼岸への階梯にしか過ぎず、そのあとに尙一段の高い目標が浮び上るのであり、吾等の經濟學はひとり數字と物質現象の學だけではない使命がここで充分感得されるのである。

第六章　消費

經濟學上消費の位置

經濟學は慣例に依れば、生產、交換、分配、消費と分科される。其の中消費は全く取り外される場合も尠くないが、それは要するにある學者が消費に學問はないと考へたからであり、生產と分配だけに重點を發見するからである。

併し消費經濟の忽せにすべからざるは言ふまでもなく、見方では消費する爲の生產であるので消費先行を考へる人々もある。學者ではジエボンスやバンフイルドなどの名を擧げることが出來、實際家として著しい人物には我が二宮尊德がある。國家計畫の先行に重きを置く現代統制經濟では、消費計畫が立つて生產之に準ずると考へられないでもない。殊に臨戰經濟では消費的必要が先づ研究され、それから生產配列が布かれるのである。然り一國の綜合的經濟計畫は、國家の必要と國民の消費の概算を前提とするのである。私經濟に於ける入るを圖つて出づるを制するよりは、戰時には出づる絕對量を知つて入るを畫策せねばならぬのであつて、此の意味で一國經濟では消費先行が原則であり、私經濟では先づ自家收入を以つて消費を規正せねばならぬのである。

乃ち消費と生產とは表裏をなすのであることを知るのである。吾等の經濟生活が既に營まれてゐる現在に於いて生產も消費も原因となり結果をつくり殆んど終りなく始めを知らざる環の如き作用を爲しつゝあり、生產あればそれの需要必ず

起り需要あれば生産之に刺戟を受けて更に生産すると言ふことになる。生産者側から新創意があつて需要心を煽り從つて生活の向上があるので生産こそ經濟の中核たるべしと主張したり、消費こそは人生の凡てである、消費なきところ生命なく況んや生産なしなど云つても、そのいづれもが片手落ちな謬論であるのは說くまでもない。かう見ると經濟學が消費の研究を怠つては完全な體系を爲さずと私は云はうとするのである。

然らば經濟學上消費は如何に定義されてよいか。私は之を「經濟財を人生目的に使用することなり」と言ふのであり、この私の定義の經濟財には奉仕を含むのは勿論であり、また經濟財を經濟價値と言ひ代へてもよく、使用は必ずしも消耗でないことも知つて置かねばならぬ。つまり經濟財が國家又は個人に依つて最後的に使用消耗される意味である。一家一人が家具を需めたり什器を購つたりすることは消費であり、使用であるが消耗ではない。併しこの場合の使用は最終的物の落ち着きであつて再生産も再販賣もそれから惹起され得ないので之は完全な消費である。

然り、此の最後的使用が消費であり之を學者は終局的消費と呼び、それに對して生産的消費なる區別名を造り出した。而して生産消費に意義づけて時間的經濟財効用と云ふ解釋をなしたのである。

つまり一定經濟財の終局的使用でなく時間的に生産の爲に使用され、また同様の使用が繰返される意味であり、物の消滅を意味しない。平たく言へば再生産用機器の使用は消費ではあつても消耗ではなく、之を呼んで生産的消費として、一般消費の研究から此の分だけを除き去るを普通とするのである。

經濟學上消費の研究が生産より後れたのは前述の通りであり、それだけ新しい體系を樹てる爲に掣肘される何物もない。依つて私は皇道經濟學を編むに當つて、第一に消費を企業に先立たしめ、それから消費の課題について考へて見ることとした。つまり課題が決定されて初めて研究之に從ふと思ふからである。

消費の課題

嚴格な意味で前項の生産と消費の位置は消費の課題である。その他差詰め常識的に考へて一家一私人の貯蓄は消費經濟の中に取扱はるべきかどうか。生産機構が生産勘定の中から將來の生産に充てる貯蓄を爲すのには問題はないが個人所得を處理するに當り家計費と貯蓄とを一しよに消費勘定に盛つてよいかどうか。確かに將來再生産に充てられる資本の爲の貯蓄は終局的消費でないのは勿論であるが、併し終局的消費基金から生れる貯蓄に關し部分的研究がそれに觸れることは當然あり得るので、私は貯蓄を消費と同じ章で語る態度に出るのである。

同時に經濟學に企業の部で研究さるべき配給組織についても消費經濟の冷眼視するを許さざるものあり、自由主義經濟が根柢から崩壞し去つた現在、而も世を擧げて臨戰態勢の配給に服從を餘儀なくされる現在、吾等が原則的に消費に對應する新秩序の配給は如何に編み成さるべきかに關心するのは、消費經濟研究上至要必須の問題であるのである。

消費の精神は人間としての文化生活の達成にあるが人生の頽廢的爛熟せる米國式、夜の倶樂部的自墮落であつてはならず、從つてそれに呼應する配給は商業主義であつてはならない。ただ儲かりさへすれば何を賣つてもよいとするのではなく、人々に合理的文化生活の爲の經濟財配給を保障せねばならぬのでその爲には統制下、理路整然たる市場系統の整備を冀望せざるを得ない。衞生的であり、美觀的である市場に於いて吾等の消費品の取扱はれる時、政府、消費者、中間配給者の三位一體が實行に移される意味でもある。雖然紛然たる現在の配給は消費の上から見ても改編の運命にあるのである。乃ち玆にも消費經濟の課題がある。

消費と限界効用

消費に限界効用の理の働くのは否めない。人間の慾求はある意味では無限であるが、併し一つ一つの財に對しては一定度一期間の使用で飽きて來る。三碗の御飯は絶對に必要でありおいしく食べ終るが第四碗は稍々飽食の氣味であり第五碗に至つては全く無用を感ずるに至る。夏の日の氷水または冷し珈琲などについても同樣であつて一杯二杯と次第に効用遞減し終に効用限界に達するのである。ひとり食料だけでなく他器物でも均しき理の働きを見るのである。玆に自轉車の例を擧げよう。一家屋に一臺の自轉車があり主人用として便宜至極である。二臺は家族一般の爲とて購はれたが第一の物程重寶さがない。第三に至つてはあるひは世間體のために買入れられるので、あつても無くても良い程のものであり効用は全然限界に達するのである。

かくて人の慾望は其の限界に達して更に他の財を需めて移行するのであり、消費は斯くして一般的に物の上に行はれるやうになる。限界効用方則が働いて人は異る物を慾求し、この慾求の故に生産の興隆ともなる。消費の限界効用が經濟に作用するのはこの理に依るものであつて、人の家に種々なる食品が食卓を賑はし、家具一通り整へばピアノを欲し、電氣冷藏庫を購ひ、自動車、ラヂオを需めるのは全くこの限界効用原理の存在するためである。

消費實踐上の法則

吾等人間が消費經濟を行ふ上に何等かの一貫せる方則があることは考へられるが、それが何であらうかは見る角度に依つて異るのであり分析、分類の仕樣では其の類極めて多いのだが私は其の中次の如き數個だけを拾つて見ることにする。

一、消費の心構へ
二、必要消費と奢侈消費
三、國民所得の消費
四、實質銀と名儀質銀
五、生活向上の傾向
六、營養と消費
七、所得增減と消費の動向
八、消費と生産

消費と貯蓄

其の一消費の心構へは皇道經濟の心的現象に部類づけられるのであつて社會全一、大我觀念に依る言はば個卽全の理念に立ち、消費が單に收入に委せて購ひ且つ消耗する意味でなく、自己の一擧一動が如何に他に影響するかを稽へ然る後消費することであつて、放埒なる生活の許されざる道義的消費規正が玆に造り就されるのである。かかる觀點に立つて節儉が美德となり、奢侈、贅澤が喜ばれないので消費經濟に生命の通ずるものあるを知るのである。徒らに贅澤品消費數量の大なるを誇る亞米利加の如き如何に一ケ年自動車の生産四百萬臺を喜んでも一度び戰爭に突入しては其の何パーセントしかを戰力化し得ず、國家は必要以上の消費財の存在に依り却つて亲される惧れすら多々あるのであり、消費を營むに當つて持つべき心構へは卽ちこの點を言ふのである。」

元來、消費經濟の單位は私人にある。生産消費を除外する本章の取扱ふところは個人消費に限定される理由である。從つて入るを圖つて出づるを制する二宮翁の經濟理念の徹底はやがて消費經濟の全貌となるのである。經濟學の需むるところは、(一)奢侈財の消費傾向、又は(二)國民生活必須品の消費傾向、それが人間生活に齎す効果の程度などであらう。同時に(三)個人收得と生活費の關係は絶えず取上げられ、研究されねばならぬのである。

個人的として又は社會的と考へてもよいが、財を消費するに當つて必須財と奢侈財の別を識別することは極めて重大なので少しくそれに觸れて見よう。一體必須消費とか奢侈品消費とかは何處に境界があるのか。昨日の硝子品は贅澤であつたが今日では必要缺くべからざるものである。甲の人に自動車は全く不用品だが乙は之を必須品として保險の勸誘や集金の爲に利用してゐる。其の他同樣の例はいくらでもあるが、要は贅澤品と必需品の別は相對的である。とかやうに境界線を見れば區別不明となるが併し大體に於いてダイヤモンドは不必要であり、雨傘は必要だと云ふやうな區劃は判る。時の差と場所の異るを認識してそれぞれ普通人が生きる標準を見定めそこに一線を劃して、奢侈と必需の別を設けるのは左迄むつかしいのではなく、且つ此の區別を實際的政治立策の基礎としても何等の不便をも感じないことを信ずるのである。

國民所得と其の分配は消費經濟研究上の大要點である。消費基金としての所得はひとり生産上有償的所得だけでなく、官吏、公吏の所得も亦消費されるのであり此の意味では國民所得の一部を成すのである。生産經濟から由來する所得は地代、利子、賃銀、利潤だけであるが、消費經濟では前述の否生産方面の所得も亦考慮されるのであり、玆に明らかに吾等は否生産必ずしも否經濟ではなく、官吏も役者も、僧侶も、無職業者も少くとも消費經濟の面では經濟學研究圈内に入り來るを知るのである。

國民所得を査定するに主觀的方法と客觀的手段がある。前者は所得稅を基礎に計算するのであるが、財政の實際問題として全國民が所得稅納入者ではなく相當部分の免稅者があり、加ふるに國民の間には不心得者も相當あつて脫稅行爲に出る。ある稅務當局者は商工業所得に五割の脫稅があると推定するが、果して然らば如上免稅と脫稅の爲に國民的所得は主觀的には正確な數字を發見し得ない。然らば客觀的にはどうして國民所得の答が得られるか。之も甚だ不正確なものなのである。先づ農業工業の生産總量——總額を見出す。此の方は各國共明瞭な政府統計があり發見に苦しまないで良いが、流通産業である商業、運輸業、金融業の業績は獲難いものがある。併し之等業種の取扱總額と收益を求めて所得を概算し、それに加へて官公吏、自由業者の所得を求めれば、客觀的國民所得に一部主觀的方法を混淆したものとなるのである。

國民所得の客觀的主觀的双方とも算出方法について所得の重複に難點があるやうであるが、私は大體の上に消費基金の量を探る意味に於いて其のまま受け容れてよいと考へるのである。

國民所得について考へなければならぬことは其の總計が大なれば福利民福が向上するかと云ふ點にある。亞米利加の例に見るならば、千三百億弗の所得を有する一九四三年は果して七百五十億弗の一九三九年より國家の信用が加はつたか。又は一九三三年の國民所得四百億弗に足らなかつた亞米利加國民は一九三七年の七百億弗の時代より世界に信を繋ぎ得たかどうか。經濟學的に考へてそこに一貫せる方則を求めれば、私は國民所得の大は民生の幸福を增す傾向は勿論あるが、それにもまして一國民所得の公正分配が國利民福のほんたうの楔子であるを言はんと欲するのである。經濟政策の要諦正に玆に存するのである。

個人所得かくして保證され、消費財配給の公正無私なる統制行はれて初めて民各々其の所を得るのであつて皇道經濟は國民所得の大と共に其の公正なる個人への行き渉りを庶幾するのである。

具體的課題の四、實質賃金と名目賃金の研究は消費經濟の上では是非知つて置かねばならぬのである。賃金の貨幣名目

が如何に高くあつても物價高がそれ以上であれば賃金は高いとは云へないのである。假りに五年の間毎月二百圓の所得を獲る人がある。もし物價指數が此の期間同一であれば問題はないが、然らずして一割の騰貴があつたとせば、名目上二百圓を受取るとしても、此の所得者の實給金は一割減の百八十圓と同樣と言ふ事になる。亞米利加の調査であるが一九二七年一市民の生活費と所得の比例を一〇〇とし、之を同じ標準の生活を爲す他國人の消費力に比較して見ると、加奈陀オツタワの一市民は八六、濠洲シドニー人が七六、ロンドンの一人が五七、伯林が三五、羅馬人が二九、ブラッセルで二六と云ふ事になり、また時間的調査では一八九〇年亞米利加人一人の實所得九五は一九二四年の一二二となるなどの調査となつたが、かうした實例に依る實賃金增加傾向査定は以つて消費經濟の進路を示唆するものであり經濟政策に依つて大過なき指針となるのである。

消費向上と體位低下

吾等は今國民的所得の增加傾向を知り、更に賃金實收の向上を例證したが、今度は其の動向が消費の上に大なる影響を見る事實について調べて見よう。卽ち明治三十年に一般國民の殆んど知らなかつた牛酪製品は今では都市青年の間に旺んに愛用されるに至つたではないか。菓子青果の上に現はれた需要や、デパート樓上での衣類の賣れ行きが如何に五年毎に又は十年毎に變り行くことか。而して如何に其の變化が常に向上增大の一途を辿り行つたか。是を見ても消費の退化は經濟學の原則とはなり得ないのである。ただ併しかかる向上にも拘らず、無用に消費しあるひは不必要に消費する傾向は經濟財の增加と富の增加に伴ふ他の一面であつて爲政家の見遁してはならない點である。

同時に消費向上に伴ふ第一奇現象は國民體位の低下である。我が邦でも昭和十二三年頃までは青年の健康と體位不良の傾向に深甚なる注意が拂はれ、ある方面に憂慮の種となつたのであるが、同じ事實は他の國に於いても實證されるところであり、食物や衣服は向上してもそれがある程度文明病的頽廢の意味であるとすれば、此の際消費經濟政策の手加減がそこに要求されるのである。

消費の向上と體位の低下。第二次世界戰は果して之を變革し得るや否や。また他の一面に消費向上に伴ふ文化的向上が傳へられる。併し文化的向上と反比例に國民の體位は減退する。之も亞米利加の例であるが一九一五年に投ぜられたる諸文化施設費五億五千九百萬弗が一九二六年に二十八億六千萬弗と增加してゐるにも拘らず、同じ時代に衣類生産は增加せず極めて消費の合理性を示した譯だが、體位低下傾向は依然としてつづいた。我が邦では支那事變以來當局の撓まざる努力に依り確かに體力の向上となつたやうだが、尙より良き結果に向つて國民の總進軍が要請されるのである。

一八五七年獨逸のエルンスト・エンゲルは消費經濟上の四法則なるものを發表してゐるが、是なども經濟學の關心事でなければならぬ。卽ち

一、收入增加すれば食糧費比率は低下する。
二、收入の如何を問はず衣服料は略々同一である。
三、收入の如何に拘らず家屋費、燃料は略々同一である。
四、收入が增せば雜支出の比率は增加する。

以上の信據性につき未だ我が邦に何等發表されたものを知らないが、若し無いとすれば一國民度の動きを知る爲に我が國にもこの種基礎調査の必要があるのではあるまいか。今玆に吾等の常識觀測を書いて見れば、其の第一は我が邦にも當て嵌ると思ふ。收入が增加してもさう人の胃腑が多量を要求する譯もなく、急速に美食に焦るとも考へられないのであ

る。第二第三の衣服費、家賃などが同一であらうとは現在人間の享樂氣分を以つて可能とは思へないのである。エンゲルの發表から約九十年の距りある今日では收得の增加は衣類の費、住みよき家へと消費されることはいとも自然とさへ考へられるのである。第四は斷然その通りであると云へやう。如何なる人もが收得增加と共に慾求するものは裝飾品であつたり旅行であつたりするので此の點時と所を超越して眞理だと言つて差支へあるまい。

一九一九年亞米利加合衆國で賃金生活者家族一二、〇九六家族について年收九百弗以下から年收二千五百弗以上まで七種階級に分類して調査した表がある。その比率は以下の如きものとなつてゐる。

所得程度（單位弗）	消費品種 %					
	食糧	衣類	家賃	燃料	家具等	雜費
九〇〇以下	四四、一	一三、二	一四、五	六、八	三、六	一七、八
九〇〇—一、二〇〇	四二、四	一四、五	一三、九	六、〇	四、四	一八、七
一、二〇〇—一、五〇〇	三九、六	一五、九	一三、八	五、六	四、八	二〇、二
一、五〇〇—一、八〇〇	三七、二	一六、七	一三、五	五、二	五、五	二一、八
一、八〇〇—二、一〇〇	三五、七	一七、五	一三、二	五、〇	五、五	二三、〇
二、一〇〇—二、五〇〇	三四、六	一八、七	一二、一	四、五	五、七	二四、三
二、五〇〇—以上	三四、九	二〇、四	一〇、〇	四、一	五、四	二四、七
各種所得平均	三八、二	一六、六	一三、〇	五、二	五、一	二一、三

以上の中、年所得九百弗以下と二千五百弗以上を比較すると大體の比率比較が可能になると想はれるが、其の方法で九百弗以下の人より高收入者の食糧費はずつと少い比率でこと濟むやうである。同じ兩端の所得者で研究を進めると衣類の比率は所得增加と共に加重し、家具裝具費も增加、之に反し家賃燃料は比例的より減少となつてゐる。之をエルンスト・エンゲルの觀測に照合すると彼の第一則は米國の表と一致し、第二則は稍々差を生じ第三則も同樣少差あるを發見するが第四則はまたしても完全に一致するのである。

茲に於いて吾等は以上四則から消費經濟の實際運用に左の如き方則を抽出し得るのである。卽ち人間は所得增と共に先づ衣類と旅行、觀劇、溫泉等に多くの餘剩收得を消費する傾向がある。其の意味は商業主義の消費經濟關係者の注意を惹くのであり、國家財政上の好參考材料を提供するのである。勿論所得累進稅の如き構想の基礎はここに存するのであるが、尙將來種々なる消費規正がこの點より發足するだらうことは想像に難からざるものがある。

上記の傾向方則に關聯して今は敵國ではあるが參考たり得るので左に亞米利加一九三七年の國民的支出とその割合を數字で示さう。

支出種目	金高（單位百萬弗）	比率
食糧	一六、八六五	二八・五%
家屋	九、五〇六	一六・〇%
家廻り費	五、二八五	八・九%
衣類	五、二六一	八・九%
自動車	三、七八一	八・四%
醫療	二、二〇五	三・七%
享樂	一、六四三	二・八%
家具、裝飾	一、四二二	二・四%
個人費	一、〇三二	一・七%
煙草	九六六	一・六%
運輸（自動車除ク）	八八四	一・五%

以上の分解研究は不必要でないと思ふのでその主なるものに就いて說明して見よう。まづ食糧費が約三分の一を占め金高にして百七十億弗で總國民所得の三分の一を支出してゐる。第二位は家屋關係である。食糧支出の約半分で金高では九十五億弗比率では一六%に上る。同じく家屋關係で電燈、瓦斯、家庭用電力、洗濯、家庭雇傭、電話、燃料など所謂家廻りの費は五十三億弗で相當に巨大な費目である。家具及び家庭裝飾品は十四億弗だが之を家賃、家庭裝飾品などと加算すると合計百六十億弗餘總國民支出の三二%で殆んど食糧と

讀書	教育	其他	小計	贈答品	租稅	貯蓄	總計
五五一	五〇六	三〇七	五〇、二一四	二、一七八	八八九	五、九七八	五九、二五九
●九%	●九%	●五%	八四・八%	三・七%	●五%	一〇・一%	一〇〇・〇%

比肩するに足るのである。

衣類費は上表に依れば五十三億弗であるが之を、衣、食、住の三生活要件だけで見ると其の合計は三百八十億弗となり其の年の總支拂基金の三分の二に相當するのである。

自動車購入費及びその運用費は三十八億弗でありその大きな部分は享樂用であつたと想はれるが、此の他に純然たる享樂及び個人費としてそれ〳〵六億弗及び十億弗、三者合計六十四億弗は注意に値する。租稅の項が僅かに八億八千九百萬弗であるのは、僅かに個人所得稅、市民稅、個人財產稅が計算されてゐるだけであるからである。

上表の中吾人の興味を唆るものは贈答品の二十一億八千萬弗で三・七%の支出率であることだ。是と比較して讀書と教育の合計十億五千七百萬弗比率僅かに一・八%であるのは、もし我が國のこの種統計と比較研究を爲し得るならば想ひ半ばのものがあるのではあるまいか。貯蓄基金の一〇%强金額で六十億弗に近いのは常識的と言つて良からう。

尙以上の調査を一歩進め全調査消費者數三千九百萬を三分して千三百萬宛を單位とし、一種所得七百八十弗までの者、二種所得千四百五十弗迄の者、第三種を千四百五十弗以上の者として各種千三百萬人づつの平均支出總計及び比率を見ると左表の如きものとなる。

支出種目	總計支出（單位百萬弗）	各種グループ比率 第一種%	第二種%	第三種%
第一種	五、三一〇	一八、四	三一、五	五〇、一
第二種	二、六二一	一五、九	二七、六	五六、五
第三種	一、四二二	八、四	一五、九	二六、四
食	一、三三八	七五五	一三、九	二四、六
家屋	七五五	四四六	七、九	一三、八
家廻リ費	六一八	三六二	六、四	一一、三
衣類	二〇三	一一、九	二、一	三、七
自動車	一五五	九一二	一、六	二、八
醫藥	一三四	七九二	一、四	二、五
享樂	一一五	六八二	一、二	二、一
家具裝飾	一一二	六六二	一、一	一、九
個人費	一〇五	六一八	一、〇	一、八
煙草	九四	五四六	九	一、六
自動車外運輸	八四	四九七	八	一、四
讀書	七一	四一六	七	一、二
教育	三〇	一七五	三	五
其他	三五	二〇五	四	六
贈答及稅	一七一	一〇一六	一、七	二、九
貯蓄	一、二〇七	七、一六〇	一、三	二、三
合計	一、九〇	一〇〇・〇%	一〇〇・〇%	一〇〇・〇%

上表の合計に就いて見ると第一第二階級の二千六百萬單位は第三種の一千三百萬單位の三分の一しか支出をしない譯である。特に貯蓄（之は消費ではないが）に至つては其の五分の一程度であるは注意に値す。

以上は亞米利加資源委員會の調査編纂になるもので極めて信頼可能なものと註されるが他山の石、消費傾向の指針であり之を我が諸統計と比較して今は敵である米國國民の生活動向を親知するよすがともなるのである。尙同じ調査に於いて以上の分類に依る三階級の平準個人別消費比率が揭げられてあるので別記して見ようと思ふ。

消費品類別	比率 第一種	第二種	第三種
食糧品	五〇・二	三七・五	二一・七
家屋	二四・四	一八・五	一三・八
家廻リ費	一一・四	一〇・〇	八・一
衣類	一〇・〇	九・五	八・五
自動車	三・三	五・三	七・二
醫療	四・三	三・九	三・六
享樂費	一・八	二・六	三・〇
家具、裝具	二・五	二・一	二・四
個人費	二・二	二・一	一・五
煙草	二・四	一・七	一・四
自動車外交通費	一・三	一・二	一・三
讓書費	〇・五	〇・六	〇・八
教育費	〇・六	〇・五	一・〇
其他雜	二・八	三・七	六・一
贈答及個人稅	一九・五	一・八	一九・一
貯蓄	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇
合計			

を動かしたのは事實であり、その限りでは生産に對し消費の先行性を是認せねばならぬやうにも考へられるのである。

貯蓄

貯蓄は消費ではない。併し消費基金の中から出て來るのは事實である。貯蓄は法人企業の利潤からも積立てられ將來の

即ち第一種細民階級で年消費七百八十弗以下のものは食料に五割以上の支出を甘受する立場にあり、家賃に二四%強を支拂ひ約七十五%を是等二項目に取り去られるのである。之に比し第三種階級である年收千四百五十弗以上のものは所得の三分の一强だけを以つて食糧と家屋費を支辨してゐることとなり生活の餘裕を感ずる立場にある。而して之等兩端の生活者達が貯蓄に於いて同一率にあるに反し中間の年收七八〇弗—一、四五〇弗の消費單位階級がその十分の一にも足らぬ貯蓄に止まるのは注意すべき點である。

以上の三表に依つて研究を進めると生産企業家は其の生産動向について示唆を得るであらうし、政府は消費の健全性につき又は社會政策樹立について何等かの參考を抽出するであらう。兎に角以前の如き自由經濟では消費統計が直ちに生産

生産資本となるが一國の資本基源は國民ひとりひとりの貯蓄からするのである。

個人は必ずしも社會將來の生産道德を意識して貯蓄するのでないかも知れぬ。老後の計としあるひは子弟教育のために又は家族中の不幸の日の豫備として所得の一部を割愛節儉する。それが積みかさなつて、銀行を通じ又は國家の貯蓄機關を通じてそれぞれ生産方面に流れ吾等の明日の爲に使用されるに至るのである、

貯蓄は消費ではない。併し貯蓄は貨幣の貌で其の儘金融機關に死藏されるのではなく、一度び銀行や信託會社の門をくぐつて直ちに生産部門の資本として消費される。つまり生産財消費を行ふのである。この限りでは貯蓄を解して間接消費と言ふことも可也となるのである。

近來貯蓄の必要を知らぬものなく政府は之を奬勵し貯蓄吸取機關は巧みに宣傳を行つて人々將來の計を樹てさせようとするが、それでも尙六十歳以上の人の九割は他人（子孫親類を含めて）依存の生活を餘儀なくされてゐると亞米利加の統計は語る。尙同じ國の保險會社の調査するところでは、二十五歳にして略々同一條件のもとに人生を發足せるもの百人の中四十年後に於いて一人のみが富み、四人は稍々佳、五人は尙勞役し、三十六人は死し、五十四人は他人に生計の資を仰ぐと言ふことである。むしろ悲慘と言ふべきである。

我が國の他人又は親類依存は個人主義國群のそれと其の精神を異にするのであつて、假りに六十五歳にして嗣子の家に同居したりしてもそれは救護されてゐる意味ではなく、この老後の樂しき日の爲に親なる人は子である青壯年に準備行爲を執つてゐたのであつて、之を救貧的意味の西洋式他人依存と混同してはならないが、それでも貯蓄に關する限り亞米利加の以上の如き數字的說明は他山の石である。

資本は過去の勞働の蓄積であると云はれるが、吾等はそれを修正して過去の勞働だけでなく、利潤及び地代、利子の蓄

積でもあるとするので、總て人間の所得の一部が保存され蒐積されて資本を爲すとも云ひ得るのである。本章第四項に揭げた表で見ると亞米利加では消費基金——所得の一劃强が貯蓄されるやうであるが、この比率はマイナス所得を相殺せる結果であつて、貯蓄だけの積極的面からするともう少し貯蓄率が高くなる。「米國の消費力」と云ふ調査でモールトンは西紀一九二九年の國民貯蓄は百七十七億弗であるとしてゐる。この他に二十二億弗の會社積立がある。一九二九年は米國が戰前到達した景氣の最高峯であつて其の年の國民所得九百億弗に上つたとされてゐるので以上の如き大量の貯蓄があつたものであらう。それ以前には一九二三年頃に百二十億程度の貯蓄が記錄され、一九二七年には本章前項に述ぶるが如き約六十億弗の消費基金よりの貯蓄が記錄されたのである。

資本が蓄積されれば當然投資されねばならぬ。投資は個人が自己企業に又は緣故投資にと之も莫大な額が使用されるが、大體は金融機關を通ずるのである。我が邦では信用組合、各種銀行、大藏省貯金部、保險會社の色々其の他無盡會社となつてゐるが、表面に表はれないもので市中の高利貸、質屋などの介在も貯蓄に由來するものであり前者などには國家機關の監視を必要とするところが多い。

序でに書きとめて置きたいのは西紀一九三九年亞米利加の生命保險契約高は千百四十億弗、貯蓄預金總計二百五十億弗、建築會社資金約五十六億弗、銀行及び信託會社數（一九四〇年六月現在）一四、九五二行、半ば高利貸じみた貸付金融十九億弗强などの統計である。要するに、上揭數字は吾等の貯蓄に於ける立場を他國との比較に發見する便であつて忽せにすべからざるものなのである。

第七章　企業

第一項　企業の國家性

國家意志と企業

企業とは國家興隆、人間福利增進を目的とせる起業とその經營である。業を興し、物財を生產し之が配給を圖り、一般消費に便する活動と其の本據、之を企業と呼ぶのである。

舊資本主義下の企業は自己計算に依り他を排除又は他と競爭して行はれるのであつた。舊い企業理念は利潤追及にあつたので、その合同も分裂も悉く營利本位であり、その同じ心持の累加は終に自家撞着となつたのだが、新經濟理念の企業は、道義を先にし國利民福を念として起らねばならぬ。企業も國家生活、國民生活の一環をなす趣旨の徹底があつてこそ企業が人生との調和を保つのであり、經濟學と人生との密接なる相關性が意味をなすのである。

新しい經濟構成の中の企業には國家意志の滲透が考へられねばならぬ。そのため國家が直接に企業を營む場合、國家が民營企業を統制する場合、及び比較的民意に委す中小企業の場合などが構想されるが、その何れにも一貫せる國家計畫色

彩の一致調和を見る建前である。皇道經濟學ではこの色彩の厚薄に依つて種々なる分類を試みるし、それから企業それ自身の形態を分析類別する場合もある。前者は企業を縱に觀察し後者は橫からの格づけと考へる事が出來る。

皇道主義經濟企業の舊資本主義企業と異るところは、その政治性と倫理性とにある。前者企業には國家意志の滲透あるが故に當然政治的考慮が先行するのである。企業を營利一點張りの動機に發足するのでなく民生の福利を思惟するが故にそこには倫理性がある。私は本項劈頭企業は人生の福利を目當てに起業するのだと言つたのは卽ちここの事である。

企業は營利本位であつてはならぬと言つても營利を度外視して可なりとの意味ではない。國家自身の企業でも企業自身からは利を擧げ之を國家資本として利用するか又は國民の直接福利のために國費として支出するか、兎に角利益を圖るのは民業と同一理念の上に立つてよいのである。要するに皇道經濟も資本主義の止揚であつてその覆滅のあとに新造營を試みるのではないので、適正利潤は企業の報酬として承認されるのである。併し利益なき企業でも國利民福の爲ならば起業經營が進行されねばならぬとするところに皇道經濟の特色がある。」

國家企業と職員

近代經濟に於ける國家企業は廣汎な範疇に亙る。我が邦が戰時實驗しつつある計畫經濟は戰時なる非常時型のみではなく、將來平常時に於いても保持育成される運命にある經濟形態が多いのである。果して然らば爰に吾等の研究して置くべき重大な問題がある。それは官吏に依つて行はれる企業の非能率と云ふ事である。實際問題として我が半官半民事業または官業などに其の弊なしとはしなかつたし、將來とて同一種族の官公吏の執行する企業が能率的に急變するとは考へられない。

然り、官僚は積極性を缺き企業心乏しく、ある程度勤勉ならずと言はれる。新しい秩序下の企業がこの同じ官僚の經營下に置かれるとせば、私の皇道大我主義も彼等の急遽な能率化に信を置かないかも知れない。併し私の意圖するところは政府企業を產業人に運用せしめ、その人々を官公吏として責任觀念の入れ代へを行はしめると言ふのである。つまり民間人を擧げて政府事業を經營せしめるのである。現在の我が政府の行き方は殆んどその方向に精進しつつある。卽ち社長徵用に現はれた理念、營團に於ける民間人の總裁及び理事就任、統制會などの役員、幹部の事業界からの任命、而してそれ等の就任者達が國家に對し執るべき責任など、吾等今後の經濟形態中に生き榮える方法であると見るのである。かくて官業及び公企業の不能率なる非難に滿足なる解答を與へると信ずるのである。

指導者原理

指導者原理は統裁主義原理とも呼ばれる。伊太利のファシズム、獨逸のナチズムの國民統率原理であつて、一國は一人の指導者のもとに結束し指導者と國民、民族は一體不可分の關係に立つと言ふのが其の理論である。我が國で之を全體主義の指導者原理と呼んでゐるが蓋し適譯だと惟ふのである。

昔から日本は　君民一如の國體を堅持するのである。

卽全、全卽個の理念である。國家は個人を保護し個人は國家と休戚を共にすると言ふ以上に、國家は個の擴充であり家の擴大である。小我が生成發展して大我を造すのである。乃ち個卽國家と發展するのである。

かかる國體には　現身神でまします

上御一人が統帥指導者にあらせられる。其の實指導者と被指導者の別はなくて國民はひたすらに

大君に歸一たてまつるのである。

我が邦の指導者原理はここに淵源するが故に總理大臣が統裁者ではなく、其の下の諸々の國政責任者産業擔任者等が指導者であるべき筈は尚更ない。たゞ民主主義の蛙鳴蟬噪に對し吾々は國家の責任者の上下一貫して上御一人に歸一し奉る國政の相貌をよく認識し御旨に依つて國政を支配し經濟を指導するので、苟も大臣、總裁、會長等の專制的我が儘は毛頭許容すべからざるものである。

多年の習慣から兎もすれば民主主義の反對は專制型政治だと解するものがあり、統裁主義は會長、社長、市長、村長の獨斷を容認するのだと合點する人々もあるらしいが、少くとも我が邦ではさる誤謬は犯されてはならないので、主宰の位置にある人はあらゆる調査とあらゆる諮問と且つあらゆる建言、申告に傾聽して後一事一件の處斷に當るべきである。それ故に私は株式會社にまれ、營團にまれ、社長、總裁に附屬するに强力なる評議員會を以つてすべしと主張するのであり、之を國政の場面に應用しては帝國議會の職能をして强力なる政府のブレーンたらしめ同時に有能なる監督機關たらしめよと提言するのである。たゞ議會に政權爭奪の途を與へることは以前の辛い經驗よりして屹度回避さるべきは言ふ迄もない。」

第二項　企業形態

縱に見る企業形態は、國家意志滲透の厚薄に依つて分類されると前に述べたが、その區別を左に表記して見る。

國家綜合經濟計畫
- 國營公營
  - 專賣業・官公企業
  - 營團及び金庫
  - 民有公營企業
  - 半官半民企業
- 國家統制
  - 統制會
    - 統制組合
    - 民營重要物資生產企業
    - 公、民營配給・運輸企業
  - 自治統制
    - 農業
    - 中小工業
    - 中小商業
    - 享樂業

國營・公營企業

專賣企業の官營

近來企業の國營化は驚くべき速度で經濟界を風靡しつゝある。殊に今次大戰に拍車をかけられ殆んど企業の各分野に於いて國家の容喙なきところなきに至つたと言つて過言ではない。たゞ此の風潮がその儘押し進められるかどうかは未知數だが經濟政策學の面からはさうした行きかたが歡迎さるべきものと私は考へるのである。

我が國で純國營型の企業と言へば、煙草專賣、鹽、樟腦の政府專賣がある。鐵道及び港灣事業がある。電信、電話、郵便も官營企業である。給水、市街、電氣鐵道、電燈電力業などの公營がある。政府の大藏省、舊遞信省、東京都交通局等企業擔當者として著しいものである。米國は民有民營企業の本家本元であり、今尚電信も電話も私企業に委してゐるのだ

が、それでも公益事業の公營民營傾向は澎湃として起つてゐるのであり、最近では發電事業に附帶した大水堰の多くは國家企業となつてゐる。我が鴨綠江の水豐ダムと比すべき三つの水ダム、卽ちアラバマ州のマッスル・ショール、アリゾナ州のボルダーダム、及びオレゴン州グランド・クーリーの如きその造築も、發電もそれに起因する水利も政府事業となつてゐる。その他米國では市有・市營事業は甚だ多いのであつて、電燈、電車、港灣等に營業上の長所を發揮してゐるやうである。鐵道の政府事業化は第一次世界戰中に、時の大藏大臣マカズーの主張で西紀一九一七年十二月から、一九二〇年三月に亙つて實踐されたが、此の政府業は明らかに失敗と烙印され、この短期間に二十億弗の損失を國庫が負擔する不成績を記錄するのであつた。米國の鐵道は今では民間企業である。

歐洲の國家企業趨勢は米國よりは旺盛である。白耳義、ブルガリヤ、獨逸、ルーマニヤ、伊太利、蘇聯の鐵道は概ね國有國營であるし、郵便、電信亦然りである。蘇聯は共產主義の建前から諸企業あげて國家のそれであるのは言ふまでもない。佛蘭西は燐寸の專賣を行つてゐるし南米諸國、中米諸小國では公營富籤の制度を持つてゐる。其の他公營起業としては道路、學校などもあるが是等は經濟的ではなく單なる國家の文化設營として裁判所などと共に經濟學の範疇の外に置かるべきものである。

國家企業は是までのあり方では（一）收入の目的で經營して來たものと、（二）民俗の純良性保持の爲と、（三）國民の便宜を圖つたものとあつた。我が邦の煙草、鹽、樟腦の專賣は第一部類に屬すると考へられ、阿片專賣、富籤發賣、アルコール專賣等は第一類第二類の混用であり、郵便、電信の官營などは完全に奉仕を主旨とする第三類に屬するやうである。

國家は市民の從僕的奉仕者だれとの個人主義的理由で、國有國營の奉仕的企業を多數多種に亙つて起すべしと論ずる風潮が歐米の一部にある。卽ち公園に於いて音樂を奏で、夜間公衆の集合地點で敎育的、娛樂的映畫の無料演出を推奬すると同じ意味に於いて、家庭用水、市街鐵道などの使用を自由無料ならしむ可しと言ふのである。右は社會政策派の提唱であつて吾等のやうに國家企業を經濟學上の一原則として承認してゐる譯ではないが、亞米利加では相當な勢力をその說に認めてゐるのである。

國家企業は計畫經濟下に於いて當然增加の途を辿ると考へられるが、その資本はどこから捻出されるか、其の從業員は官吏か、國家企業の中の營利的なものに政治的策動はないかなど一聯の疑問が答へられねばならぬので、先づその中の資本に關して概說して見よう。

國家資本

我が國の現在に於ける國家資本を發見する事は頗る困難と思はれる。殊に最近數年統計の發表なき國家事業の累積する現在その正確なる資本狀態を知る由もないのであるが、昭和十二年の支那事變以來大飛躍をなしたのは事實である。たゞ吾等の基礎觀念を造り上げる爲に、第八十一議會に報告された昭和十七年三月現在の我が國有財產の額を擧げて見よう。

土　地	三、一二九、四〇九	千圓
立木及び竹	二、九九〇、一七三	〃
建　物	二、四一〇、一六七	〃
工作物	四、四四二、三〇七	〃
機械器具	二、一二六、五七五	〃
船　舶	二、一七七、五五五	〃
鑛業權等	一、七四三	〃

株式及び持分	一、四二一、一七三	〃
公共用財産	二、一〇九、三六九	〃
公用	八五、五三八	〃
雜財産	三三、三二六	〃
合計	二〇、九一八、三三九	〃

上の數字は五年前の發表より七十二億六千萬圓程度の增加となつてゐるが、現在經濟綜合計畫の行き方からすれば尙此の上に每年國家財産の增加が期待されるのである。勿論國家財産は國家の企業資本ではなく、その中土地の一部、立木及び竹の一部、建物の一部と數へて見れば大體どの項目にも企業資本の要素を發見するのである。就中、機械器具、船舶、鑛業權、株式及び持分などに直接企業との全面的接觸を見るのである。

以上は我が政府の發表に依り企業資本の所在とその推定とを書き留めたのだが、將來國家企業資本の增加はいづれの邊から來るか。私の見解は左の通りである。

一、國家企業の利潤
二、遺産相續稅を國家資本會計とする
三、財産稅を重くし國家資本會計に移す
四、民營業を國家に移す場合資本を其の儘國家資本會計にて引繼ぐ
五、特殊銀行よりの借入金

現在に至る我が邦の官業から由來する利潤は一旦は特別會計に繰り入れられても終には國家の歲出を賄ふ爲に費消せられるのが普通だが、將來は政府の工夫に依り其の大部分を國家が貯蓄し企業資本に編入する事としたいものである。特に經常費にでも臨時用にでも稅收入の補足を目的とした專賣的企業の收入でもその一部を割愛して企業運用に廻し生産の用に供する事は條理の自然でもあるやうに考へられるのである。

二、三の遺産相續稅、財産稅については租稅の研究にゆずる事にするが、概言せば、新理念、經濟では遺産に依る遊食怠惰な階級を壓縮する事を目的の一として考へられる可く、さりとて財産一代制では蓄積資本の出どころを失つてしまふので、遺産稅を重くし遺産者の意志を尊重してその稅源を國家の經常又は臨時用とする事なく之を國家企業資本として利用するならば其の利は一石二鳥的となる譯である。財産稅についても同樣であつて、國民一人が過大な財産を有し財産所有だけに興趣を感じて文化的倫理的面を無視し、社會生活を無味乾燥な數字的貨幣生活に墮せしむるを防ぐ爲と同時に、國家資本の源を涵養するために、財産稅を以つてするならば、玆にも一石二鳥的利益が考へられるのである。蓋し如上の生活向上の志向は、納稅者の國家資本基金への寄與と言ふ滿足と共に、從來ややもすれば惡稅視せられたるこの種租稅に生命を付與するからである。

民營企業を國家に移す場合と言ふのは、例へば米穀取引所を國家が收用するとか（假定）造船所を政府が買上げるとかの場合ありと想定し、その買上代金として公債を付與する場合、國家の企業資本は增加する意味であり、かうした行き方が將來頻々として起るのではないだらうか。但し日本發送電株式會社設立の如く、資本持主は從前通りの株式會社で企業經營だけを政府の責任に移す方法も考へられるが、此の場合でも終局まで國家が資本の肩替りせずして民有國營の型を其の儘ではすまされぬものと信ぜられるのである。

そのつぎに國家の企業資金としての一時借入金であるが、戰時急速なる生産擴充を遂行する爲には非常手段に訴へても資金の調達が計畫されねばならぬ場合が多々ある。我が邦の現狀では今次戰爭下に於いて直接國營企業として重要物資、軍需品の直接生産を爲してゐるものは、陸海軍の工廠の他に勘くないが、その他に準國家企業として統制會社傘下に收

めたる企業に對し又は國策會社の多くがある。これ等に對し非常融資の必要上、昭和十五年十月十六日に、銀行等資金運用令が制定された。右は企業資金を積極的に國家目的に運用せんとするもので政府は、(一)金融機關の資金運用計畫の變更命令を發し、(二)流動資金貸出調整、(三)融資命令をなし得る規定である。即ち國家意志に依る企業の大活躍を必要とする建前から、國債應募、大藏省貯金部預入、政府の保證ある債券應募引受あるひは買入から、不急不用又は不健全企業への投資に掣肘を加へてそれを政府目的の事業に振り向け、又は直接國家的事業への融資等を、銀行等金融機關に命令を發するのであつて、之を國家資本と考へる事は早計ではあるが、國家企業は國家の非常目的達成に當つては、かうした資本運用の行き方もあるものとして吾等學徒の記憶せねばならぬところである。

國家企業と從業員

國家企業には株主總會はない。國家企業の經營責任者は國家の任命するところに依るのである。その出所進退官吏に準ずるのが建前である。併し、國家企業は一企業單位の內部から盛り上る力を認識せねば成功上瑕瑾がある。下意上達を諸事運行の根幹規範の一とする新體制下では從業者の意見採擇の制度は是非採り入れらるべきである。

舊資本主義下のあり方では經營者は自己計算に依り、事業損得の危險を自らするものなるが故に當然餘剩利得も自己收入として獲得したので世間之を異とするものはなかつたのである。新しい皇道主義下の國家企業も政府意志の代表機關である總裁、理事長などの指揮統率の下にあり、所得指導者原理の徹底を圖るのであるが、指導者統裁主義は專制獨善主義ではないのであつて、下より盛り上る要請に對しては充分に注意が拂はるべきは勿論であり、日本の諸國家企業に一貫するあらゆる手續の制度化される事を希望せざるを得んのである。

國家企業の下部機構又は下部從業員をして事業經營に參加せしめる方法としては私に具體案はない。併し常識的に考へて一種の評議員會又は參與會の如きものを以つて統裁の頭腦たる役目を執らしめると同時にその監督的位置を保有せしめる事、而して評議員會構成員としては總裁自身の選任して政府之を承認する者と及び關係企業內の職員間より自由選任された者を以つてすることは望ましいと考へるのである。かくて企業の經營は上下一貫、事務の敏速化、統一化、生產の合理化、論功行賞の公正などを想像し得るのであつて、經濟に於ける物よりは人と云ふ生命ある企業を玆に實現するのである。

政治的策動

國策的企業を通ずる大弊害は、企業に絡まる政治家の策動とその利用から由來する仕事それ自身の混雜である。幸ひにも我が國ではかかる事態の發生は皎の星の如きものでしかなかつた。がそれでも國鐵の疑獄事件に連座して政府の高官、政黨の大物などが刑事上の被疑者となつた場合はあつた。亞米利加は此の點では問題の最も醜惡なる相を呈する國であつて、國策企業のあるところ必ず議會關係よりする干與、議員の爲にする策動、政商的企業家の便乘的機會獲得などが發生し、喧々囂々たる光景出現となるのである。

かうした場面は新經濟組織のもと問題とはなり得ないのではないかと想ふのは、吾等の全一、大我主義は經濟行動の動機を個人の利潤追及に置かないのであるから、自然新企業を自己の勢力扶殖の具に供したり、己の收入の途に充て　とするが如き個人又は一群の個人の存在は考へられないからである。併し過渡期に於いて政治家の不心得者、一地方の權力家などが舊態依然政府企業に對し政商的心持を以つて臨むものあらば、政府は峻嚴なる態度で彼等を遇すべきであり、同時に政治の新理念滲透についての敎育は寸時も忽諸に附してはならないのは勿論である。